



Title	現代日本語における時間を表す複文の構文文法的研究 －日本語文法研究の通言語的基盤を求めて－
Author(s)	松浦, 幸祐
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/88128">https://doi.org/10.18910/88128</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 博士論文

現代日本語における時間を表す複文の構文文法的研究

—日本語文法研究の通言語的基盤を求めて—

提出年月 2021 年 12 月

言語文化研究科日本語・日本文化専攻

氏名 松浦幸祐

## 要旨

本稿の目的は、Croft による言語類型論的構文文法である Radical Construction Grammar (Croft 2001, 2020 など) を理論的枠組みとして、個別言語の研究である現代日本語の文法研究に対して通言語的・言語類型論的基盤を取り入れることで得られる新たな視点を示すことがある。具体的には、現代日本語における時間を表す複文（以下、時間節構文と呼ぶ）と、それに関連する構文として、裸名詞句構文（無助詞主題構文と助詞省略構文の総称）に関する議論を行う。本稿では、以上の構文に関連する現象を例に、全部で 3 つの論点を扱うが、どの論点においても、これまで先行研究で蓄積してきた知見を損ねることなく、かつ、先行研究に残されていた問題点を自然に解消できることが示される。

本稿は、第 1 章から第 6 章までの全 6 章で構成される。以下、本稿の要旨を各章の構成順に述べる。まず、第 1 章では、本稿の目的と構成を述べた上で、本稿が第 3 章から第 5 章で扱う 3 つの論点、すなわち、「構文の言語固有性」「構文間のネットワーク関係」「構文における意味と形式の対応関係」のそれぞれを整理して示す。具体的には、各章で扱う構文や現象について、先行研究の分析、先行研究に残されている問題点、本稿による提案の要点をこの順で簡潔に紹介する。

第 2 章では、Radical Construction Grammar の中心的な主張を説明し、第 3 章以降の議論のための理論的背景とする。具体的には、この文法理論が「言語の基本単位は構文である」という前提を徹底的に推し進める中で主張する「普遍的な構文やカテゴリは存在せず、特定の構文内に現れるカテゴリや特定の言語体系内に現れる構文は、その構文や言語に固有の単位である」こと、「構文はネットワークを成し、ネットワークにおける関係は、スキーマと事例の関係によるものである」こと、および、「構文内における統語的要素と意味的要素は、必ずしも類像的には対応しない」ことについて説明する。

第 3 章から第 5 章は本稿の本論に当たる。まず、第 3 章では、日本語の無助詞主題構文を例に、構文の言語固有性に関する議論を行う。先行研究（山泉 2013 など）では、日本語の無助詞主題構文は、英語などに見られる左方転位構文（Left Dislocation construction）の一種であると分析するモデル（本稿では「左方転位モデル」と呼ぶ）が提案されている。第 3 章では、このモデルに残されている 2 つの問題点として、扱える例の範囲に限界があることと、そもそも日本語の無助詞主題構文と英語の左方転位構文とでは、表す意味の範囲と形式の組み合わされ方が異なっていることを指摘する。その上で、その問題点を解決するためには、

日本語の無助詞主題構文は日本語の文法体系に固有の構文であって、英語の左方転位構文などの一見類似している構文であっても異なる単位として捉えなければならないことを述べる。

具体的には、日本語の無助詞主題構文に関して、以下のモデルを提案する。すなわち、日本語の無助詞主題構文の規定に代名詞的要素の存在は関わらず、かつ、無助詞主題構文が持つ主題設定の意味は、この構文の構文的意味であるという分析モデルである。その提案の下で、以下の3つの考察を行う。第一に、左方転位モデルで代名詞的要素の「有形化」と捉えられる操作に関して、実際には、主節内に代名詞的要素があるかないかによって異なる構文的意味が表されており、したがって両者は異なる構文を形成していると指摘する。第二に、英語の左方転位構文と日本語の無助詞主題構文を対照するには、Croftの構文文法でも採用されている意味地図モデルが有用であることを示す。第三に、本稿の提案は、左方転位モデルの抱える問題点を解決するだけでなく、これまで国語学や日本語学で蓄積してきた意味記述とも矛盾せず、むしろ、それらの記述を十分説明できることを議論する。

第4章は、いわゆる日本語の「複文」の一つと数えられる無助詞時間節構文を例に、構文間の関係、特に、同一の形式が異なる意味を持つ場合の関係や、構文同士が形成するネットワーク関係に関する議論を行う。第4章では、まず、複文研究における関心が主に従属節と主節の意味的関係に基づく分類にあり、それらの意味と形式との対応という観点はそれほど注目されていないことを確認した上で、それによって生じる2つの問題点を指摘する。その問題点とは、無助詞時間節（例えば「食事をするとき、テレビを消した方がいい。」の下線部）と形式は同じであるが異なる意味を表す構文（例えば「食事をするときが一番楽しい。」の下線部）との関係に関する議論があまり十分ではない点と、無助詞時間節構文の記述や分析に関して、時間節が主節を連用修飾できる理由に関する議論が重視されていない点である。

以上の問題点に対して、本稿は、無助詞時間節構文は、無助詞主題構文に動機付けられて存在しているという分析を提案する。また、それと同時に、同じ「食事をするとき」が主節事態を連用修飾すると（すなわち、無助詞時間節であると）解釈されるか、あるいは特定の時点を指示すると（すなわち、連体修飾節を伴う名詞句であると）解釈されるかは、それが生起する構文全体を基に決まることを議論する。さらに、無助詞時間節構文が「時間状況設定」の意味を持つ理由は、無助詞主題構文が持つ「主題の設定」の意味から拡張されたものであることと、そのような意味拡張には、無助詞主題構文が持つ「語用論的関連付け」とい

う構文的意味が貢献していることを示す。また、無助詞主題構文が持つとされる「発話行為的意味」が無助詞時間節構文には観察されないことなどから、無助詞主題構文と無助詞時間節構文は、互いに関係を持ちながらもそれぞれ個別の構文として存在していることを述べる。

第5章では、時間節構文の表す情報構造と、裸名詞句構文の形式的区別とを適切に扱うための議論を行う。これら2つの論点をめぐる先行研究では、それぞれに分析や事実の指摘が行われているものの、いずれの論点に関しても問題が残されていると言える。まず、時間節構文の情報構造に関する分析（益岡 1997など）では、時間節における格助詞の有無と情報構造が対応すると主張されているが、益岡自身が述べる通り、実際には、格助詞の有無と情報構造は必ずしも対応しない場合がある。また、裸名詞句構文の形式的区別に関しては、各研究（加藤 2003 や丹羽 2006）による記述がやや散発的である点を挙げる。

これらの問題点を解決するために、本稿は、まず、郡（1992など）によるイントネーションと情報構造の対応関係に関する主張を参照する。その上で、その対応を構文として捉えようとするならば、郡の主張は、統語的要素と意味的要素が非類像的に対応することを前提にしてはじめて適切に捉えられるものであると述べる。すなわち、イントネーションのパターンと情報構造が構文を成すと考える場合、焦点を表す形式要素そのものではなく、その直後の要素にアクセントの弱化という形式的特徴がある構文と、前提を表す統語的要素も焦点を表す統語的要素もアクセントの維持という同様の形式的特徴を持つ構文という2種類の構文によって情報構造が表し分けられているということである。

その上で、本稿では、時間節構文における情報構造の表し分けと、裸名詞句構文における形式的区別も、郡の主張に基づく上記の2つの構文に動機付けられて実現していると主張する。具体的には、まず、時間節構文の情報構造の表し分けに関して、主節部分のアクセントが異なる「焦点化時間節構文」と「非焦点化時間節構文」という2つの構文を提案する。その上で、本稿の提案する分析が妥当かどうかを、東京方言母語話者を対象に行った読み上げ調査の結果を基に議論する。また、この提案の下で、先行研究（定延 2013, 岩崎 1998など）を基に、時間節が伴う格助詞の「に」や「で」が表す意味は、主節事態と時間状況の間の時間関係の明示であると述べる。

続いて、裸名詞句構文における形式的区別に関して、第3章で提案した「無助詞主題構文」にイントネーションの観点を加えて規定し直すとともに、新たに「名詞句焦点の助詞省略構文」と「全体焦点の助詞省略構文」と呼ぶ2つの構文を提案する。その上で、時間節構文に

に関する議論と同様に、本稿の提案が妥当であるかどうかを、発話調査の結果を基に検討する。また、本稿の提案によって、裸名詞句構文の形式的区別に関する先行研究の指摘は統一的な見地から説明が与えられることとなる。

第6章では、本稿で議論した上記の内容を整理するとともに、本稿が日本語の文法研究に対して持ち得る意義および本稿に残された課題を述べ、本稿を総括する。本稿の議論が持ち得る意義としては、日本語の文法研究に対して通言語的基盤を持ち込む利点が示せる点と、そのような通言語的基盤を求める研究として、「構文」という単位が有用であること、また、構文を基にするそのような研究は、結局、国語学や日本語学で言われているような、文法研究を意味と形式の対応関係の考察として捉える考え方の遵守でもあることを挙げる。

## Abstract

With the theoretical framework of Radical Construction Grammar (Croft 2001, *inter alia*), the purpose of this dissertation is to provide a new perspective for the study of Modern Japanese grammar by providing it with typological foundations. In particular, we will show how the Temporal Adverbial Clause constructions in Modern Japanese are related to the Japanese Bare NP constructions that include Bare Topical NP construction and Omitted Particle construction as subtypes. While addressing the three issues given below, we shall demonstrate that our proposals cannot just handle the individual problems that remain unsolved in the previous studies, but they can also give proper descriptions for the constructions above.

This dissertation is composed of six chapters. In chapter one, after giving out its aims and the overall structure, we first put forth the issues that will be discussed in later chapters, which can be summarized as the following three points: (i) every construction shows a characteristic of language-peculiarity. What analytic contributions do we get if we suppose that there is no truly universal grammatical construction? (ii) The relationship between the constructions is taxonomic and interrelated. What analytic contributions do we get if we employ the network model that incorporates the cognitive functions of the schemas and their instantiation? And finally, (iii) the relationship between syntactic and semantic structure in construction is best assumed as showing a symbolic relationship. What analytic contributions do we get if we suppose every construction is inherently symbolic like lexical items? These three issues (i) to (iii) will be discussed in turn from chapters three to five together with the previous studies of Japanese grammar and their (problematic) solutions.

The three issues for our dissertation come from the essence of Radical Construction Grammar, and chapter two is devoted to outlining the foundations of Radical Construction Grammar for our discussion in later chapters. In particular, we shall review the following three central tenets of the grammatical theory: (i) every construction should be considered as language-specific, and, furthermore, every internal element of the construction is also thought of as construction-specific. This postulation implies that there are no language-universal constructions nor categories; (ii) constructions show a taxonomic hierarchy and they can therefore be described in a way of the network model that is organized by the interrelationship between schemas and their instantiations; and finally, (iii) the association between syntactic elements and semantic components in constructions are supposed as

having a symbolic relationship like lexical items, which suggests that the association is not always linked in an iconic manner though the iconic relationship is assumed in a large number of existing linguistic theories, whether tacitly or implicitly.

Chapters three through five discuss the three issues outlined in chapter one. Chapter three focuses on the issue of the language-specific properties of constructions. We shall discuss this point together with Japanese Bare Topical NP construction. We suggest that the Japanese Bare Topical NP construction should be analyzed as an independent construction in its own way, though in a certain tradition of theoretical linguistics, it might have ever been discussed in the contexts of seemingly correspondent constructions observed in other languages. For instance, Yamaizumi (2013, among the others) examine the Japanese Bare Topical NP by incorporating it into the analysis of a construction called Left Dislocation in English grammar. However, such an analysis necessarily narrows a semantic range over which the Japanese Bare Topical NP construction can take, and as a result, a certain range of the examples that occurred with the construction should be ignored for a theoretical purpose. Without drawing an arbitrary line on what type of data we should employ, we can advance the description of the Japanese Bare Topical NP construction if we follow the framework of Radical Construction Grammar. First, we point out that the Bare Topical NP construction with a pronominal in the main clause forms a different construction from the one without any pronominals. This is because the two constructions show semantic/pragmatic differences. Second, we demonstrate that the semantic differences between Japanese Bare Topical NP and English Left Dislocation are properly illustrated utilizing the semantic-map description employed in Radical Construction Grammar. Third, it will be shown that our discussion here does not only capture the whole semantic range of the construction, but it also succeeds in providing a theoretical foundation for the grammatical analyses that have been accumulated in the history of traditional Japanese descriptive grammar.

Chapter four is allocated for the discussion on the second issue of the relationships between constructions. For this purpose, we shall, in particular, focus on the relationships between the two constructions that have an identical form but different meanings from each other. Discussing that the notion of conceptual motivation works crucial for the network development, we propose that the Bare Temporal Adverbial is a construction that is formed with the conceptual sanction from the two higher-order constructions of the Bare Topical NP and Adnominal. As properly pointed out by Masuoka (2014), one major problem with the previous studies is that they have not delivered enough

discussion on the formal aspects of why the Japanese complex sentences are formally the way they are, while working hard for the functional classification with little care for the formal realization. As a result, they fail to provide a straightforward account of why certain forms can be utilized with certain functions such as adverbial modification even though their attention is paid to function. Examining the parallelisms between the constructions, we shall show that the Bare Temporal Adverbial construction can be described with an analysis well-balanced in form and meaning.

Chapter five directs itself at proposing a unified analysis for the Temporal Adverbial constructions and Bare NP constructions in Japanese. While previous research has emphasized the function of information structure for the construal differences observed in each construction, they fail to arrive at a unified view on what motivates the commonalities between the two constructions and how they theoretically relate to each other. We shall suggest that one major problem with the previous studies lies in the point that they pay little attention to prosody and miss in their analyses the fact that the prosodic function works in a correlated way in both constructions. Inspired by the theory of correspondences between prosody and information structures pointed out by Kori (1992), we suggest that the focus reading is not expressed in an iconic manner as postulated in the previous studies, but it is expressed as a correlation between the elements working on the whole construction. The concluding remark is given in chapter six.

## 目次

要旨 .....	i
Abstract .....	v
目次 .....	viii
第1章 はじめに .....	1
1.1 本稿の目的 .....	1
1.2 本稿の構成 .....	1
1.3 本稿が扱う 3 つの論点 .....	2
1.3.1 構文の言語固有性について .....	2
1.3.2 構文間の関係について .....	4
1.3.3 構文内部の記号的対応について .....	5
第2章 理論的背景 .....	8
2.1 はじめに .....	8
2.2 Radical Construction Grammar について .....	8
2.3 普遍的なカテゴリや構文は存在しない .....	10
2.3.1 構文内のカテゴリは構文全体に固有である .....	10
2.3.2 構文は各言語に固有である .....	14
2.3.3 言語間の構文比較は意味地図モデルによって可能である .....	16
2.4 構文はスキーマと事例の関係に基づくネットワークを成す .....	17
2.5 統語構造と意味構造は必ずしも類像的に対応しない .....	18
2.6 まとめ .....	24
第3章 構文文法からみた無助詞主題構文 .....	25
3.1 はじめに .....	25
3.2 先行研究 .....	25
3.2.1 日本語の無助詞主題構文に関する先行研究 .....	26
3.2.2 英語の左方転位構文に関する先行研究 .....	28
3.2.2.1 左方転位構文の形式的特徴 .....	29
3.2.2.2 左方転位構文の意味的特徴 .....	29
3.2.3 左方転位モデルによる無助詞主題構文の分析 .....	31

3.3 左方転位モデルに残された問題点	3 5
3.3.1 分析対象に関する問題点	3 5
3.3.1.1 左方転位モデルでは扱えない例の存在	3 5
3.3.1.2 代名詞的要素の「挿入」や「復元」	3 8
3.3.2 理論的前提に関する問題点	3 8
3.4 理論的背景	4 1
3.4.1 名詞修飾節の統一的分析	4 1
3.4.2 構文の言語固有性	4 3
3.5 提案と考察	4 4
3.5.1 無助詞主題構文の新たな分析モデルの提案	4 4
3.5.2 主節内の代名詞的要素の有無による意味の違い	4 6
3.5.3 問題点の解決	4 9
3.5.4 先行研究との整合性	5 2
3.6 まとめ	5 3
<b>第4章 構文文法からみた無助詞時間節構文</b>	<b>5 4</b>
4.1 はじめに	5 4
4.2 先行研究とその問題点	5 4
4.2.1 先行研究	5 5
4.2.1.1 従属節の分類体系	5 5
4.2.1.2 先行研究による無助詞時間節構文の分析と記述	5 7
4.2.2 先行研究の問題点	5 8
4.3 理論的背景	6 0
4.3.1 Shibatani による関係節構文の分析	6 0
4.3.2 構文間およびカテゴリ間のネットワーク	6 3
4.4 提案と考察	6 6
4.4.1 提案	6 6
4.4.2 問題点の解決	6 9
4.4.3 無助詞主題構文から無助詞時間節構文への意味拡張	7 1
4.4.4 無助詞主題構文と無助詞時間節構文の意味的個別性	7 3
4.5 まとめ	7 4

<b>第5章 構文文法からみた時間節構文と裸名詞句構文</b>	<b>7 6</b>
5.1 はじめに	7 6
5.2 先行研究とその再解釈	7 6
5.2.1 先行研究	7 7
5.2.1.1 時間節構文の情報構造に関する先行研究	7 7
5.2.1.2 無助詞構文と助詞省略構文の形式的区別に関する先行研究	7 8
5.2.1.2.1 加藤 (2003)	8 0
5.2.1.2.2 丹羽 (2006)	8 1
5.2.2 先行研究の問題点	8 1
5.2.2.1 論点 (i) に関する先行研究の問題点	8 2
5.2.2.2 論点 (ii) に関する先行研究の問題点	8 4
5.2.3 先行研究における（暗黙裡の）共通点	8 4
5.3 理論的背景	8 6
5.3.1 文内イントネーションと情報構造の対応関係	8 6
5.3.2 構文における意味と形式の記号的対応	8 9
5.3.3 日本語における情報構造と文内イントネーションの記号的対応	9 2
5.4 提案と考察	9 3
5.4.1 論点 (i) に関する提案と考察	9 4
5.4.1.1 提案	9 4
5.4.1.2 時間節構文の情報構造に関する読み上げ調査	9 7
5.4.1.2.1 本稿の提案の妥当性検証	9 8
5.4.1.2.2 本稿の予想に合致しなかった例	1 0 1
5.4.1.2.3 調査結果に観察される非類似性の解消	1 0 4
5.4.1.3 時間節構文における格助詞の意味的貢献	1 0 6
5.4.1.3.1 先行研究による記述	1 0 7
5.4.1.3.2 さらなる例の検討 —「ときφ」と「ときに」を例に—	1 0 9
5.4.2 論点 (ii) に関する提案と考察	1 1 2
5.4.2.1 提案	1 1 2
5.4.2.2 裸名詞句構文の形式的区別に関する読み上げ調査	1 1 5
5.4.2.2.1 本稿の提案の妥当性検証	1 1 6

5.4.2.2.2 本稿の予想に合致しなかった例	119
5.4.2.3 考察：論点 (ii) に関する先行研究との関係	120
5.5 まとめ	121
第6章 おわりに	122
参考文献一覧	125
付録	131
謝辞	135

# 第1章

## はじめに

### 1.1 本稿の目的

本稿は、通言語的基盤を備えた理論的枠組みが日本語の文法研究に与える新たな視点について考察を行うものである。具体的には、通言語的・言語類型論的観点から世界の言語を記述および理論化することを念頭に置いて提案された文法理論である Radical Construction Grammar (Croft 2001 など) を理論的背景として、現代日本語の時間節構文、裸名詞句構文、およびその両構文に関連する現象を考察する。本稿の目的は、上記の構文が見せる具体的な現象をより適切に記述し理論化するためには、 Radical Construction Grammar で一貫して主張される「言語の基本単位は構文である」という主張や、その前提となる「言語は多様性を示す」という発想法が、日本語という個別言語の研究にも有益な視点を与えると示すことにある。

### 1.2 本稿の構成

本稿は、本章を含む全6章で構成される。以下に本稿の構成を示す。まず、本章では、次節以降で、本稿が扱う3つの論点を整理する。第2章では、本稿の理論的背景である Croft (2001, 2020 など) による構文文法 (Radical Construction Grammar) の基本的な3つの主張について説明する。

第3章から第5章では、1.3節で示す3つの論点を順に扱う。はじめに、第3章では、日本語の無助詞主題構文を例に、この構文の適切な記述およびモデル化のためには、構文 (construction) という単位は各言語の体系に固有の単位であることを前提にする必要があると主張する。第4章では、日本語の無助詞時間節構文と無助詞主題構文の関係を例に、構文内に生起するカテゴリはその構文全体に固有の単位であると捉えること、および、構文はネットワークを形成して存在すると捉えることの重要性について議論する。第5章では、無助詞時間節構文における情報構造、および、無助詞主題構文と助詞省略構文の形式的区別という2つの論点を例に、構文内の要素における形式と意味の組み合わせは、必ずしも一対一に、すなわち、類像的には対応していないと考えることの有用性を議論する。第6章はまとめである。

### 1.3 本稿が扱う3つの論点

本節では、第3章から第5章で本稿が扱う論点について簡潔に整理する。以下、3つの小節の中で、各論点に関して先行研究で提案されてきた分析と、その分析に残されている問題点を指摘した上で、本稿の提案する分析の要点を示す。

#### 1.3.1 構文の言語固有性について —無助詞主題構文は左方転位構文か?—

第3章では、構文という単位が各言語の体系に固有の単位であると捉える必要性について論じる。具体的には、(1)のような、本稿が「無助詞主題構文」と呼ぶ構文に関して、その適切な分析モデルを提案することを目的とする。無助詞主題構文を通言語的な枠組みにおいて扱おうとする先行研究(山泉 2013, Yamaizumi 2011, 2018)では、(1)の文は、(2)の「これに」、「これは」のような、「このチャーハン」と同一指示の代名詞的要素(pronominal)が無形の代名詞((3)の「 $\phi$ 」)として生起しているものと分析されている。

- (1) このチャーハン、タケノコが入ってる。(作例)
- (2) a. このチャーハン<sub>i</sub>、これ<sub>i</sub>にタケノコが入ってる。  
b. このチャーハン<sub>i</sub>、これ<sub>i</sub>はタケノコが入ってる。
- (3) このチャーハン<sub>i</sub>、 $\phi_i$ タケノコが入ってる。

しかし、先行研究における上記の分析には、以下の2つの問題点が残されていると言える。一つは、例えば(4)のような、「昨日話してた旅行」と同一指示の代名詞的要素の入る余地がない例を扱えない点である。つまり、(4)のような例をも含めて無助詞主題構文の記述および分析を行うためには、先行研究で想定されているようなゼロ形式の代名詞的要素に基づく分析は困難であると言える。

- (4) 【旅行の計画を立てた時にその場にいなかった花子に、あとで予定を聞きに行つた。聞いてきた花子の予定を他の旅行メンバーに伝える時の発話】  
昨日話してた旅行、花子は10月まで仕事で忙しいみたいだよ。(作例)

二つ目の問題点は、理論的前提に関する問題点である。上記の分析モデルでは、英語で観察されるような、左方転位構文(Left Dislocation construction)と主題化構文(Topicalization)

construction) の区別が日本語でも同様に機能することが前提とされている。英語では、この 2 つの構文は、(5) と (6) に見られるように、転位名詞句（ここでは *this movie*）と同一指示の代名詞的要素（ここでは *it*）が主節内に生起するか否かによって形式的に区別することができる。先行研究では、この区別が日本語にも適用可能であることを前提にしているため、(1) は左方転位構文の一種、具体的には、代名詞的要素がゼロ形式の左方転位構文と分類されることになる。

- (5) [[This movie]<sub>i</sub>, [I saw it<sub>i</sub> when I was a kid]<sub>s</sub>] (左方転位構文)  
(Lambrecht 2001:1052 の括弧等を修正)
- (6) [[This movie] [I saw \_\_ when I was a kid]<sub>s</sub>] (主題化構文)  
(Lambrecht 2001:1052 の括弧等を修正)

上記の理論的前提における問題点は、日本語の無助詞主題構文は、英語の左方転位構文とは異なる意味を表す点である。Lambrecht (1994) や Gregory and Michaelis (2001) で指摘されているように、英語の左方転位構文は、主題化構文と比較した場合、転位名詞句の指示対象が談話内において認知的に活性度が低いという意味的特徴を持つ。しかし、日本語では、(7) のような無助詞主題構文の例に見られるように、談話内における認知的活性度が非常に高い指示対象を表す名詞句（「夕飯」）も問題なく表すことができる。つまり、英語では (5) と (6) で表し分けるような意味の範囲を、日本語ではどちらも無助詞主題構文が表していると言える。

- (7) 【会話の録音中、M033 はお腹が空いてしまった】
- M033：じゃあ、僕のこのお腹がすいてるのはどうしてくれんのよ。
- F001：そんなにすいてんの？もう夕飯だよそろそろ。
- M033：夕飯、作んの俺じゃあねえかよ。（『名大会話コーパス』より）

上記 2 点の問題に対して、本稿第 3 章では、Croft (2001, 2020) の構文文法における構文の概念を基に、2 つの提案を行うとともに、それに関連する考察を行う。本稿の提案は、第一に、日本語の無助詞主題構文は、形式と意味との組み合わせ全体であるところの構文を成しているというものである。第二に、日本語の無助詞主題構文は、日本語の文法体系に固有の

単位であり、したがって、英語など他の言語の体系における構文の分析とは独立に分析されるべきであるというものである。

### 1.3.2 構文間の関係について —無助詞時間節構文の存在を動機づけるものは何か?—

第4章では、日本語の無助詞時間節構文を例に、構文同士の関係について論じる。先行研究（益岡 1997, 2014, 日本語記述文法研究会 2008 など）で述べられている通り、日本語の伝統的な複文研究では、(8) のように、従属節と主節の意味的関係に着目した分類が関心を集めてきた。したがって、例えば (9) に生起している従属節「出かけようとしたとき」は、主節「電話のベルが鳴った」に対して (8c) の「従属節が述語や主節全体を修飾する」機能を持つと解釈されることから、連用節という分類ラベルが与えられている。

- (8) a. 名詞節：従属節が名詞句と同様に機能する
  - b. 連体節：従属節が名詞句を修飾する
  - c. 連用節：従属節が述語や主節全体を修飾する
  - d. 並列節：従属節が主節に対して意味的・文法的に対等である
- (9) 出かけようとしたとき、電話のベルが鳴った。（益岡 1997 : 14）

上記の分析に残された問題点とは、例えば以下の (10) の「出かけようとしたとき」という形式が、(9) の「出かけようとしたとき」と同一の形式であるにも関わらず、(8b) の分類では「連体節（と被修飾名詞「とき」から成る名詞句）」という分類ラベルを与えられ、全く別の構文として扱われてしまうというものである。換言すれば、(8) のみによって分析を行う場合、(9) と (10) の「出かけようとしたとき」がそれぞれに持つ意味や機能の相違には大きな関心が寄せられているものの、両者が持つ形式的共通性にはそれほど注意が払われておらず、したがって、(9) と (10) の「出かけようとしたとき」の間の構文的関係性が十分に議論されないままになっていると言える（益岡 2014 : 539 に同趣旨と思われる指摘がある）。

- (10) 宅配便は、出かけようとしたときを狙ってやって来ている気がする。（作例）

さらに、上記のような関心のあり方は、(9) の連用節としての「出かけようとしたとき」に対する分析自体にも問題を残していると言える。(9) の「出かけようとしたとき」は、主節を副詞的に修飾する意味、より具体的に言えば、主節に対して時間状況を設定する意味を表すことから、「連用節」の下位類の「時間節」に分類される。しかし、このとき、(9) の「出かけようとしたとき」が主節事態に対して時間状況を設定できる理由に関する議論には、それほど関心が向いていないと言える。つまり、先行研究の主眼は、(8) のように、従属節から解釈される意味や機能を基にした分類にあるため、そのような意味や機能が実現する理由については、十分な議論が行われているとは言い難いということである。

本稿第4章では、上記2点の問題に対して、構文内のカテゴリは構文全体に固有であることと、構文はネットワークの一部として存在することを前提にした分析を提案し、考察を行う。具体的には、無助詞時間節構文は無助詞主題構文の下位類として、ネットワークを形成して存在するという仮説が提案される。

### 1.3.3 構文内部の記号的対応について —時間節構文と裸名詞句構文の情報構造を実現させるものは何か?—

第5章では、時間節構文、無助詞主題構文、助詞省略構文に関して、これらの構文が持つ情報構造的意味と形式との対応関係を例に、構文内部の統語的要素と意味的要素の対応関係について議論を行う。

まず、時間節構文における情報構造について、益岡（1997）などによる先行研究では、時間節の表す時間状況が情報の焦点として解釈されるかどうかは、時間節が格助詞を伴うかどうかに対応すると一般化されてきた。すなわち、(11a) のような、格助詞を伴う時間節は情報の焦点になり得るが、(11b) のような、格助詞を伴わない無助詞の時間節（第4節で扱った「無助詞時間節構文」の時間節）は、焦点を表せないという対応である（益岡 1997：140–142）。

- (11) a. 神戸へ行ったときに、カバンを買いました。
- b. 神戸へ行ったときゅ、カバンを買いました。（いずれも作例）

しかし、益岡（1997）自身も指摘しているように、上記の一般化には例外も観察される。  
(12) では、時間節「友達を待っているあいだ」が格助詞「に」を伴っているにも関わらず、

意図されている情報の焦点は時間状況「友達を待っているあいだ」ではなく、主節事態「仕事を一つ片づけた」にある。反対に、(13)におけるAの「救急隊が到着し、引き継げるまで」は、格助詞を伴わない、無助詞の時間節であるが、Qの質問が「いつまで」であることからも分かるように、(13)のAの焦点は、明らかに時間状況にあると考えられる。

(12) 友達を待っているあいだに、仕事を一つ片づけた。(益岡 1997 : 146)

(13) Q いつまで CPR (心肺蘇生) はつづけるのですか?

A 救急隊が到着し、引継げるまで CPR を継続してください。

(広島県医師会 救急小冊子<sup>1</sup>)

続いて、無助詞主題構文と助詞省略構文について、先行研究では、前者は主題・解説の意味的関係を持つが、後者はその意味を持たないというように、意味的側面を基にした区別が盛んに行われてきた。これに対して、無助詞主題構文と助詞省略構文の形式的側面に基づく区別は、管見の限り、加藤(2003)や丹羽(2006)などが(14)の事実をそれぞれに指摘しているのを除いて、ほとんど行われていないと見られる。

(14) a. 「焦点を当てるには、当該部分を強く発音することで音声的にもある程度実現可能である。」(加藤 2003 : 375)

b. 「ポーズを置いて発話すれば題目として理解しやすく、ポーズを置かなければ一體的に把握しやすい」(丹羽 2006 : 290)

(14)の指摘は、確かに事実を適切に捉えていると思われるものの、無助詞主題構文と助詞省略構文の形式的区別が結局は何によって実現しているのかが明らかになっているとは言い難い。つまり、(14)の事実をまとめ上げるような、より包括的な分析モデルが必要であると考えられる。

本稿第5章では、上記の2つの論点を適切に扱うためには、構文内部の要素における形式と意味の関係があくまで構文全体の形式と意味の対応を基にしているという前提が必要であると述べる。具体的には、まず、時間節構文における情報構造の表し分けや、無助詞主題

---

<sup>1</sup> <http://www.hiroshima.med.or.jp/pamphlet/184/post-79.html> (最終閲覧: 2021年12月19日)

構文と助詞省略構文の形式的区別は、郡（1992など）が指摘するような、イントネーションのパターンと情報構造の対応関係を基にした構文によって行われるという分析を提案する。それと同時に、そのような構文の提案には、構文内部の形式的要素と意味的要素が非類像的に対応することを前提にする必要があると主張する。

## 第2章

### 理論的背景

#### 2.1 はじめに

本章の目的は、Croft (2001, 2020 など) による構文文法 (Radical Construction Grammar<sup>1</sup>) の考え方を取り上げ、本稿の理論的背景として導入することにある。具体的には、まず、2.2 節で Croft の構文文法の概要を説明したあと、2.3 節から 2.5 節において、「言語の基本単位は構文である」という前提に基づく (1) の 3 つの主張を 1 つずつ説明する。

- (1) a. 特定の言語内においても、また、言語間においても、普遍的なカテゴリや構文は存在しない。全ての構文は言語に固有であり、全てのカテゴリは構文に固有である。

(Croft 2001: 1.5 節および 1.6.1 節)

- b. 構文はネットワークの一部として存在し、そのネットワークにおける構文間の関係は、スキーマと事例の関係に基づく。(Croft 2001: 1.3.3 節および 1.6.5 節)

- c. 構文における統語的要素と意味的要素は、必ずしも類像的には対応しない。構文内の要素間の記号的対応は、構文全体における記号的対応を基に派生する。

(Croft 2001: 1.3.2 節および第 6 章)

ただし、本稿第 3 章から第 5 章の各章でも、「理論的背景」として本章の内容を簡潔に振り返るとともに、その内容が本章のどの節で説明されているかを逐一示すこととする。

#### 2.2 Radical Construction Grammar について

Croft の構文文法は、世界の言語を類型論的視点から観察した場合、各言語における文法のあり方、特に、意味と形式の組み合わせられ方には、我々が想像する以上の多様性 (diversity) があることを踏まえ<sup>2</sup>、それでもなお全ての言語を平等に、すなわち、英語などのよく知られた言語で観察される現象を単に当てはめるのではない方式で扱える文法理論として提唱されたものである。Croft の構文文法は、そのような目的を達成するために、従

<sup>1</sup> 堀江・パルデシ (2009) などでは「根源的構文文法」、吉川 (2011) では「急進的構文文法」、クロフト (2018) では「ラディカル構文文法」といった訳語が与えられているが、本稿ではひとまず「Croft の構文文法」と呼ぶこととする。

<sup>2</sup> この点において、Croft の構文文法は、Croft (2003) で提唱されている「類型論的思考 (thinking like a typologist 訳は本稿筆者による)」を具現化した文法理論だと言える (Croft 2001: 7–8)。

来の構文文法理論 (Croft 2005 が “vanilla construction grammar” と呼ぶ Goldberg 1995 など) よりも徹底した、すなわち、ラディカルな構文主義を採用するものであると捉えられる。本章の以下で示す、そのような徹底した構文主義こそが Croft の構文文法の本質である<sup>3</sup>。

Croft の構文文法における構文とは、(2) に見られるように、形式と意味の組み合わせから成る記号的単位 (symbolic unit) であるとされる。この点においては、他の構文文法理論 (例えば、上で挙げた vanilla construction grammar における構文の定義) ともそれほど大きく変わらないと言える<sup>4</sup>。

- (2) 「基本的文法ユニットの唯一のタイプは、構文である。構文とは、極小的なものとも複合的なものとも、あるいはスキーマ的なものとも実質的なものともなりうる形式と意味の組み合わせのことを指す」

(Croft 2001: 362 訳と太字はクロフト 2018 による<sup>5</sup>)

しかし、先に述べたように、Croft の構文文法が他の構文文法を含む言語理論と最も異なる点は、(3) の「言語の基本単位は構文である」という前提を、徹底して推し進める点にある。本章の以下では、冒頭で示した (1) の 3 つの主張を詳しく説明し、それら 3 つの主張が (3) の前提の下に位置付けられること、さらに言えば、(1) や (3) の主張は世界の言語に見られる多様性や個別言語に見られる多様性を適切に捉えるためのものであることを見ていく。

---

<sup>3</sup> 早瀬 (2013 : 114–117) による Croft (2001) の書評にも同趣旨の指摘がある。

<sup>4</sup> Croft and Cruse (2004: Ch. 10) では、1 つ前の段落で挙げた構文文法理論に加えて、認知文法 (Langacker 1987 など) における構文概念に関しても、おおよそ (2) と同様に、形式と意味の組み合わせから成る記号的単位という定義が当てはまると言及されている (Croft and Cruse 2004: Ch. 10.1.1)

<sup>5</sup> “The only type of primitive grammatical units are constructions—parings of form and meaning which may be atomic or complex, schematic or substantive[.]” (Croft 2001: 362)

(3) 「(カテゴリや関係ではなく) 構文が、統語表示の基礎的かつ基本的ユニットなのである。構文で見られるカテゴリや関係は、[中略] 派生的なものである。これが、ラディカル構文法である。」

(訳と太字はクロフト 2018 : 54 による。Croft 2001 による原文を脚注に示す<sup>6</sup>。)

(1) a. 特定の言語内においても、また、言語間においても、普遍的なカテゴリや構文は存在しない。全ての構文は言語に固有であり、全てのカテゴリは構文に固有である。

(Croft 2001: 1.5 節および 1.6.1 節)

b. 構文はネットワークの一部として存在し、そのネットワークにおける構文間の関係は、スキーマと事例の関係に基づく。(Croft 2001: 1.3.3 節および 1.6.5 節)

c. 構文における統語的要素と意味的要素は、必ずしも類像的には対応しない。構文内の要素間の記号的対応は、構文全体における記号的対応を基に派生する。

(Croft 2001: 1.3.2 節および第 6 章)

## 2.3 普遍的なカテゴリや構文は存在しない

まずは、(1a) の主張「特定の言語内においても、また、言語間においても、普遍的なカテゴリや構文は存在しない。」について、「特定の言語内」に関する部分 (2.3.1 節) と、「言語間」に関する部分 (2.3.2 節) をそれぞれ説明する。いずれにおいても、カテゴリは構文を離れては規定できないことと、どのようなカテゴリおよび構文も、その生起環境であるところの構文全体や、それが部分を成す言語体系全体に固有のものであることが示される。その上で、言語間における構文の比較を行うためには、意味地図モデルと呼ばれる手法が有効であること (2.3.3 節) を説明する。

### 2.3.1 構文内のカテゴリは構文全体に固有である

はじめに、(1a) の主張のうち、特定の言語内におけるカテゴリという部分について説明する。Croft によれば、従来の言語理論では、(1a) と反対の方略、すなわち、「前置詞」や「動詞」、「主語」や「述語」などの、構文とは独立に設定された単位を基本的な構築単位として、それらを積み木のように組み合わせることで構文が形成されるモデルが採用されて

<sup>6</sup> “CONSTRUCTIONS, NOT CATEGORIES AND RELATIONS, ARE THE BASIC, PRIMITIVE UNITS OF SYNTACTIC REPRESENTATION. The categories and relations found in constructions are derivative[.] This is Radical Construction Grammar.” (Croft 2001: 46 スモールキャピタルは原文による。)

きたという。Croft(2020) では、そのような従来のモデルを building block model と呼ぶ（以下、本稿では「積み木モデル」と呼ぶ）。本節では、積み木モデルに基づく分析の例とされる Aarts (2004, 2007) の「前置詞 (Preposition)」の分析と、それに対する Croft (2007, 2020) の批判を基に、積み木モデルの問題点について説明し、Croft による対案を示す。

英語における前置詞は、伝統的な規定では、(4) の構文に生起し、名詞句 (NP) を目的語にとるものと規定してきた。したがって、(5) の *before* と *since* はともに前置詞であると規定される。また、これに対して、(6) のように節を目的語にとるものや、(7) のように目的語をとらないものは、(4) の構文には当てはまらないことから、前置詞ではないとされる。より具体的には、(6) の *before* や *since* は従属接続詞 (subordinator)、(7) の *before* や *since* は副詞 (adverb) であると分類される。

(4) [Preposition NP]

- (5) a. John arrived *before* the last speech.
- b. I haven't seen him *since* the party. (いずれも Aarts 2004: 19)
- (6) a. John arrived *before* the last speech ended.
- b. I haven't seen him *since* the party began. (いずれも Aarts 2004: 19)
- (7) a. John arrived *before* (hand).
- b. I haven't seen him *since*. (いずれも Aarts 2004: 19)

これに対して、Aarts (2004, 2007) では、(5) だけでなく、(6) や (7) に生起する *before* や *since* も、(5) と同様、前置詞のカテゴリに属すると主張する。つまり、Aarts は、「前置詞 (Preposition)」という同一のカテゴリが、(4) だけでなく、以下の (8) や (9) の構文にも共通して現れると分析するわけである。このとき、(10) で述べられているように、前置詞の目的語が名詞句であるか、節であるか、あるいは目的語が存在するかどうかは、「唯一異なること (the only difference)」とみなされることとなる。

- (4) [Preposition NP] (再掲)
- (8) [Preposition Clause]
- (9) [Preposition  $\phi$ ]
- (10) “The only difference between the different instantiations of *before* and *since* is that in the [(5)] the preposition takes a nominal complement; in the [(6)] it takes a clausal complement, while in the [(7)] the preposition is intransitive.” (Aarts 2004:19)  
 「*before* と *since* の様々な具現化の間で唯一異なることは、[(5)] では前置詞が名詞句補語をとり、 [(6)] では節の補語をとり、 [(7)] では前置詞が自動詞的であるというだけのことである。」(訳は本稿筆者による)

以上の Aarts の分析に対して Croft が指摘する問題点とは、(4) や (8) や (9) の構文に共通して現れるとされる前置詞のカテゴリが、実際には、分布において一様ではない点にある。仮に、Aarts の想定するように、前置詞という同一のカテゴリが (4) や (8) や (9) の構文に共通して現れると考える場合、言い換えれば、「前置詞」という積み木を使って (4) や (8) や (9) の構文を組み立てると考える場合、(4)(8)(9) の Preposition は、同一のカテゴリと見なされ、したがって、その全てが均一な振る舞いを見せることが予想される。確かに、(5)(6)(7) で見たように、各構文の Preposition の部分は、*before* と *since* がともに生起できる点では同様の振る舞いを見せていると言える。しかし、この予想は、*into* や *down* など、他の語には当てはまらない。例えば *into* は、(11a) のように (4) の [Preposition NP] の構文には生起できるが、(11b) (11c) から分かるように、(8) の [Preposition Clause] や (9) の [Preposition  $\phi$ ] の構文には生起できない。また、*down* は、(12) に見られるように、(4) と (9) の構文には生起できるが、(8) には生起できない。さらに、(13) と (14) の *while* や *back* も合わせて考えると、表 1 のように、「前置詞」というカテゴリは、生起できる語の種類という点において一様ではなく、したがって、同一のカテゴリが構文をまたいで共通に現れているとは言い難くなる<sup>7</sup>。

---

<sup>7</sup> ただし、Aarts (2004, 2007) の分析に問題があるからといって、伝統的な分析のような、(4) の [Preposition NP] のみによって前置詞を規定すればよいというわけでもない。なぜなら、伝統的な分析にも (Aarts の分析にも)、テストフレームとして選ばれる構文が恣意的であるという問題自体は共通して残されているからである。

- (11) a. Joan ran into the room.  
     b. \*Joan is really into she flies in a balloon.  
     c. \*Joan walked into. (いずれも Croft 2010: 343, Croft 2020: 43)
- (12) a. Randy walked down the hill.  
     b. \*Randy looked down the bird looked up at him.  
     c. Randy looked down. (いずれも Croft 2010: 343, Croft 2020: 43)
- (13) a. \*She slept while my lunch.  
     b. She slept while I ate lunch. (いずれも Croft 2010: 343, Croft 2020: 43)
- (14) a. \*I ran back my office.  
     b. I ran back. (いずれも Croft 2010: 343, Croft 2020: 43)

	[Preposition NP]	[Preposition Clause]	[Preposition $\phi$ ]
<i>since/before</i>	可	可	可
<i>into</i>	可	不可	不可
<i>down</i>	可	不可	可
<i>while</i>	不可	可	不可
<i>back</i>	不可	不可	可

表1：“Preposition” カテゴリにおける語の分布の多様性

したがって、Croft は、Aarts が想定するような、同一のカテゴリが各構文に現れるモデル（すなわち、積み木モデル）を脱却し、反対に、例えば(4)における Preposition は、[Preposition NP] という構文の中でのみ規定される、(4)の構文に固有のカテゴリであり、(8)や(9)における Preposition も、それぞれの構文に固有のカテゴリと考える必要があると述べる (Croft 2020: 45)。言うなれば、それぞれの構文によって規定されるカテゴリは、(15)(16)(17) のように、Preposition<sub>NP</sub>、Preposition<sub>Clause</sub>、Preposition <sub>$\phi$</sub>  といった異なるラベル<sup>8</sup>が付けられるべきものということである。これが、(1a) における「構文はカテゴリに固

<sup>8</sup> Croft の構文文法では、カテゴリはそれが生起する構文に固有であると考える以上、各カテゴリが持つ名称（例えば Preposition<sub>NP</sub> と Preposition<sub>Clause</sub>）は、あくまで構文固有のカテゴリに付けられたラベルに過ぎず、たとえ Preposition という共通の名前がついていても、2つは異なるカテゴリであると想定される。カテゴリや構文の間の共通性については 2.4 節で述べる。

有である」という主張であり、また、その主張は、(3) の「言語の基本的単位は構文である」という前提が、個別言語における構文の内部要素や構文の内部カテゴリに関して具現化したものであると言える。

- (15) [Preposition<sub>NP</sub> NP]
- (16) [Preposition<sub>Clause</sub> Clause]
- (17) [Preposition<sub>φ</sub> φ]

### 2.3.2 構文は各言語に固有である

続いて、(1a) の主張のうち、構文の言語固有性という側面について説明する。前節では、英語などの個別言語における構文内カテゴリに関して、積み木モデルでは各カテゴリが持つ振る舞いの多様性が捉えられないことを示した。本節では、これと同様の指摘が、言語間のレベルにおいても成り立つことを見ていく。より具体的には、個別言語とは独立に設定された普遍的な構文が複数の言語に共通して現れると想定するモデルでは、各言語の構文に観察される多様性が捉えきれないことを示す。

このことの例として、本節では、複数屈折 (plural inflection) 構文の多様性について Croft (2020) による表 2 を用いて説明する。表 2 は、Guaraní 語、Usan 語、Tiwi 語、Kharia 語、Cree 語において複数屈折が可能な語の種類について整理したものである。つまり、表 2 で表されているのは、例えば Guaraní 語では一人称・二人称を表す代名詞のみ複数屈折が可能であるが、Usan 語ではそれに加えて三人称を表す代名詞も複数屈折が可能であり、さらに、Tiwi 語では人間を表す名詞も複数屈折が可能であり、Kharia 語では人間以外の有生物を表す名詞も複数の屈折が可能ということである。また、Cree 語では、非生物を含む全ての名詞で複数屈折が可能なことが分かる。

	Guaraní (Tupian)	Usan (Papuan)	Tiwi (Australian)	Kharia (Austroasiatic)	Cree (Algonquian)
<i>1st 2nd pronoun</i>	né 'thou' peé 'you'	ye 'I' yonou 'we'	ŋja 'I' ŋjawa 'we [excl.]'	am 'thou' ampe 'you'	kīla 'thou' kīlawāw 'you'
<i>3rd pronoun</i>	haʔé 'he/she/it/they'	wuri 'he/she/it' wurinou 'they'	ŋara 'he' wuta 'they'	hokar 'he/she/it' hokiyar 'they'	wīla 'he/she/it' wīlawāw 'they'
<i>Human</i>	tahaší 'policeman/men'	wau 'child/children'	wuualaka 'girl' wawualakawi 'girls'	lebu 'person' lebuki 'persons'	iskwēsis 'girl' iskwēsisak 'girls'
<i>Animate (nonhuman)</i>	ajuyá 'rat(s)'	qāb-turin 'Pinon imperial pigeon(s)'	waliwalini 'ants'	bilo'i 'cat' biloiki 'cats'	sīsīp 'duck' sīsīpak 'ducks'
<i>Inanimate</i>	apiká 'bench(es)'	ginam 'place(s)'	mampuja 'canoe(s)'	sorej 'stone(s)'	ospwākan 'pipe' ospwākanak 'pipes'

表 2 : 5 言語における複数屈折構文 (Croft 2020: 188)

ここで重要なことは、表 2 に挙げられた 5 つの言語におけるそれぞれの複数屈折構文は、すべて一人称・二人称代名詞の指示物の複数という意味は表すものの、その一方で、三人称代名詞の指示物の複数、人間の複数、人間以外の有生物の複数、非生物の複数という意味領域のどこまで表せるかについては、各言語によって異なっている点である。したがって、仮にこれら 5 つの言語とは独立した「複数屈折構文」という普遍的な構文（つまり、積み木としての構文）が異なる言語に共通して生じると想定した場合、前節の Aarts が抱える問題点と同様、各言語の持つ個別性や多様性が捉えきれなくなってしまう。そのため、Croft の構文文法では、例えば「Guaraní 語の複数屈折構文」や、「Usan 語の複数屈折構文」のような個別の構文<sup>9</sup>が、それぞれの表す意味は部分的に重なりながらも、各言語に固有の単位として存在していると主張する。その上で、言語間の比較・対照や通言語的普遍性の側面は、次節の「意味地図モデル」によって捉えられる。

<sup>9</sup> ここでは、便宜上、「○○語の複数屈折構文」という構文名称を用いたが、これは、「複数屈折構文」という普遍的な構文が○○語に現れた場合の構文」を意味するわけではない。Guaraní 語の複数屈折構文や Usan 語の複数屈折構文という名称は、脚注 8 で述べたように、それぞれが固有名詞のような地位を持ち、たとえ「複数屈折構文」の部分が共通していても、全く別の構文であると位置付けられる (cf. Croft 2001: 50–51)。

### 2.3.3 言語間の構文比較は意味地図モデルによって可能である

本節では、前節の内容を踏まえた上で、Croft の構文文法など言語類型論のアプローチで構文比較の方法として用いられる「意味地図モデル (semantic map model)」について説明する。前節では、表 2 の複数屈折構文を例に、言語間で普遍的な構文は存在せず、各言語に現れる構文は、その言語に固有の存在であることを示した。

以上の主張の下で行う構文比較の方法として、Croft は、各言語の構文が（表 2 で言えば左端列の “1st/2nd pronoun” から “Inanimate” までのうち）どの範囲の意味を表すことができるか、すなわち、各言語の構文がどのような意味上の地図を描くかで比較できると述べる。

ここで、表 2 を例に実際の比較を行う前に、用語法を確認しておく。1 つ前の段落で下線を引いた「意味」は、例えば「Guaraní 語の複数屈折構文が表す意味」のような、個別言語の構文が表す意味を指すものではない。むしろ、下線部で意図されていることは、「一人称・二人称代名詞で指示される人物」「三人称代名詞で指示される人物」「人間」「(人間以外) 有生物」「非生物」のような、個別言語の構文とは独立した、普遍的な意味概念であると考えられる。本稿では、Croft (2001) や Langacker (1976) などの用語である「概念構造 (conceptual structure)」に倣い、そのような普遍的な概念としての「意味」を「概念的意味」と呼ぶ。

その上で、表 2 で挙げられている 5 つの言語の複数屈折構文を意味地図モデルで比較すると、図 1 の比較が可能となる。図 1 では、「一人称・二人称代名詞 — 三人称代名詞 — 人間 — 有生物 — 非生物」という概念的意味のうち、各言語の複数屈折構文が表す意味の範囲（すなわち、各言語の複数屈折構文が有する意味地図。図 1 のそれぞれの四角形に対応する）が重ね合わせられており、それらが階層 (hierarchy) として示されている。

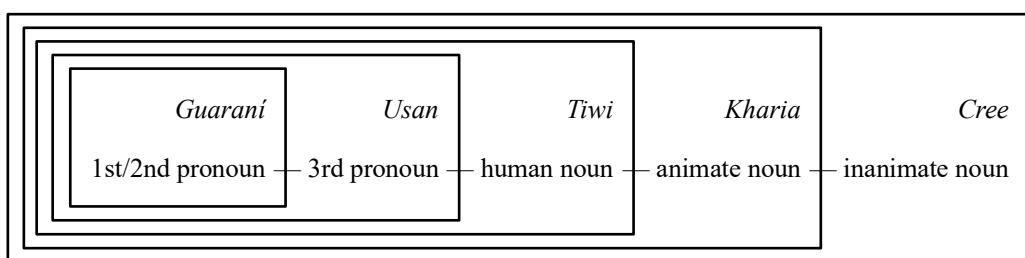


図 1 : 5 言語の複数屈折構文と概念的意味

## 2.4 構文はスキーマと事例の関係に基づくネットワークを成す

次に、構文間の関係について述べた (1b) の主張を説明する。2.3.1 節では、個別言語における構文内のカテゴリは、各構文に固有の存在であると述べた。そのように考える場合、構文の内部カテゴリは、その生起環境となる構文の数に応じて、無数に存在することが予測される。しかし、Croft は、それら無数に存在するカテゴリは、言語知識の中で無秩序に存在するのではなく、「構造化された目録 (structured inventory)」(Croft 2001: 25) を成し、ネットワークの一部として存在すると主張する。(1b) の主張は、そのようなネットワークを作成する構文間の関係が、全て、スキーマと事例の関係に基づくものであることを意味する。

ここでは、*Sbj kick the bucket* (*Sbj* が死ぬ) というイディオム的な構文を例に (1b) の意味を考えてみよう。この構文は、「死ぬ」という慣用的な意味を表す点で、通常の *kick* の用法とは異なる性質を示すものの、主語 (*Sbj*) と目的語 (*the bucket*) をとる点で、通常の *kick* と共通する性質も持っていると言える。したがって、*Sbj kick the bucket* 構文は、単に *kick* の通常の用法に還元して（すなわち、この構文に独立した地位を与えずに）分析するのも不十分であるし、かといって、意味的個別性のみに着目し、*kick* の通常の用法と完全に独立したものとして位置づけるのもまた不十分と言える。

Croft は、この構文や *kick* の通常の用法などが成す「構造化された目録」を、以下の図 2 の形で捉える。まず、図 2 における *Sbj kick the bucket* 構文（左下の<a>）は、<b>の *kick* 構文（すなわち、*kick* の通常の用法）や、<c>の他動詞構文から独立した表現として、独立した 1 つのノードとして表示されている。これは、*Sbj kick the bucket* 構文が「死ぬ」という（*kick* の通常の用法とは異なる）特別な意味を持つことによる。

また、それと同時に、*Sbj kick the bucket* 構文は、<b>の *kick* 構文や<c>の他動詞構文と直線で結ばれており、<b>や<c>の事例としても表示されている。これは、*Sbj kick the bucket* 構文が、(18a) のように *kick* 構文や他動詞構文と共通する項構造を持ち、そのような形式的特徴が<b>や<c>の上位の構文から部分的指定 (partial specification) を受けると考えられるためである。

- (18) a. James kicked the bucket. (ジェイムズは死んだ)  
b. James kicked a ball. (ジェイムズはボールを蹴った)  
c. James kissed Mary. (ジェイムズはメアリーにキスをした) (いずれも作例)

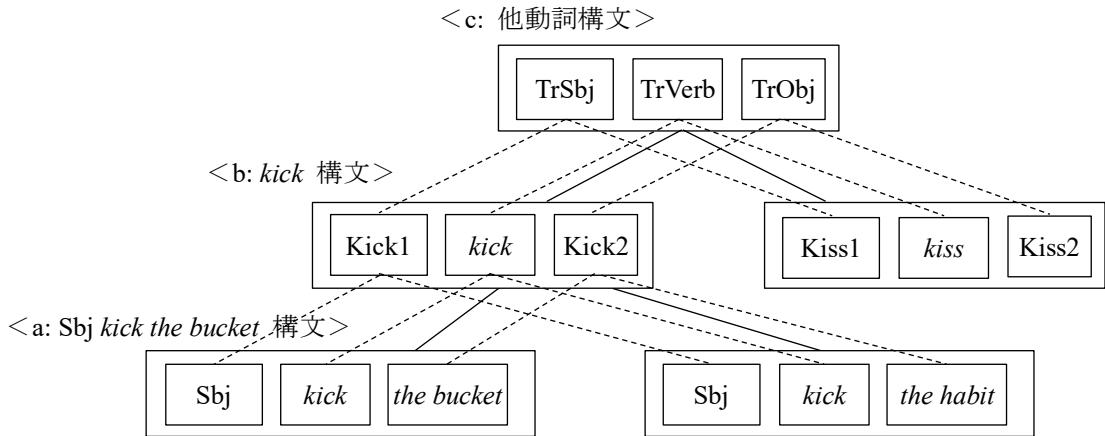


図2：Sbj kick the bucket を含む構文のネットワーク（Croft 2001: 56 を修正）

ここで、これまで「カテゴリ」や「構文内の要素」と呼んできた単位の間の関係に着目してみよう。Croft の構文文法では、これらの単位も、形式と意味の組み合わせから成る（生起環境の限られた）構文であると捉えられる。したがって、それらの要素的構文もまた、ネットワークを成して存在していると考えられる。図2で言えば、すでに述べたように、<a>の Sbj kick the bucket 構文の目的語 the bucket は、<b>の kick 構文の目的語をより具体的に指定したものであると言える。図2における破線は、このような構文の部分に生じる要素の間のスキーマと事例の関係を表す。ただし、図2で実線で表されている関係と、破線で表されている関係は、どちらも構文間のスキーマと事例の関係を表す点で同一のものであることに注意されたい。

以上、Croft が想定する構文間の関係について (1b) の意図するところを説明したが、(1b) もまた、(3) の「言語の基本単位は構文である」という前提の下に位置づけることができる。なぜなら、(1b) の意図することは、全ての言語表現の間の関係は、構文を単位として、それら構文が成すネットワークとして捉えられる点にあるからである。

## 2.5 統語構造と意味構造は必ずしも類像的に対応しない

最後に、(1c) の主張について説明する。2.2節の冒頭で述べたように、Croft の構文文法では、世界の言語において意味と形式の対応関係が非常に多様であることを前提としている。したがって、究極的には、ある言語のある構文において、どの意味的要素がどの統語的要素に対応して現れているかを一般的な写像規則 (general mapping rules) で説明することは難しく、語彙やイディオムのように、その構文に固有の関係として捉えなければならないと

いうことである。

そのような言語間の多様性を適切に捉えるための構文表示として、Croft の構文文法では、(1b) と図 3 で示されているような、構文内の統語的要素間に統語的関係は存在せず、統語的要素と意味的要素の対応は構文全体の形式と意味の対応から派生するというモデルが提案されている。図 3 では <d> の統語的要素 (element) の間に関係を表す矢印が無い点に着目されたい。なお、図 3 における「統語構造」には、いわゆる統語的特性 (syntactic properties) だけでなく、形態的特性 (morphological properties) や音韻的特性 (phonological properties) も含まれるとされる<sup>10</sup>。また、「意味構造」は、意味的特性 (semantic properties) だけでなく、語用論的特性 (pragmatic properties) や談話機能的特性 (discourse-functional properties) も含むとされる<sup>11</sup> (Croft 2001: 18 用語の訳はクロフト 2018 による)。

(1c) 構文における統語的要素と意味的要素は、必ずしも類像的には対応しない。構文内の要素間の記号的対応は、構文全体における記号的対応を基に派生する。(再掲)

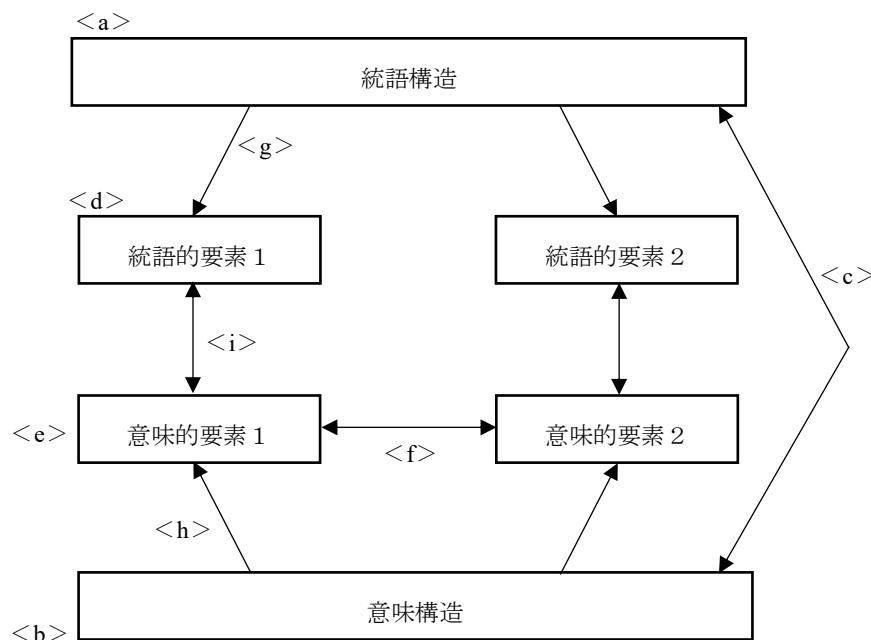


図 3 : 統語的関係を想定しない場合の構文の内部構造

<sup>10</sup> したがって、本稿では、いわゆる統語的特性以外の部分に関して言及する際には、統語構造や統語的要素のことをそれぞれ「形式」や「形式的要素」と呼ぶこともある。

<sup>11</sup> Croft (2001) やクロフト (2018) では統語構造内の部分要素と意味構造内の部分要素をそれぞれ「element (要素)」と「component (成分)」と呼び区別しているが、本稿ではそれぞれ「統語的要素」と「意味的要素」と呼ぶこととする。

以下では、まず、記号的関係さえあれば統語的関係は不必要であるという Croft の議論を概観し、その上で、統語的関係があつてはならないという議論について説明する。

まずは、記号的関係さえ存在すれば統語的関係は不必要であるという主張を説明する。言語を用いる重要な目的の一つがコミュニケーションの達成、すなわち、話し手の発した発話を聞き手が聞き、それを理解することであると考えた場合、発話理解には (19) の 4つの段階があると Croft は述べる (Croft 2001: 204–205)。ここで重要なことは、これら 4つのどの段階も、統語的関係を設定することなく実現可能な点である。このことを、(20) の *Heather sings.* を例に説明する。

- (19) a. 「聞き手は、発話を特定の構文の一事例として認識する」  
b. 「聞き手は、全体としての統語構造と、全体としての意味構造との間の記号的関係を通じて、自らの記憶の中のその構文の意味構造にアクセスする」  
c. 「聞き手は統語的構文に含まれる要素を、構文の統語的役割を通すことによって特定する」  
d. 「聞き手は各統語的要素に対応する適切な意味的成分を特定するために記号的関係を利用する」（いずれも Croft 2001: 205 訳はクロフト 2018 による）

- (20) *Heather sings.* (Croft 2020: 97)

ヘザーは歌う。（訳は本稿筆者による）

まず、(19a) で述べられているように、聞き手は、話し手の発話 (20) を聞き、その発話が *Heather* と *sings* から成る形式（図 3 で言えば<a>）であると気づく。聞き手は、その形式的情報を手がかりに、(20) が自動詞構文の例であると理解する。続いて、聞き手は、自らの記憶に蓄えられている自動詞構文の知識を基に、その統語構造に紐付けられた意味構造（図 3 で言えば<b>）にアクセスする。これが (19b) の段階であり、このアクセスを可能にするものが、統語構造全体と意味構造全体を結ぶ記号的関係（図 3 の<c>）である。それと同時に、聞き手は自動詞構文の意味構造にどのような部分的要素があるか（この場合「動作主」と「動作」。図 3 の<e>に相当）や、それらの意味的要素がどのような意味的関係であるか（この場合「動作主と動作の関係」。図 3 の<f>に相当）といった知識に

もアクセスする。また、(19c) で述べられているように、聞き手は、自動詞構文の知識を基に、意味的要素だけでなく、統語的要素に関する知識（自動詞構文は「主語」と「自動詞述語」から成るなど。図3の<g>に相当）にもアクセスする。最後に、統語的要素と意味的要素の間の記号的関係<i>を基に、各統語的要素と意味的要素の対応を同定する（すなわち、(19d)）。

以上で述べたように、意味と形式の全体同士をつなぐ記号的関係さえあれば、統語的関係の設定は必ずしも必要ではないと言える。しかし、ここで予想される反論として、統語的関係の設定によって、聞き手の発話理解をより確実に行えるようになるのではないか、というものが考えられる。つまり、統語的関係が何らかの形で意味的関係に対応し、その対応が発話の解釈や分析に貢献するのであれば、統語的関係の存在を想定してもよいのではないか、という反論である。

Croft は、上記の反論に対して、統語的関係を想定することで、むしろ形式と意味の対応関係の分析に不合理が生じると述べる。このことについて、再び (20) の *Heather sings.* を用いて説明しよう。仮に、統語的要素 *Heather* と *sings* の間に統語的関係があり、それが意味的要素 *HEATHER* と *SING* の間の意味的関係に対応すると考える場合、図4のような対応、すなわち、Haiman (1980) や Van Langendonck (2007) が「図式的類像性 (diagrammatic iconicity)」と呼ぶような、形式的関係と意味的関係が同じ形で対応する関係<sup>12</sup>を想定することとなる。つまり、統語的関係を言語の分析に用いる立場では、意味的関係と統語的関係とが類像的に対応することを暗黙の前提としているわけである (Croft 2001: 207–208)。

<sup>12</sup> Van Langendonck (2007) による図式的類像性の定義は以下の通り。

“[A] diagram is a systematic arrangement of signs that do not necessarily resemble their referents but whose mutual relations reflect the relations between their referents.” (Van Langendonck 2007: 398)

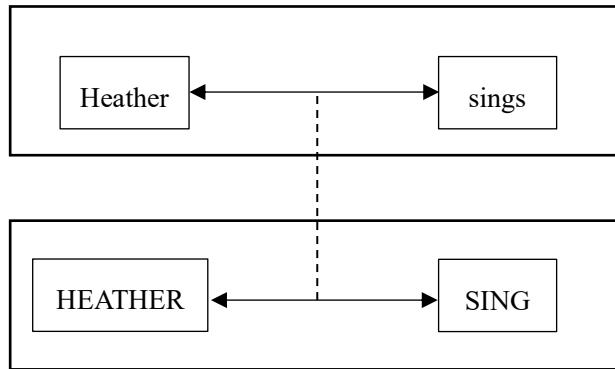


図4：統語的関係の存在を仮定した場合の(20)の構文的表示

しかし、世界の言語における形式と意味の対応を観察すると、多くの言語において、図4のような類像的なモデルでは説明できない例が存在すると Croft は述べる (Croft 2001: 208)。そのような例として、ここではツォツィル語 (Tzotzil) の例 (21) と (22) を見てみよう。

まず、(21) では、「手」の意味上の所有者である「私 (一人称者)」は、*j-* という所有形の形態素によって現れている。しかし、それと同時に、「私」は、*i-* という形態素によって、動詞 *k'as* (折れる) に一致 (agree) する形でも現れている。このため、(21) のような現象は、従来、所有者上昇 (possessor ascension) と呼ばれてきた。このような、*i-* (私) と *k'as* (折れる) の間で一致 (すなわち、統語的関係) が生じる理由を説明する際、従来の分析では、「私」と「折れること」との間に「被影響」などの意味的関係があることを根拠としてきた。つまり、この分析では、図4と同様、*i-* と *k'as* の統語的関係に対して、「私」と「折れる」の意味的関係が図式的類似性を持つことが前提とされているわけである ( (21) と (22) の例は Aissen 1987 による)。

#### (21) Possessor Ascension in Tzotzil

l-	<b>i-</b>	k'as	-b	-at	<b>j-</b>	k'ob
PF-	<b>1SG.ABS-</b>	break	-IO.APPL	-pass	<b>1SG.POSS-</b>	hand

‘My hand was broken (私の手は骨折していた)’

(Croft 2001: 209 訳はクロフト 2018 による)

しかし、上記の説明は、同じくツォツィル語の (22) の分析に関して問題を引き起こす。仮に、(20) と同様のモデルで、つまり、統語的関係と意味的関係の図式的類似性を基に (22)

を分析するならば、*najan*（ひっくり返す）と三人称単数絶対格の標識（-ϕ）との一致関係（すなわち、統語的関係）は、「ひっくり返す」という事態と三人称単数絶対格の指示物（ここでは「スープ」）との間の何らかの意味的関係が反映されたものと説明されるはずである。しかし、(22) に関して、その説明は成り立たない。なぜなら、(22) が発話される文脈では、スープはすでに鍋から取り出されてしまっているため、「スープ」と「ひっくり返す」との間には意味的関係が存在し得ないからである（Croft 2001: 209）。

(22) Possessor Ascension in Tzotzil

ta-	j-	<i>najan</i>	-be	- ϕ	s-	p'in	<b>-al</b>
IMPF-	1SG.ERG-	turn.face.down	-IO.APPL	3SG.ABS	3SG.POSS-	pot	-POSS

‘I'll turn its [the soup's] pot face down.’ [i.e. the pot that the soup was cooked in]

私はそれの [スープの] 深鍋をひっくり返すつもりだ [すなわち、スープが料理されていた深鍋]

(Croft 2001: 209 を修正 訳はクロフト 2018 による)

これに対して、図3のようにそもそも統語的関係の存在を前提としないモデル、言い換えば、そもそも形式と意味の関係は必ずしも類像的とは限らないと考えるモデルでは、上記の問題は発生しない。Croft は、統語的関係を設定せず、かつ、統語構造全体と意味構造全体が記号的に対応することを前提とする図3の構文モデルでは、(22) における統語的要素と意味的要素の関係も、図5のように、非常に明快 (straightforward) になると述べる（Croft 2020: 104）。つまり、(22) を適切に記述・分析するためには、図5のように「Erg-najan-be-Abs Poss-Noun」という形式全体に対して「誰かが何かをひっくり返し、かつ、ひっくり返される対象は他の物との間に所有関係がある」という意味全体が結びついていることを基本としなければならず、また、その内部要素の間の対応（図5の点線）は、構文全体の意味と形式の結びつきがあって初めて成立し得ると捉えなければならないわけである。

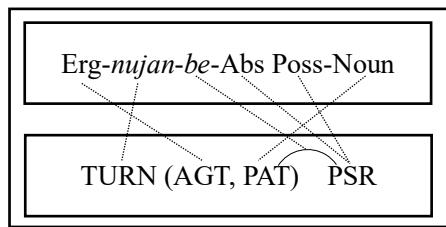


図5：(22) における形式と意味の非類像的対応 (Croft 2001: 212)

## 2.6まとめ

本章では、Croftの構文文法(Radial Construction Grammar)における基本的な考え方を説明した。具体的には、言語間および個別言語内で観察される多様性を適切に扱うために、Croftの構文文法では、(3)の徹底した構文主義と、それが具体的な主張として現れた(1)の3点が主張されていることを示した。次節以降では、これらの理論的背景が日本語の文法研究、特に、裸名詞句構文や時を表す複文の研究に対しても有用であることを具体的に見ていく。

(3) 「(カテゴリや関係ではなく) 構文が、統語表示の基礎的かつ基本的ユニットなのである。構文で見られるカテゴリや関係は、[中略] 派生的なものである。これが、ラディカル構文文法である。」(再掲)

- (1) a. 特定の言語内においても、また、言語間においても、普遍的なカテゴリや構文は存在しない。全ての構文は言語に固有であり、全てのカテゴリは構文に固有である。
- b. 構文はネットワークの一部として存在し、そのネットワークにおける構文間の関係は、スキーマと事例の関係に基づく。
- c. 構文における統語的要素と意味的要素は、必ずしも類像的には対応しない。構文内の要素間の記号的対応は、構文全体における記号的対応を基に派生する。

(いずれも再掲)

## 第3章

### 構文文法から見た無助詞主題構文

#### 3.1 はじめに

本章<sup>1</sup>では、日本語の無助詞主題構文の分析モデルを例に、構文の言語固有性に関する議論を行う。先行研究 (Yamaizumi 2011, 2018, 山泉 2013) では、(1a) のような構文（無助詞主題構文と呼ぶ）は、(1b) の構文の「それを／それは」などがゼロ形式で現れたものであると分析するモデル（左方転位モデルと呼ぶ）が提案されている。本章の目的は、左方転位モデルに残された問題点を解決し、無助詞主題構文の新たな分析モデルを提案することにある。

- (1) a. くつべら使う？（山泉 2013 : 449）

- b. くつべら {それを／それは} 使う？

本章の構成は以下の通りである。まず、3.2 節で、日本語の無助詞主題構文と英語の左方転位構文に関する先行研究、および、左方転位モデルによる無助詞主題構文の分析を概観する。3.3 節では、左方転位モデルに残された 2 つの問題点を確認する。3.4 節では、理論的背景として、日本語の名詞修飾節に関する議論 (Matsumoto 1988, 松本 1993) を見た上で、本稿第 2 章で説明した Croft (2001, 2020) による主張のうち、構文は言語固有の単位であることを振り返る。その背景の下で、3.5 節では、無助詞主題構文が形式と意味の組み合わせから成る言語固有の単位を形成しているというモデルを提案し、考察を行う。3.6 節はまとめである。

#### 3.2 先行研究

本節では、(1) や (2) のような日本語の無助詞主題構文に関する先行研究 (3.2.1 節) と、(3) のような英語の左方転位構文 (Left Dislocation construction) に関する先行研究 (3.2.2 節) を整理し、その上で、左方転位モデルによる無助詞主題構文の分析を見る (3.2.3 節)。

---

<sup>1</sup> 本章は、松浦 (2020) の議論に大幅な加筆および修正を施したものである。

- (2) a. 私  $\phi$  知つてます。
- b. この店  $\phi$ 、よく待ち合わせをしたね。
- c. あの子  $\phi$ 、みんなが電話してるよ。(いずれも丹羽 2014 : 602 「 $\phi$ 」は原文による)
- (3) Mary, John saw her yesterday. (Prince 1984: 213)

### 3.2.1 日本語の無助詞主題構文に関する先行研究

まずは、日本語の無助詞主題構文に関する先行研究（長谷川 1993, 黒崎 2003, 三枝 2005, 丹羽 2006, 荻宿 2013 など）を基に、無助詞主題構文が持つ形式的特徴と意味的特徴を簡単にまとめておく。この構文に関する日本語学や国語学の先行研究は非常に多いものの、上記の先行研究による記述を整理すると、無助詞主題構文は、おおよそ (4a) の形式<sup>2</sup>と (4b) の意味<sup>3</sup>を持つ構文であると言える。(4c) に例を示す。

- (4) a. [[NP]  $\phi$  [CLAUSE]]
- b. 名詞句の指示対象を主題として設定し、それについて解説を与える。
- c. [[私]NP  $\phi$  [知つてます]CLAUSE ] (= (2a) )

まず、(4a) の形式的側面について説明する。これは、助詞を伴わない名詞句（(4a)では [NP]  $\phi$  と表示）の後ろに主節（[CLAUSE]）が続く形式であることを表している。(4c) で言えば、「私」という名詞句が助詞「は」や「が」などを伴わずに、無助詞（ $\phi$ ）で生じ、その後ろに、主節「知つてます」が続いて生じる形式である。

続いて、無助詞主題構文が持つ意味的特徴、すなわち (4b) について説明する。なお、(4b) を説明するためには、荻宿（2013）や丹羽（2006, 2014）などに倣い、(5) と (6) とを対比させながら説明することが有用であると思われる。(5) と (6) は、少なくとも表記上はどちらも、助詞を伴わない名詞句の後ろに主節が続いているが、(4a) の形式である点において共通している。しかし、先行研究では、この 2 つの例は、それぞれが表す意味によって、異なる 2 つの構文であると区別されることが多い。

---

<sup>2</sup> 三枝（2005）などを参考にした。本章 3.5.1 節ではより詳しい形式表示を提案する。

<sup>3</sup> 丹羽（2006, 2014）や荻宿（2013）を参考にした。詳細は二つ下の段落で述べる。

- (5) 【友人に「ねえ、雨は止んだ？」と聞かれて】  
 雨 ϕ 降ってる。 (作例)
- (6) 【授業中、ふと外を見て】  
 雨 ϕ 降ってる。 (丹羽 2014 : 602 の例に文脈を加えた)

その意味の違いとは、以下の 2 点にある。1 点目は、(5) では名詞句「雨」と主節「降ってる」の間に主題・解説の意味的関係があると解釈できるのに対して、(6) では「雨」と「降ってる」との間にその意味的関係が解釈できないというものである。より具体的に言えば、(6) では「雨 (が) 降ってる」全体が焦点として解釈される。

意味の違いの 2 点目は、助詞のない名詞句と主節との格関係や意味的関係に関する特徴が指摘されている。丹羽 (2006) によれば、(6) のように主題・解説の意味的関係がない構文は、(5) の構文に比べて、「可能な格の種類に制限がある」とされ、具体的には「ガ格・ヲ格・ニ格の一部・ヘ格に限られる」と指摘されている (丹羽 2006 : 291)。また、Nakagawa (2020) は、影山 (1993 : 56–57) の指摘を参照しつつ、助詞のない名詞句が非対照の焦点 (Non-Contrastive Focus) を表す際、その指示対象の意味役割は、非対格主語 (Patient S) と被動者 (Patient) に限られると整理している。丹羽 (2006) と Nakagawa (2020) による例を (7) と (8b) に挙げる。「このコート」(デ格) や「ネコ」(動作主) が主題を表す (7a) と (8a) は自然であるのに対して、それらが主題として解釈されない (7b) と (8b) は不自然に響く。

- (7) a. このコート ϕ 太郎がよく練習してたよ。  
 b. \*太郎がよくこのコート ϕ 練習してたよ。  
 (いざれも丹羽 2006 : 292 表記等を改めた。'\*' は丹羽による)
- (8) a. Q : ネコって普段どういうもの食べてるの?  
 A : ネコ、何でも食べるよ。 (作例)  
 b. Q : 何がネズミを追いかけてるの?  
 A : ??ネコ ϕ ネズミ追いかけてるよ。  
 (Nakagawa 2020: 127 訳等は本稿筆者による<sup>4</sup>。「??」は Nakagawa による)

---

<sup>4</sup> 原文は以下の通り。ただし、グロスと英訳は省略した。

Q: What is chasing a mouse?

A: neko-{ga/\*o/??Ø} nezumi oikake-teru-yo (Nakagawa 2020: 127)

本稿でも、(5)(7a)(8a)と(6)(7b)(8b)はそれぞれ異なる構文の具体例であると考える。具体的には、苅宿(2013)による「無助詞名詞」と「助詞省略名詞」という区別に倣い、(5)(7a)(8a)の構文を「無助詞主題構文」と呼び、(6)(7b)(8b)の構文を「助詞省略構文」と呼んで区別<sup>5</sup>することとする。また、同じく苅宿(2013)が無助詞名詞と助詞省略名詞を合わせた総称として用いる「ハダカ名詞」という用語に倣い、無助詞主題構文と助詞省略構文を合わせた総称として、「裸名詞句構文」を用いることとする。なお、苅宿の用語があくまで名詞部分に付けられた名称であるのに対して、本稿での用語は名詞部分と主節部分を合わせた全体に対する名称である点に注意されたい。

以上の対応を図にまとめたものが図1である。なお、本稿第5章では、より詳しい分類関係、具体的には、助詞省略構文が持つ2つの下位構文を含めた分類図が示される。

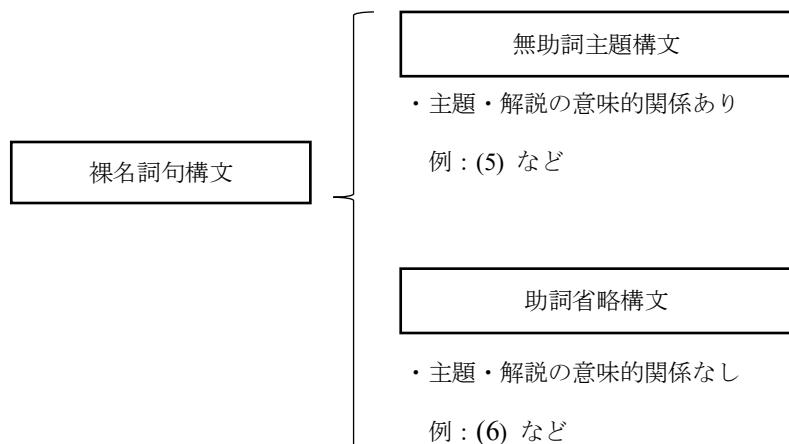


図1：裸名詞句構文の分類関係

### 3.2.2 英語の左方転位構文に関する先行研究

続いて、英語の左方転位構文に関する先行研究を整理する。特に、のちの議論のために、英語の左方転位構文に関する記述(Lambrecht 1994, 2001, Gregory and Michaelis 2001)を基に、左方転位構文の形式的特徴(3.2.2.1節)と意味的特徴(3.2.2.2節)を、主題化構文(Topicalization construction)と対比させる形で見ていく。

<sup>5</sup> この2つの構文が持つ形式的区别については、本稿第5章で論じる。

### 3.2.2.1 左方転位構文の形式的特徴

まず、英語の左方転位構文の形式は、(9a) のように表示され、例としては (9b) が挙げられる。比較のために、(10a) と (10b) に主題化構文の形式表示とその例を挙げる。左方転位構文は、その形式的特徴として、(9a) に示されているように、主節 (S) の中で項や付加詞として機能する要素 (XP) が主節の左側に現れ、かつ、その要素と同一指示の代名詞的要素 (pronominal) が主節内に現れるという特徴を持つ。これに対して、主題化構文では、(10a) に見られるように、代名詞的要素が主節内に現れず、義務的な空所 (gap) になるとされる (Lambrecht 2010: 1051, Prince 1984: 213, Gregory and Michaelis 2001: 1667 など)。例えば、左方転位構文の例である (9b) では、文頭の名詞句 *This movie* と同一指示の代名詞 *it* が主節内に生起しているのに対して、主題化構文の例である (10b) では、対応する位置に代名詞が生起せず、空所 (—) となっている。

- (9) a. [[XP]<sub>i</sub> [...pronominal<sub>i</sub>...]<sub>s</sub>] (Lambrecht 2001, Prince 1984 を参考にした)  
b. [[This movie]<sub>i</sub>, [I saw it<sub>i</sub> when I was a kid]<sub>s</sub>] (Lambrecht 2001: 1052 の括弧等を修正)
- (10) a. [[XP] [...—]<sub>s</sub>] (Prince 1984 を参考にした)  
b. [[This movie] [I saw — when I was a kid]<sub>s</sub>] (Lambrecht 2001: 1052 の括弧等を修正)

### 3.2.2.2 左方転位構文の意味的特徴

続いて、左方転位構文の意味的特徴を整理する。Lambrecht (1994) によれば、左方転位構文の基本的な意味として、主題昇格 (topic-promotion) の意味があるとされる。より具体的には、左方転位構文は「指示対象を主題容認尺度において accessible の状態から active の状態 [...] へと昇格させるために用いられる文法的装置であると語用論的に定義できる」と述べられている (Lambrecht 1994: 183 訳は本稿筆者による<sup>6</sup>)。

ここで、主題容認尺度 (Topic Acceptability Scale) とは、図 2 のような「主題の指示対象の活性度・同定可能性の状態と、文の語用論的容認性との一般的な相関関係」を指す (Lambrecht 1994: 165 訳は本稿筆者による<sup>7</sup>)。つまり、この尺度では、図 2 のように、名詞句の指示対

<sup>6</sup> “The detachment [...] construction can then be defined pragmatically as a grammatical device used to promote a referent on the Topic Acceptability Scale from accessible to active status [...].”  
(Lambrecht 1994:183)

<sup>7</sup> “[A] general correlation between the activation and identifiability states of topic referents and the pragmatic acceptability of sentences” (Lambrecht 1994:165)

象の談話内での活性度（図2の左側）と、その指示対象を主題として含む文の容認性（図2の右側）との対応関係が表されているわけである。具体的には、例えば、談話内での活性度が *accessible* の指示対象は、活性度が *active* の指示対象に比べて、主題としての容認性がやや低くなるということになる。

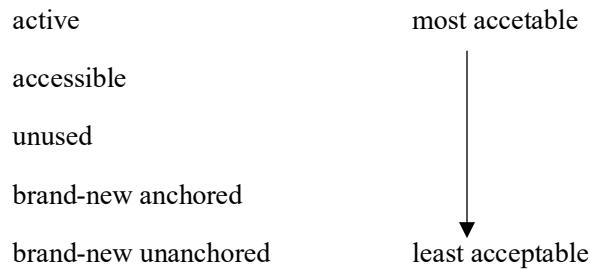


図2：主題容認尺度 (Lambrecht 1994: 165)

さて、左方転位構文が持つ主題昇格という意味特徴を、(11) を例に見てみよう。(11) では、最終文で *Now the wizard, he lived in Africa.* という左方転位構文の例が用いられているが、この文が発話される時点では、指示対象 “(a) wizard” の活性度は、図2の *accessible* の状態であると言える。なぜなら、“(a) wizard” は、最初の文 *Once there was a wizard.* で導入され *active* になるものの、他の指示対象 (“the first son” など) が *active* になることで、相対的に活性度が降格するからである。その降格した活性度を再び *active* の状態に昇格し、主題として容認されやすくする働きが、左方転位構文の持つ主題昇格の意味であるとされる (Lambrecht 1994: 181–184)。

- (11) Once there was a *wizard*. *He* was very wise, rich, and was married to a beautiful witch. They had two sons. The first was tall and brooding, he spent his days in the forest hunting snails, and his mother was afraid of him. The second was short and vivacious, a bit crazy but always game.  
*Now the wizard, he* lived in Africa. (Lambrecht 1994: 177 斜字は原文による)

また、左方転位構文と主題化構文とでは、前置名詞句の指示対象に関して、好まれる活性度に違いがあるとされる。この違いを、Gregory and Michaelis (2001) の挙げる (12) の例で示そう。主題化構文を用いた (12A) と左方転位構文を用いた (12A') では、どちらも照應的代名詞 (anaphoric pronoun) の *that* が用いられているが、Gregory and Michaelis によれば、

このうち左方転位構文を用いた (12A') は容認されないとされる。これは、左方転位構文が持つ主題昇格の意味と、すでに active な指示対象を指す照応的代名詞 *that* とが相容れないからである (Gregory and Michaelis 2001: 1702)。

(12) Context: A has just outlined some possible policies for local school board.

B: Uh huh. That's some pretty good ideas. Why don't you do something with those? You should run for a local school board position.

A: **That I'm not so sure about Ø.** I've got a lot of things to keep me busy.

A': **\*That I'm not so sure about it.** I've got a lot of things to keep me busy.

(Gregory and Michaelis 2001: 1669 太字と「\*」は原文による)

実際に、Gregory and Michaelis (2001) は、Switchboard Telephone Corpus (Godfrey et al. 1992) での調査結果から、主題化構文は左方転位構文に比べて前置名詞句の指示対象の活性度が高い傾向にあることを明らかにしている (Gregory and Michaelis 2001: 1693)<sup>8</sup>。さらに、Gregory and Michaelis によれば、同コーパスでの調査結果では、主題化構文の名詞句は 25% が照応的代名詞であったのに対して、左方転位構文の名詞句には照応的代名詞が 1 つも生じなかつたとされている (Gregory and Michaelis 2001: 1670)。

### 3.2.3 左方転位モデルによる無助詞主題構文の分析

最後に、先行研究による日本語の無助詞主題構文の分析モデルを見ておこう。3.2.1 節でも述べた通り、無助詞主題構文は、国語学や日本語学において多くの先行研究が存在する。しかし、理論的な枠組みに基づいて、通言語的な観点から、特に意味と形式の両面に着目してこの構文を分析した先行研究は非常に少なく、管見の限り、山泉による一連の研究 (Yamaizumi 2011, 2018, 山泉 2013) のみであると言える。以下では山泉 (2013) を中心に、

<sup>8</sup> Lambrecht (1994) でも、左方転位構文と主題化構文の機能の違いに関する以下の予測が述べられている。なお、ここでの “accessibility” とは、図 2 の左側の尺度を指す。

“Topicalization generally seems to require a higher degree of accessibility than left detachment, but much empirical research is necessary before any substantive claims can be made to this effect.”

(Lambrecht 1994: 195)

「主題化構文は、一般的に、左方転位構文よりも高いアクセスの度合いを要求すると思われる。しかし、そのような効果に関して実質的な主張を行う前には、多くの経験的な研究が必要である。」(訳は本稿筆者による)

山泉による無助詞主題構文の分析を見ていこう。

山泉（2013）は、Lambrecht（1994, 2001）による英語などの左方転位構文の記述を基に、日本語の無助詞主題構文が、Lambrechtによる左方転位構文の記述と構造上も機能上も類似しているとした上で、(13) の分析モデルを提案している。本稿では (13) のモデルを「左方転位モデル」と呼び、以下で詳しく見ていく。

(13) 「主題的機能のある無助詞名詞句は、*pronominal* がゼロになった左方転位要素である」（山泉 2013 : 450）

(13) による分析を詳しく見ていくために、まずは、山泉（2013）による「日本語の左方転位構文<sup>9</sup>」の形式と意味の記述について確認しておこう。まず、形式的特徴について、山泉（2013）は、Lambrecht（2001）による (9) の形式表示を基に、日本語の左方転位構文の形式を (14) のように表示し、例としては (15) を挙げる。(15) では、「この手袋」という左方転位要素（山泉に倣い Left-Dislocated Element を略して LDE と表示する。(9) の XP におおよそ相当）が、「誰がこれを買ってくれたの」という主節（山泉に倣い clause を略して cl と表示する。(9) の S におおよそ相当）の前に生起し、かつ、「この手袋」と同一指示の代名詞的要素（pronominal）「これを」が主節の中に生起している。

(14) [[LDE]<sub>i</sub> cl[...pronominal,...]] （山泉 2013 : 432 表記を一部修正した）

(15) [[この手袋]<sub>LDEi</sub> [誰が これを<sub>proi</sub> 買ってくれたの]

（山泉 2013 : 433 の例に括弧等を付し、句読点を省略した）

しかし、山泉（2013）では、日本語において左方転位構文を規定する際、3.2.2 節で触れた、英語における左方転位構文と主題化構文との区別が問題になると述べられている（山泉

<sup>9</sup> のちの議論でもポイントとなるが、山泉（2013）や、その元となった Lambrecht（2001）では、左方転位構文は通言語的に普遍的な構文であると捉えられている。例えば山泉（2013）では、Lambrecht（2001）を参照し、「左方転位はほとんどの言語で見られる構文である」と述べているが（山泉 2013 : 431）、これは Lambrecht による以下の記述を踏まえたものであると考えられる。この点については、3.3.2 節で関連する問題を扱う。

“[D]islocation construction can be identified in most, if not all, languages of the world, independently of language type and genetic affiliation.” (Lambrecht 2001: 1051)

「転位構文は、全ての言語とは言わずとも、言語類型や系統関係と関わらず、世界のほとんどの言語において同定が可能である。」（訳は本稿筆者による）

2013 : 435)。つまり、山泉によれば、日本語の代名詞的要素は一般にゼロ形式 ( $\phi$ ) でもあり得るため、形式的規定が (14) だけであると、(16a) のような例があった場合に、(16b) のような、主節にゼロ形式の代名詞的要素が存在している左方転位構文であるのか、それとも、(16c) のような、主節に空所が存在している主題化構文であるのかが一見して決定されないという問題が生じるわけである。

- (16) a. このチャーハン、タケノコが入ってる。 (作例)  
b. [[このチャーハン]<sub>LDEi</sub> [ $\phi_{\text{proi}}$  タケノコが入ってる]] (cf. (9) )  
c. [[このチャーハン] [\_\_ タケノコが入ってる]] (cf. (10) )

したがって、山泉 (2013) は、日本語においても左方転位構文と主題化構文の区別を維持するため、(17) の基準を設定する。この基準に従えば、(16a) は、代名詞的要素が形を伴っては存在していないものの、前置された要素「このチャーハン」と同一指示の代名詞的要素として、「これは<sup>10</sup>」や「これには」などが挿入できる<sup>11</sup>ため、主題化構文ではなく左方転位構文であると分析されることとなる。

- (17) 「前置された要素と同じインデックスを持つ pronominal にあたる名詞的要素が形を伴って存在していないものでも、代名詞+格助詞を pronominal として節の中に入れようすれば入れられるものは左方転位とみなす」 (山泉 2013 : 435)

続いて、左方転位モデルにおける左方転位構文の意味的特徴についても確認しておこう。山泉以前の研究では、3.2.2 節で見た Lambrecht (1994, 2001) や Gregory and Michaelis (2001) を含め、左方転位構文の転位名詞句は、主題をアナウンスする機能を持つという見解で一致していたとされる。しかし、山泉は、(18B) に見られるように、左方転位構文の転位名詞句 (ここでは「山田花子」) が焦点をアナウンスする場合もあることを指摘し、左方転位構文の機能の記述として、新たに (19) を提案している。

---

<sup>10</sup> (17) での「格助詞」には、「は」も含まれるとされる。

<sup>11</sup> このテストについては、3.3.1.2 節で問題点を指摘し、3.5.2 節で本稿の提案を基に考察する。

(18) A : 誰が一郎の母ですか。

B : 山田花子<sub>LDE</sub>、彼女<sub>pro</sub> が母です。 (山泉 2013 : 439 下線とラベルは原文による)

(19) 左方転位構文の転位名詞句の機能は、「何らかの情報構造的役割（主題や焦点）をアナウンスすること」である<sup>12</sup>。 (山泉 2013 : 441)

ただし、本章では、焦点のアナウンスに関わる構文は取り立てて扱わない。これには次の2つの理由がある。第一に、焦点をアナウンスする構文は、(4) で見た無助詞主題構文の構文的特徴、特に (4b) の「名詞句を主題として設定」に関する意味特徴とは大きく異なるからである。第二に、左方転位モデルにおいても、日本語の無助詞主題構文の分析に限って言えば、(18B) のような焦点を表す例は直接的に関与しないことによる。これは、山泉によれば、(20) に示されているように、焦点を設定する左方転位構文では、代名詞的要素が形を伴って、ゼロ形式でない形で生じることが義務的であるのに対して、左方転位モデルにおける日本語の無助詞主題構文の分析では、(13) すでに見たように、無助詞主題構文の代名詞的要素は、ゼロ形式である（つまり、少なくとも見かけ上は生起していない）ことが前提とされているからである。助詞のない名詞句が焦点を表す構文に関する本稿の分析は、本稿第5章で行う。

(20) A : 誰が一郎の母ですか。

B : ?山田花子<sub>LDE</sub>、母です。 (山泉 2013 : 439 下線とラベルは原文による)

3.2.3 節のまとめとして、無助詞主題構文 (21a) を用いて、左方転位モデルの要点を整理してみよう。左方転位モデルでは、(21a) は、日本語の左方転位構文である (21b) の代名詞的要素「彼は／彼が」がゼロ形式で現れているものとして、(21c) のように分析される。なぜなら、形式上、(21a) は (21b) から「彼は／彼が」がゼロ化したものと一致し、意味上も、(21ab) の「佐藤くん」は、どちらも主節内容「昨日から実家に帰ってるよ」に対する主題を表していると言えるからである。

---

<sup>12</sup> 「アナウンス」は、以下の引用の太字部分に由来するものである。

“[T]he order topic-comment signals **announcement** or **establishment** of a new topic relation between a referent and a predication” (Lambrecht 2001: 1074 太字は原文による)

「[左方転位構文における] 主題・解説という語順は、指示対象と叙述の間の新たな主題関係をアナウンスしたり設定したりすることを示すものである」（訳は本稿筆者による）

(21) 【友達に「佐藤くんは今日、大学に来てないの？」と聞かれたときの応答】

- a. 佐藤くん、昨日から実家に帰ってるよ。(作例)
- b. 佐藤くん<sub>i</sub> {彼は<sub>i</sub>／彼が<sub>i</sub>} 昨日から実家に帰ってるよ。
- c. 佐藤くん<sub>i</sub> φ<sub>i</sub> 昨日から実家に帰ってるよ。

### 3.3 左方転位モデルに残された問題点

以上で見たように、左方転位モデルは無助詞主題構文に新たな視点を与えたものとして、非常に意義深いものであると言える。しかし、このモデルには、大きく分けて次の2つの問題点が残されていると考えられる。1つは、左方転位モデルで扱える分析対象の範囲に関するものであり、もう1つは、このモデルの前提であるとも言える、言語間の構文同定に関するものである。

#### 3.3.1 分析対象に関する問題点

まず、1つ目の問題点として、左方転位モデルが扱える例の範囲に関する問題を取り上げる。具体的には、先に見た(17)の基準を設定することによって、左方転位モデルでは扱えない無助詞主題構文の例が存在してしまう点と、(17)の基準がうまく機能しない場合がある点を順に見ていく。

(17) 「前置された要素と同じインデックスを持つ pronominal にあたる名詞的要素が形を伴って存在していないものでも、代名詞+格助詞を pronominal として節の中に入れようとすれば入れられるものは左方転位とみなす」(再掲)

##### 3.3.1.1 左方転位モデルでは扱えない例の存在

3.2.3 節で確認したように、左方転位モデルでは、形を伴った代名詞的要素が主節に現れていない場合、(17)を満たす例のみが分析対象の基準となっている。しかし、この基準によって、左方転位モデルには、Yamaizumi (2018) が(22)で指摘する「限界」が生じることとなる。

- (22) 「この [(17) の] 基準には、Lambrecht(2001) が非連結主題構文と呼ぶ、 [...] 転位要素が後続述語に対して意味・統語的関係を持たず、項や付加詞としての役割を果たさないものについては有効に働くかという点において、限界がある。」  
(Yamaizumi 2018: 83 脚注 8 訳は本稿筆者による<sup>13</sup>)

(22) について理解するために、まずは Lambrecht(2001) による非連結主題構文 (unlinked topic construction) の記述について確認しておこう。この構文は、まず、(23) や (24) のように、転位名詞句 (*the typical family today* や *tulips*) に対応する代名詞的要素が主節内に現れないという特徴を持つ。

- (23) (From a TV interview about the availability of child care)

That isn't the typical family anymore. The typical family today, the husband and the wife both work. (Lambrecht 1994: 193)

- (24) (Talking about how to grow flowers)

Tulips, you have to plant new bulbs every year? (Lambrecht 1994: 193)

そして、Lambrecht (2001) によれば、この構文における転位名詞句と主節との意味的関係は、「関連があること (relevance)」という語用論的なものであるとされる (Lambrecht 2001: 1058)。ここで、「関連がある」とは、Strawson (1964) で規定されているように、ある述べ立てが「現在の関心事について情報を与えたり加えたりする」という意味的関係のことだと考えられる (Strawson 1964: 97, Lambrecht 1994: 119 訳は本稿筆者による。Strawson 1964 による原文を脚注に示す<sup>14</sup>)。したがって、(23) で言えば、名詞句 *the typical family today* は主節 *the husband and the wife both work* とは項や付加詞と述語の間のような統語的関係を持たないが、それでもこの例が解釈可能であるのは、主節の内容が名詞句の指示対象に関して何らかの情報を加えていると解釈されるためであると言える。

以上の内容を踏まえると、(22) で指摘されている「限界」とは、左方転位モデルでは、

<sup>13</sup> “This criterion has a limitation in that it does not work for what Lambrecht (2001) calls unlinked-TOP construction [...], where the dislocated element has no semantic or syntactic relation to the following predicate and does not play any role as an argument or adjunct.” (Yamaizumi 2018: 83 脚注 8)

<sup>14</sup> “to give or add information about what is a matter of standing current interest or concern”  
(Strawson 1964: 97)

無助詞主題名詞句と主節との関係が、項と述語の間の意味的関係や代名詞的要素による同一指示などの統語的関係によって保証されていない例が扱えないことを意味していると考えられる。具体的には、(25)(26)(27)のような無助詞主題構文は、左方転位モデルでは扱うことができないと言える。なぜなら、これらの例では、「昨日話してた旅行」「ケーキ」「忘年会のお店」と同一指示の代名詞的要素を主節内に復元することは不可能であるため、(17)の基準を満たさないからである。

- (25) 【旅行の計画を立てた時にその場にいなかった花子に、あとで予定を聞きに行つた。聞いてきた花子の予定を他の旅行メンバーに伝える時の発話】

昨日話してた旅行、花子は10月まで仕事で忙しいみたいだよ。 (作例)

- (26) 【クリスマスの日、帰り道でケーキを買ってくるよう言っていた人の発話】

ただいま。ケーキ、駅前のお店は混んでたからさ、結構遠いここまで行ってきちゃったよ。 (作例)

- (27) 【ビール好きの話者の希望に反して、忘年会はワイン専門店で行うことになった。その決定の後で呟く発話】

忘年会のお店、僕はワインよりビールが飲みたかったな...。 (作例)

しかし、(25)や(26)や(27)も、3.2.1節で確認した(4)の構文的特徴に照らせば、無助詞主題構文であることに変わりないという点は重要である。つまり、例えば(25)であれば、助詞を伴わない名詞句「昨日話してた旅行」の後ろに主節「花子は10月まで仕事で忙しいみたいだよ」が続く形式であり、また、その意味として、無助詞名詞句の指示対象が主節内容に対して主題・解説の意味を表している点において(21a)などの例と共通している。したがって、代名詞的要素の復元の可否に関わらず、(25)と(21a)などは同様に分析される必要があるはずである。

- (21a) 【友達に「佐藤くんは今日、大学に来てないの?」と聞かれたときの応答】

佐藤くん、昨日から実家に帰ってるよ。(再掲)

### 3.3.1.2 代名詞的要素の「挿入」や「復元」

左方転位モデルが扱える例に関するもうひとつの問題点として、(17) の基準そのものに関して、有形の代名詞的要素の「挿入」や「復元」というテストは上手く機能していないのではないかというものがある。例えば、(28a)(29a) は、山泉 (2013) で無助詞主題構文の例として挙げられているものであるが、それに有形の代名詞的要素を復元した (28b)(29b) は、少なくとも本稿筆者や周囲の日本語母語話者にとってぎこちなく感じる。

(28) 【話者の家の玄関から靴を履いて帰ろうとしている人へ】

- a. くつべら使う? (山泉 2013 : 449)
- b. ?くつべら {それを/それは} 使う?

(29) 【家族に】

- a. 郵便屋さんもう来た? (山泉 2013 : 449)
- b. ?郵便屋さん {彼が/彼は} もう来た?

これに対して、確かに左方転位モデルでも、(30) のように、代名詞的要素の復元によって文が不自然になり得ることが述べられている。しかし、仮に (17) と (30) を両立させた場合、つまり、代名詞的要素に形を与えた例が不自然になってしまっても良いと想定する場合、(17) の「代名詞+格助詞を *pronominal* として節の中に入れようとすれば入れられる」という基準は、恣意的なものになってしまう危険性があるとも言える。

(30) 「省略されている *pronominal* に形を与えた場合、結果としてできる文が元のコンテクストで原文よりも不自然になることがあり得る。形式が違えば機能・意味が違うのが言語の常態であるから、ゼロになっていると正しく想定されているものに形を与えた場合でさえ、ゼロのままの文とは適切に使える場面が厳密には異なってくることは当然予想されることである。」(山泉 2013 : 457 脚注 16)

### 3.3.2 理論的前提に関する問題点

次に、左方転位モデルが抱える2つ目の問題点を述べる。2つ目の問題点は、左方転位モデルが (17) の基準を立てようとした理論的前提、すなわち、構文の通言語的（非）普遍性に関するものである。具体的な論点としては、日本語の無助詞主題構文が果たして本当に英

語の左方転位構文と同じ構文であると分析できるかどうかが問題となる。本節では、この論点に対して、左方転位モデルの前提とは異なり、日本語の無助詞主題構文と英語の左方転位構文では、表す意味の範囲が異なることを指摘し、したがって、無助詞主題構文は左方転位構文とは独立に分析される必要があると述べる。

3.2.2 節の (12) で確認したように、英語の左方転位構文には、名詞句の指示対象の活性度が高いものは容認されづらい点、特に、照応詞のような、活性度の極めて高い指示対象を表すものは容認されない点が指摘されている。したがって、仮に日本語の無助詞主題構文が左方転位構文の一種であると想定するならば、無助詞主題構文でも、Gregory and Michaelis (2001) の調査結果が示すように、談話上の活性度が高い指示対象を表す名詞句は容認されにくいことが予想される。

(12) Context: A has just outlined some possible policies for local school board.

B: Uh huh. That's some pretty good ideas. Why don't you do something with those? You should run for a local school board position.

A: **That I'm not so sure about o.** I've got a lot of things to keep me busy.

A': \***That I'm not so sure about it.** I've got a lot of things to keep me busy. (再掲)

しかし、この予想に反して、以下の (31) や (32) に見られるように、日本語の無助詞主題構文では、無助詞主題名詞句の指示対象の活性度が高くとも、問題なく成立する<sup>15</sup>。例えば、『名大会話コーパス』<sup>16</sup>の例 (31) では、M033 の最終発話は「夕飯」を無助詞主題名詞句とする無助詞主題構文であると考えられるが、この発話の直前で F001 が「もう夕飯だよ」と発話していることから考えても、「夕飯」は談話の中で活性度が非常に高い状態にあると言える。さらに、同コーパスでは、(32) に見られるように、談話内で活性度の高い「青空文庫」を指すと思われる照応詞「それ」が用いられている例も観察される。このことは、(12A) と (12A') の対比で観察したような、英語における構文の区別とは大きく異なる。

<sup>15</sup> 同様の指摘として、金 (2016) は、自然談話資料の分析を基に、無助詞が用いられる場合の一つとして、「談話で活性化しているものを表す名詞句の場合」を挙げている（金 2006 : 160）。

<sup>16</sup> 藤村・大曾・大島 (2011) による。例文の検索には、全文検索システム「ひまわり (ver. 1.5.5)」を用いた。なお、相槌やフィラーを省略した箇所がある。

(31) 【会話の録音中、M033 はお腹が空いてしまった】

M033：じゃあ、僕のこのお腹がすいてるのはどうしてくれんのよ。

F001：そんなにすいてんの？もう夕飯だよそろそろ。

M033：夕飯、作んの俺じゃあねえかよ。

(『名大会話コーパス』 下線は本稿筆者による)

(32) 【F132 と F098 が録音の目的に関して話している】

F132：初めっから辞書を作るってわけね。

F098：辞書じゃないのね。とりあえず、なんていうの？基礎資料？コーパスを作る  
わけ。コンピュータで検索できるようにそのもとの資料をコンピュータに  
入れたいわけ。で、毎日新聞とか、それから、ネットの青空文庫って知って  
る？あ、関係ないもんね。

F132：えっ？

F098：青空文庫って。日本語の人には関係あるんだけど、版権が切れた小説とか  
を。

F132：はーい、はい。あつ、聞いたことある。それ、話を聞いたことある。

(『名大会話コーパス』 下線は本稿筆者による)

したがって、日本語の無助詞主題構文では、左方転位モデルの前提とは異なり、英語の左方転位構文の表す意味の範囲（の少なくとも一部）に加えて、英語の主題化構文が表すよう、談話内ですでに認知的活性度が高くなっている指示対象の主題という意味も表すと言える<sup>17</sup>。言い換えれば、左方転位モデルにおいて (17) が必要とされる根拠である英語の左方転位構文と主題化構文の区別は、少なくとも日本語には当てはまらないものであり、そもそも (17) の基準は必要ないものであったと言えよう。

<sup>17</sup> なお、本節での議論に対して、例えば「左方転位構文自体は普遍的な構文であるが、日本語と英語でそれぞれ異なる意味を有している」といった反論が想定できる。しかし、そのような反論を行う場合、意味と形式の組み合わせとして定義されるはずの構文を、形式面のみによって同定してしまっているという新たな問題点が生じることとなる。また、この反論では、構文の形式的同定においても、例えば日本語の「名詞句」と英語の「名詞句」などが同一の統語的カテゴリであることを暗黙裡に認めていることも問題であると考えられる。

### 3.4 理論的背景

本節では、前節で見た問題点を解決するために、2つの理論的背景を導入する。まず、一つ目の背景として、日本語の名詞修飾節に関する議論（特に Matsumoto 1988, 松本 1993）を概観し、松本が従来の名詞修飾節研究に対して指摘する問題点と、本稿が前節で左方転位モデルに対して指摘した問題点が同趣旨の問題であることを確認する（3.4.1 節）。続いて、二つ目の理論的背景として、本稿第2章で見た Croft (2001, 2020) の主張から、構文は言語固有の単位であることを簡潔に再確認する（3.4.2 節）。

#### 3.4.1 名詞修飾節の統一的分析

松本によれば、従来、日本語の名詞修飾節の研究<sup>18</sup>は、英語の関係節（relative clause）の研究を基にモデル化が行われてきたとされる（Matsumoto 1988: 167）。具体的には、(33a) のような、主要部名詞句と同一指示の空所（「 $\phi$ 」で表した）を修飾節内に持つことが、英語と同様に、日本語の名詞修飾節でも着目されてきたという。例えば (33a) の名詞修飾節「本を買った」は、(33b) を見て分かるように、名詞修飾節内の主語の位置（(33b) の「 $\phi$ 」の位置）に義務的な空所があり、その空所が主要部名詞句である「学生」と同一指示であると分析される。構文環境を用いた「テスト」の形式で言うならば、(33c) のように、被修飾名詞「学生」に適当な格助詞を付して修飾節の空所に戻すことができる例であるとも言える。

- (33) a. [[本を買った] 学生] はどこですか。  
b. [[ ( $\phi_i$ ) 本を買った] 学生<sub>i</sub>] はどこですか。  
c. 学生が本を買った。 (いざれも Matsumoto 1988: 166 漢字かな表記に改めた)

しかし、日本語の名詞修飾節を上記のモデルで捉える場合、(34a) や (35a) のような例が扱えなくなるという問題点が生じる。なぜなら、例えば (34a) では、(34b) で表したように、名詞修飾節「トイレに行けない」の主語位置の空所は、主要部名詞句である「コマーシャル」と同一指示ではなく、(33c) に倣って「コマーシャル」を修飾節の空所に戻した文である (34c) は、元々の文 (34a) から想定される意味的関係とは大きく異なる意味を表すものとなってしまう。また、(35a) では、そもそも名詞修飾節に空所があるとは言えず、

---

<sup>18</sup> Matsumoto (1988) では、井上 (1976) と奥津 (1974) が挙げられている

(33c) や (34c) のような文を作ることは不可能ですらある。

(34) a. このごろ [[トイレに行けない] コマーシャル] が多くて困る。(松本 1993 : 102)

b. このごろ [[(ϕ<sub>i</sub>) トイレに行けない] コマーシャル<sub>j</sub>] が多くて困る。

c. コマーシャルがトイレに行けない。

(35) a. [[頭の良くなる] 本] でも買っていらっしゃい。(松本 1993 : 102)

b. ??本が頭の良くなる。

松本は、(33a)(34a)(35a)の例を統一的に扱うためには、名詞修飾節内の空所の有無に関わらず、意味論的・語用論的な要因を基に分析を行うことが必要であると述べる。つまり、名詞修飾節と被修飾名詞の間の意味的関係を保証するものは、英語のような同一指示の空所ではなく、名詞修飾節が表す事態と被修飾名詞が表す指示対象との間に、文脈に適した意味的関係が解釈されることだと分析するわけである。実際に、空所と主要部名詞との同一指示によって解釈が決定されているように見える(33a)の「本を買った学生」であっても、使用状況によって、少なくとも(36)の3通りの解釈があり得ると松本は述べる。つまり、(33a)も、その成立や具体的な意味の解釈には、意味論的・語用論的要因が大きく貢献しているということである。

(36) a. the student who bought the book

b. the student from whom (x) bought the book

c. the student for whom (x) bought the book (松本 1993 : 103)

さて、松本以前の名詞修飾節研究が抱える以上の問題点は、以下の2点において、左方転位モデルが抱える問題点と平行的なものであると言える。第一に、どちらの問題点も、その発生の原因が、一部の例を基に分析モデルを立ててきたことにある点である。一部の例とは、名詞修飾節の分析モデルで言えば、(33a)のような空所と被修飾名詞の同一指示が成り立つ例であり、左方転位モデルであれば、(16a)や(28a)や(29a)のような、代名詞的要素が(3.3.1.2節で指摘した問題を無視できたとして)挿入可能な例である。

第二に、どちらの問題点も、日本語の構文をモデル化する際に、英語など他の言語の構文

の分析が日本語にも当てはまることを前提としていた点である。これは、松本が指摘した問題点で言えば、日本語の名詞修飾節が、英語の関係節と同様、被修飾名詞と同一指示の空所を持つという前提である。左方転位モデルで言えば、これまで述べてきたように、日本語の無助詞主題構文が、英語などの左方転位構文と同様、主題化構文との区別を持つという前提である。

### 3.4.2 構文の言語固有性

本節では、本稿第2章で説明した Croft の構文文法 (Croft 2001, 2020 など) のうち、本章の考察に直接的に関わるものとして、特に 2.3.2 節の「構文は各言語に固有である」ことを簡単に振り返る。

Croft の構文文法が持つ大きな特徴は、(37) によって定義される構文に関して、各構文は各言語に固有の単位であると主張する点にある。したがって、例えば「複数屈折」や「受動態」などの構文は、通言語的に共通する普遍的な単位ではなく、(38) のように、特定の言語に固有の存在として捉えられる。

- (37) 「**基本的文法ユニット**の唯一のタイプは、**構文**である。構文とは、極小的なものとも複合的なものとも、あるいはスキーマ的なものとも実質的なものともなりうる形式と意味の組み合わせのことを指す」

(Croft 2001: 362 訳と太字はクロフト 2018 による<sup>19)</sup>)

- (38) 特定の言語内においても、また、言語間においても、普遍的なカテゴリや構文は存在しない。(Croft 2001: 1.5 節および 1.6.1 節)

本稿 2.3.2 節では、このことの例として、Croft (2020) が示す 5 つの言語における「複数屈折」の意味の範囲が、表 1 のように、一部は重なりながらもそれぞれに異なっていることを説明した。本稿の以下でも、(38) を理論的背景として、すなわち、日本語の無助詞主題構文が日本語の文法体系に固有の単位であることを背景に、提案および考察を行う。

---

<sup>19</sup> “The only type of primitive grammatical units are constructions—parings of form and meaning which may be atomic or complex, schematic or substantive[.]” (Croft 2001: 362)

	Guaraní (Tupian)	Usan (Papuan)	Tiwi (Australian)	Kharia (Austroasiatic)	Cree (Algonquian)
<i>1st 2nd pronoun</i>	né 'thou' peé 'you'	ye 'I' yonou 'we'	nja 'I' njawa 'we [excl.]'	am 'thou' ampe 'you'	kīla 'thou' kīlawāw 'you'
<i>3rd pronoun</i>	ha?é 'he/she/it/they'	wuri 'he/she/it' wurinou 'they'	njara 'he' wuta 'they'	hokar 'he/she/it' hokiyar 'they'	wīla 'he/she/it' wīlawāw 'they'
<i>Human</i>	tahaší 'policeman/men'	wau 'child/children'	wuualaka 'girl' wawualakawi 'girls'	lebu 'person' lebuki 'persons'	iskwēsis 'girl' iskwēsisak 'girls'
<i>Animate (nonhuman)</i>	anjuyá 'rat(s)'	qāb-turin 'Pinon imperial pigeon(s)'	waliwalini 'ants'	bilo'i 'cat' biloiki 'cats'	sīsīp 'duck' sīsīpak 'ducks'
<i>Inanimate</i>	apiká 'bench(es)'	ginam 'place(s)'	mampuja 'canoe(s)'	sorej 'stone(s)'	ospwākan 'pipe' ospwākanak 'pipes'

表 1 : 5 言語における複数屈折

### 3.5 提案と考察

本節では、まず、3.5.1 節で、本稿による無助詞主題構文の分析モデルを提案する。続いて、3.5.2 節では、日本語の無助詞主題構文と左方転位モデルの言う「有形の代名詞的要素を伴う左方転位構文」との違いについて述べる。3.5.3 節では、本稿の提案によって、左方転位モデルに残されていた 2 つの問題点が解決することを確認する。最後に、3.5.4 節で、本稿の提案するモデルは、これまで無助詞主題構文に関して指摘してきた事実と矛盾しないこと、および、本稿のモデルでもそれらの事実を十分に説明できることを示す。

#### 3.5.1 無助詞主題構文の新たな分析モデルの提案

本稿は、無助詞主題構文に関して、以下の分析モデルを提案する。すなわち、日本語の無助詞主題構文は、(39) の形式と (40) の意味とが組み合わされた日本語に固有の単位を形成しているというものである。言い換えれば、無助詞名詞句と主節との意味的関係は、構文の部分を成す代名詞的要素の同一指示などによって表されるのではなく、(39) の形式全体に結びついた (40) の意味によるものであると考えるわけである。

(39)  $[[X \phi]_{NP_i} [\dots \phi_i \dots]]_{CLAUSE}$

(40) a. 無助詞名詞句の指示対象と主節事態とは語用論的に関連付けられる

b. 無助詞名詞句の指示対象を主題として設定し、主節でそれについて解説を与える

まず、(39) の形式表示は、3.2.1 節で見た、無助詞主題構文の形式的特徴 (4) を基にしたものである<sup>20</sup>。(39) では、無助詞主題構文が形式的には無助詞の名詞句 ( $NP \phi$ ) と主節 ( $CLAUSE$ ) から成ることが表されている。なお、主節内の「 $\phi$ 」は、主節内に代名詞的要素が現れないことを表すものである。つまり、本稿では、主節内に代名詞的要素が現れているかどうか（左方転位モデルの用語を使えば、代名詞的要素が「有形」か「ゼロ形式」か）によって、異なる構文を成していると考える。この点については 3.5.2 節で詳しく述べる。

次に、(40) の意味表示について、(40a) では、無助詞名詞句の指示対象と主節事態との間の意味的関係が、あくまで語用論的な関連によって保証されることが示されている。したがって、(33a) 「本を買った学生」という名詞修飾節が実際には使用状況などによって複数の解釈が可能であったのと平行的に、例えば (41) の無助詞主題構文も、使用状況によって複数の解釈があり得る。(41) は、形式上、「C はもうそれを食べたみたいだよ」のように代名詞的要素を挿入できることから、確かに左方転位モデルによっても分析可能な例である。しかし、この例では、必ずしも C の食べたものが「牛丼」と同一指示であるとは限らない。具体的には、「もう食べた」の意味することが「もう昼ごはんを食べた」などである可能性があり得る。そして、そのような解釈は、A と B が昼ごはんを作っているという文脈を基に生じるものであって、仮に (41) の文脈が【A と B は夕飯を作っている】や【A や B は夜食を作っている】であれば、さらに異なる解釈が可能になろう。このように、無助詞主題構文の具体的な意味解釈には、文脈に合わせた語用論的な関連付けが働いているわけである。

(41) 【A は B と昼ごはんに牛丼を作っている。牛丼が出来上がりそうなので、B は、隣の部屋にいる C も一緒に牛丼を食べるかどうか聞きに行った。数分後、C の部屋から戻ってきた B の発話】

牛丼、C はもう食べたみたいだよ。（作例）

<sup>20</sup> 第 5 章では、無助詞主題構文の形式的特徴、特に、(5) や (6) の助詞省略構文との形式的区別について詳しく議論する。

続いて、(40b) の意味的特徴は、名詞句と主節の関係が主題・解説の意味的関係であることを表している。なお、ここでの「主題として設定」とは、3.2.2.2 節で見た英語の左方転位構文が持つ「主題設定 (topic establishment)」の意味と部分的に重なりはするが、完全に一致するわけではない。具体的には、日本語の無助詞主題構文も英語の左方転位構文も、主節の内容に対する主題を表す点では共通するが、3.3.2 節の (32) で見たように、日本語の無助詞主題構文における「主題」は、談話の中で active な指示対象でもあり得る点において、英語の左方転位構文における「主題」とは異なる。

### 3.5.2 主節内の代名詞的要素の有無による意味の違い

本節では、本稿が (39) と (40) で提案した無助詞主題構文の分析モデルのうち、特に (39) において、主節内に代名詞的要素が現れないと想定したことについて述べる。本稿では、(42) のように主節内に代名詞的要素 (pronominal) が生起しているものと、(39) のように代名詞的要素が生起しないもの (すなわち、無助詞主題構文) とで異なる構文を形成していると考える。これは、(42) と (39) の間で、以下に挙げる 2 つの意味的差異が観察されるためである。なお、以下では、(42) の形式を持ち主題・解説を表す構文を便宜上「左方転位主題構文」と呼ぶ。

(42)  $[[X \phi]_{NP_i} [...]_{pronominal_i...}]_{CLAUSE}$

1 つ目の違いは、左方転位主題構文と無助詞主題構文とで、表される発話の「改まり度」とでも言うべき意味が異なる点である。例えば、左方転位主題構文は、(43) のような国会における発言<sup>21</sup>など、フォーマルな場面でも問題なく用いることができる。これに対して、あえて (43) から代名詞的要素を除き無助詞主題構文として表した (44) は、不自然に響く。なお、(44) の例の発話状況を友人同士の会話などカジュアルな場面に変えた (45) は、問題なく成立する。

---

<sup>21</sup> (43) はいずれも『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』からの用例である。

(43) a. 【不適切な内容が含まれたポスターに関する発言】

　パスポートを持った男性のポスター、これは国際的な差別、それからもちろん性の差別でございます。

b. 【日本と海外の法制度を比較している文脈での発言】

　西ドイツでは、死刑、これは1949年に廃止になっておりますが…

(44) 【いずれも国会での発言】

a. ?パスポートを持った男性のポスター、国際的な差別、それからもちろん性の差別でございます。

b. ?西ドイツでは、死刑、1949年に廃止になっておりますが…

(45) 【いずれも友人同士の会話】

a. パスポートを持ってる男の人のポスター、国際的な差別だし、もちろん性の差別だよ。

b. 西ドイツでは、死刑、1949年に廃止になってるよ。

　続いて、2つ目の意味的個別性として、無助詞主題構文は聞き手に対して何らかの働きかけの意味を持つのに対して、左方転位主題構文はそのような意味を持たない点が挙げられる。先行研究（藤原 1992, 橋口 2000, 小屋 2007, 岡田 2015など）によれば、無助詞主題構文は、単に事実を述べる (46a) のような例だと不自然に響くのに対して、相手に対して何らかの働きかけを行う (46bcd) では自然に響くという意味的特徴を持つ。具体的には、(46b) で言えば「聞き手への教え」、(46c) で言えば「聞き手への確認」、(46d) で言えば「伝聞情報の聞き手への伝達」といった積極的な働きかけがあると言えよう。本稿では、小屋 (2007) の用語を基に、このような無助詞主題構文の意味特徴を「発話行為的効果<sup>22</sup>」と呼ぶこととする。

---

<sup>22</sup> 藤原 (1992) の用語では「動能的機能 (conative function)」(藤原 1992:142) であり、岡田 (2015) では尾上 (2014) による「内容自立の文」と「言表行為の文 (特に、対相手的行為の文)」の区別を基に、「対相手的機能」(岡田 2015: 229) という用語が用いられている。

- (46) a. ?君佳 ϕ、ピアニストです。  
b. 君佳 ϕ、ピアニストですよ。  
c. 君佳 ϕ、ピアニストよね？  
d. 君佳 ϕ、ピアニストなんだって。 (いずれも小屋 2007 : 10 「?」は小屋による)

無助詞主題構文が発話行為的効果を持つのに対して、左方転位主題構文には、そのような特徴は観察されない。例えば、(46a) に代名詞的要素を生起させ左方転位主題構文として表した (47) は、(46a) に比べれば自然に響く。また、(48) と (49) の対比<sup>23</sup>が示しているように、左方転位主題構文は、「塔の三階にある書斎」や「山都町」に関して事実を述べるだけの意味も表せるのに対して、それらを無助詞主題構文を用いて表すと不自然に響く。

- (47) 君佳 ϕ、彼女は、ピアニストです。
- (48) a. 塔の三階にある書斎、それはモンテーニュにとってまことに望ましい、かけがえのないトポスだったのだ。(山岸健『人間的世界の探究』)  
b. 山都町、そこは「そば博覧会」という全国規模のイベントを開催するには、いささか小規模な集落である。(石川文康『そば往生』)
- (49) a. ?塔の三階にある書斎、モンテーニュにとってまことに望ましい、かけがえのないトポスだったのだ。  
b. ?山都町、「そば博覧会」という全国規模のイベントを開催するには、いささか小規模な集落である。

もちろん、無助詞主題構文の (49) も、(50) のように、「ですよ」や「じゃないか？」などによって、相手に対する働きかけを明確に示せば、容認度は上がる。

- (50) a. 塔の三階にある書斎、モンテーニュにとって本当に望ましい、かけがえのないトポスだったんですよ。  
b. 山都町、「そば博覧会」という全国規模のイベントを開催するには、いささか小さい集落じゃないか？

---

<sup>23</sup> (48) はいずれも『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』からの用例である。

### 3.5.3 問題点の解決

本節では、本稿の提案によって、左方転位モデルに残されていた2つの問題点が解決されることを見ていく。左方転位モデルが抱える問題点とは、「代名詞的要素を挿入できない無助詞主題構文が存在し、また、代名詞的要素を挿入できる無助詞主題構文であっても、それによって不自然に響くようになる場合がある」というものと、「英語における左方転位構文と主題化構文との区別は、日本語の無助詞主題構文には適用できない」というものであった。

まず、一つ目の問題点について、本稿では、(17) の基準を設げず、無助詞主題構文は Croft の構文文法で定義されるところの構文、すなわち、(39) の形式と (40) の意味の組み合わせから成る単位であると提案した。したがって、(17) の基準を満たすかどうかとは独立に、(16a) や (28a) (29a) も、(25) (26) (27) も、(39) と (40) の構文的特徴を持つものはすべて無助詞主題構文であると分析できるようになるわけである。例を (51)(52) として再掲する。

(51) 左方転位モデルでも本稿のモデルでも扱える例

- a. このチャーハン、タケノコが入ってる。 (= (16a) )
- b. 【話者の家の玄関から靴を履いて帰ろうとしている人へ】  
くつべら使う？ (= (28a) )
- c. 【家族に】  
郵便屋さんもう来た？ (= (29a) )

(52) 左方転位モデルでは扱えないが、本稿のモデルでは扱える例

- a. 【旅行の計画を立てた時にその場にいなかった花子に、あとで予定を聞きに行つた。聞いてきた花子の予定を他の旅行メンバーに伝える時の発話】  
昨日話してた旅行、花子は10月まで仕事で忙しいみたいだよ。 (= (25) )
- b. 【クリスマスの日、帰り道でケーキを買ってくるよう言っていた人の発話】  
ただいま。ケーキ、駅前のお店は混んでたからさ、結構遠いとこまで行ってきちゃったよ。 (= (26) )
- c. 【ビール好きの話者の希望に反して、忘年会はワイン専門店で行うことに決まった。その決定の後で呟く発話】  
忘年会のお店、僕はワインよりビールが飲みたかったな...。 (= (27) )

さらに、本稿は、3.3.1.2 節において、代名詞的要素を「有形化」することで不自然に響くようになる無助詞主題構文の存在を指摘したが、そのような例の存在も、本稿の分析にとっては当然のことと予想される。なぜなら、本稿では、主節内に代名詞的要素が生起する構文（すなわち、左方転位主題構文）と、代名詞的要素が生起しない構文（すなわち、無助詞主題構文）はそれぞれ異なる形式と意味から成る個別の構文であると捉えるからである。したがって、代名詞的要素が生起した (28b) や (29b) が不自然だと感じるのは、「友人同士の会話」や「家族同士の会話」のようなカジュアルな文脈と、左方転位主題構文のフォーマルさが適合しないためであると説明できる。例を (53)(54) として再掲する。

(53) 【話者の家の玄関から靴を履いて帰ろうとしている人へ】

?くつべら {それを/それは} 使う？ (= (28b))

(54) 【家族に】

?郵便屋さん {彼が/彼は} もう来た？ (= (29b))

実際に、例えば (53) を（奇妙ではあるが）国会などの改まった場面で発話される文脈に変更した (55a) や (55b) は、元々の文に比べて自然に響くと思われる。

(55) 【外務大臣が友好国を訪問した際、相手国の首相からおみやげとしてくつべらを渡された。しかし、帰国後にそのくつべらを全く使っていなかったことが発覚し、相手国の首相が激怒しているとの報道が出た。今後外務大臣が当該のくつべらを使うかどうかを国会で尋ねる際の発言】

- 大臣、答えてください。くつべら、それを使いますか？
- 大臣、答えてください。くつべら、それは使いますか？

続いて、2つ目の問題点、すなわち、英語の左方転位構文と日本語の無助詞主題構文で表される意味の範囲が異なる点について述べる。3.3.2 節で見たように、「左方転位構文」は通言語的に普遍的であると捉える Lambrecht (2001) や、それを基とする左方転位モデルに反して、日本語の無助詞主題構文は、英語の左方転位構文とは異なる特徴を示した。具体的には、無助詞主題構文では、(31) などに見られるように、談話内で認知的活性度の高い指示対象であっても、問題なく無助詞名詞句として表されるのであった。

(56) 【会話の録音中、M033 はお腹が空いてしまった】

M033：じゃあ、僕のこのお腹がすいてるのはどうしてくれんのよ。

F001：そんなにすいてんの？もう夕飯だよそろそろ。

M033：夕飯、作んの俺じゃあねえかよ。（= (31)）

本稿のモデルでは、このような差異は、問題とならないばかりか、理論的背景から期待されているものであるとすら言える。なぜなら、本稿のモデルでは、日本語の無助詞主題構文と英語の左方転位構文は、それぞれの言語体系に固有の単位であり、ひいては、各構文固有の記号的関係を持つと想定しているからである。

本稿 2.3.3 節で複数屈折の言語間比較を例に示した意味地図モデル（semantic map model）を用いて、主節の前の名詞句（英語の左方転位構文であれば左方転位名詞句、無助詞主題構文であれば無助詞主題名詞句）が表す指示対象の認知的活性度のみに着目して、各構文の意味地図を示すと、ごく単純に、図 3 の関係を成していると言えよう。図 3 の下半分は、図 2 の左側で示されていた、談話内における指示対象の認知的活性度の尺度を一部抜粋し時計回りに 90 度回転させたものである。その度合いのうち、どこからどこまでを構文の意味として表せるかを示したものが図 3 である。

まず、Gregory and Michaelis (2001) が示していたように、英語の左方転位構文では、談話内の認知的活性度が *accessible* な状態の指示対象であれば左方転位要素として表せるもの、認知的活性度が極めて高いもの（例えば、照応詞 *that* で表されるような、談話内ですでに *active* になっている指示対象）については、左方転位要素で表すことはできない<sup>24</sup>のであった。これに対して、日本語の無助詞主題構文は、(52a) などから分かるように、*accessible* な指示対象を無助詞主題名詞句として表せると同時に、(56) などが示すように、すでに談話内で *active* な指示対象も無助詞主題名詞句として表せる点で、英語の左方転位構文よりもやや広い範囲の概念的意味をカバーすると言えるわけである<sup>25</sup>。

<sup>24</sup> Lambrecht (1994) による同様の主張について、脚注 6 と脚注 8 も再度参照されたい。

<sup>25</sup> Nakagawa (2020) では、日本語の主題を表す無助詞（本稿の無助詞主題構文に相当）が表す指示対象の活性度として、*unused* のレベルまで可能であるとされている（Nakagawa 2020: 91, 253）。同ページの Nakagawa による日本語の「が」「は」「というの」「コピュラ+けど」および格助詞と無助詞の意味地図もぜひ参照されたい。

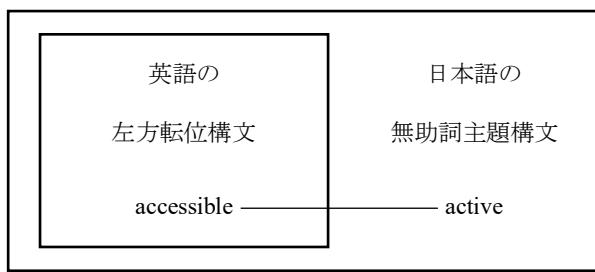


図3：日本語の無助詞主題構文と英語の左方転位構文の意味地図

### 3.5.4 先行研究との整合性

本節では、前節で提案したモデルが、無助詞主題構文に関して従来指摘してきた3つの事実と矛盾しないことを確認する。具体的には、それらの事実が有形の代名詞的要素の存在に動機づけられたものではなく、無助詞主題構文の構文的意味からでも十分説明できることを述べる。以下、先行研究による指摘を(57a)(58a)(59a)に挙げ、それに対する左方転位モデルの説明を(57b)(58b)(59b)に挙げる。

(57) 語順について

- a. 主題性がある無助詞名詞句は文頭にあることが多い（野田 1996など）
- b. 「左方転位の構造から当然のことと理解できる」（山泉 2013:452）

まずは(57)であるが、本稿のモデルは(57a)の事実と矛盾しない。なぜなら、(57)は、代名詞的要素とは独立した要因によるものと言えるからである。(57)は、無助詞主題構文の構造がその構文的意味に動機づけられていることを示すと考えられる。主題の設定という機能は、その性質上、より文頭に近い位置で果たされる方が自然だからである。

(58) 「は」を伴う名詞句との違いについて

- a. 無助詞主題構文は、「は」を伴う構文に比べて「発話の時点ではじめて題目を現場から切り出して来て設定するという印象がある」（尾上 1996など）
- b. 左方転位要素でアナウンスされる主題が「それまでは主題として確立しておらず、左方転位要素としてアナウンスされた時点でそれに対する共同注意が成立し、続く節でようやく主題となるということをとらえたもの」（山泉 2013:452–453）

(59) 無助詞にふさわしい条件

- a. 無助詞にふさわしい条件は、無助詞名詞句の指示対象が「話し手・聞き手間における固有の先行文脈によって共有知識となっており、しかも聞き手の頭の中である程度活性化されている場合」である（大谷 1995 : 293）
- b. 左方転位要素が「同定可能だが、そこで話の中心と言えるほどには活性化していないということに相当する」（山泉 2013 : 453）

続いて、(58) および (59) である。これら 2 つの指摘は、どちらも、無助詞主題構文の発話時点において、無助詞名詞句の指示対象の活性度が典型的には比較的低い（具体的には、図 2 や図 3 における *accessible* 付近の）傾向にあることを指すと思われる。本稿が提案する分析は、これらの指摘に対しても矛盾することはない。なぜなら、(52a) などの例や図 3 で示した通り、本稿のモデルにおいても、日本語の無助詞主題構文が *accessible* の指示対象に関する主題・解説関係を表すこと自体は否定していないからである。

### 3.6 まとめ

本章では、日本語の無助詞主題構文を例に、Croft の類型論的構文文法による発想が、日本語文法の記述と分析に与える新たな視点を示した。具体的には、無助詞主題構文を (39) の形式と (40) の意味から成る単位、すなわち構文であると捉え、かつ、無助詞主題構文が日本語の文法体系に固有の単位であると捉えることで、先行研究に残されていた問題点が解決でき、しかも、これまで蓄積されてきた知見とも矛盾しないことを示した。

## 第4章

### 構文文法からみた無助詞時間節構文

#### 4.1 はじめに

本章<sup>1</sup>は、日本語の複文のうち、(1)のような構文（以下、無助詞時間節構文と呼ぶ）を例に、構文同士の関係に関する議論を行うものである。先行研究（益岡 1997 や日本語記述文法研究会 2008）では、例えば (1a) の「出かけようとしたとき」は、主節「電話のベルが鳴った」に対して時間状況を設定する意味を表すと記述されてきたが、その意味解釈が可能になる理由については、十分な議論が行われているとは言い難く、それによって分析上の問題点も生じていると言える。本章の目的は、本稿第2章で説明した Croft (2001, 2020) の主張に基づけば、先行研究に残された問題点を解決できるだけでなく、日本語学や国語学で従来蓄えられてきた知見とも整合する分析モデルが提案できると示すことにある。

- (1) a. 出かけようとしたとき、電話のベルが鳴った。（益岡 1997 : 14）  
b. 友達を待っているあいだこの本を読んでいたのだ。（益岡 1997 : 141）

本章の構成は以下の通りである。まず、4.2 節では、先行研究による無助詞時間節構文の分析を整理し、その上で、先行研究には2つの問題点が残されていることを確認する。4.3 節では、理論的背景として、Shibatani (2019 など) による関係節構文の分析を例に、構文分析における意味と形式の関係について、Croft の構文文法の主張と関連させながら概観する。4.4 節では、無助詞時間節構文が無助詞主題構文の下位構文として、ネットワークを成して存在しているという仮説を提案した上で、本章による無助詞時間節構文の分析を示し、それによって先行研究の問題点が解決できることを示したのち、無助詞時間節構文と無助詞主題構文の関係について考察を行う。4.5 節はまとめである。

#### 4.2 先行研究とその問題点

本節では、従属節の分類や無助詞時間節構文の記述を行う先行研究を概観し (4.2.1 節)、その問題点を指摘する (4.2.2 節)。

---

<sup>1</sup> 本章は、松浦 (2021) の議論に大幅な加筆および修正を施したものである。

#### 4.2.1 先行研究

##### 4.2.1.1 従属節の分類体系

まずは、議論の背景として、先行研究における日本語の従属節分類の全体像を見ておく。益岡（1997: Ch1, 2014: 539）や日本語記述文法研究会（2008: 6）などが述べているように、従来、日本語の複文研究においては、従属節が複文内で果たす意味や機能による分類が大きな関心を集めてきたと言える<sup>2</sup>。例えば、多くの先行研究（益岡・田窪 1992, 益岡 1997, 日本語記述文法研究会 2008, 前田 2009）では、ラベルの名称などに違いはあるものの、およそ図1のような分類体系が提示されている。

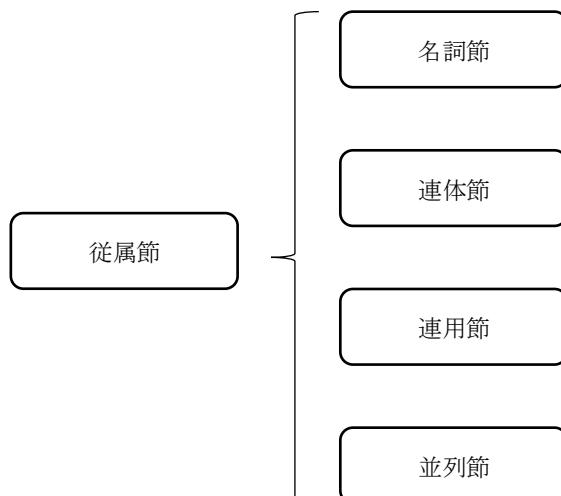


図1：日本語の複文における従属節の分類体系

また、上記の先行研究の記述を基にすると、それぞれの従属節は、おおよそ、(2) のような説明が与えられていると言える。当然のことではあるが、ここでも、各従属節の説明は、それぞれが文内でどのような意味や機能を果たすかという点に主眼が置かれていると言える。なお、図1と(2)に用いられている「名詞節」「連体節」「連用節」「並列節」は、益岡（1997）の用語を代表して用いた。以下でも、用語の混乱を避けるため、従属節のカテゴリ名は引用を除いて益岡（1997）の用語を用いることとする。

<sup>2</sup> 前田（2009）が「構造的な分類」と述べる分類に関しては、例えば南（1974など）によるものがある。ただし、前田（2009）や益岡（2014）によれば、南の従属節に関する議論はあくまで従属節の内部構造に主眼を置いたものであるとされ、本稿が以下で扱う議論とは直接的には関係の薄いものと思われるため、ここでは扱わない。

- (2) a. 名詞節：従属節が名詞句と同様に機能する  
 b. 連体節：従属節が名詞句を修飾する  
 c. 連用節：従属節が述語や主節全体を修飾する  
 d. 並列節：従属節が主節に対して意味的・文法的に対等である

続いて、図1と(2)のうち、本章が分析対象とする「連用節」とその下位類である「時間節」に関する先行研究を見る。先行研究では、連用節を(3)のように定義した上で、その下位類として、連用節が文内で果たす副詞的修飾の種類に応じて、図2のような分類が設定される。

- (3) a. 「連用節は述語や主節全体を修飾する節である。」(益岡 1997:13)  
 b. 「連用節というのは、述語を拡張する節であり、」その多くは「述語を限定して拡張する<sup>3</sup>ものである」(野田 2002:10)  
 c. 「主節の述語を副詞的に修飾する節を副詞節という」  
 (日本語記述文法研究会 2008:6)  
 d. 「述語・述部を修飾する」節を「連用修飾節と呼ぶ」。(橋本 2003:185)

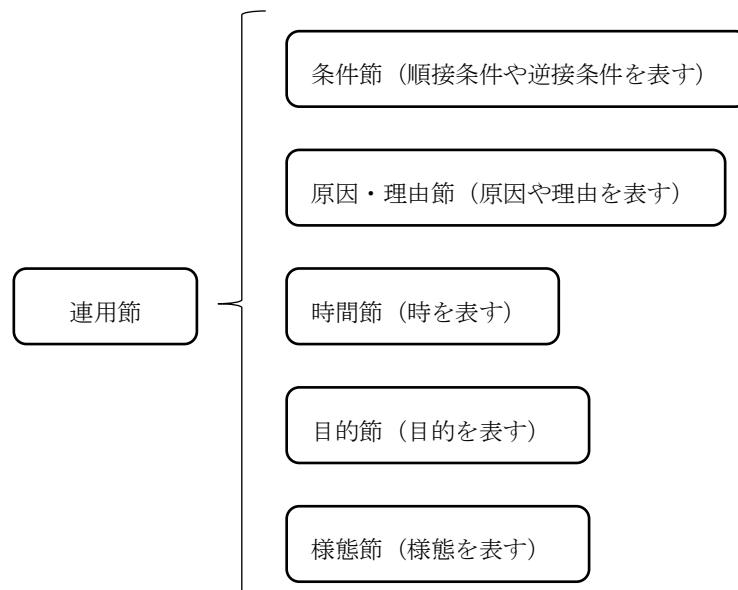


図2：連用節の分類体系（日本語記述文法研究会2008を参考にした）

<sup>3</sup>一般的な用語では、おおよそ「連用修飾する」の意味に相当すると思われる。

以上、先行研究におけるおおよその共通理解として、従属節の分類体系、および、連用節の分類体系を概観した。ここまで的内容を整理すると、本章が考察の対象とする時間節とは、主節事態の時を表すものであり、それによって主節を副詞的に修飾する連用節の一種であると位置付けられる。

#### 4.2.1.2 先行研究による無助詞時間節構文の分析と記述

続いて、先行研究による無助詞時間節構文の分析について整理しておく。なお、以下では、(4)から(8)のような、無助詞時間節構文の連用節部分（(4)や(5)で言えば「出かけようとしたとき」や「友達を待っているあいだ」の部分）を「無助詞時間節」と呼び、(4)や(5)の「電話のベルが鳴った」や「この本を読んでいたのだ」の部分を「主節」と呼ぶこととする。

- (4) 出かけようとしたとき、電話のベルが鳴った。（＝(1a)）
- (5) 友達を待っているあいだこの本を読んでいたのだ。（＝(1b)）
- (6) 由紀子に電話したあとこの手紙を書いた。（益岡 1997：141）
- (7) ここに来るまえ、交番の前でたくさん的人が口論していた。

（日本語記述文法研究会 2008：197）

- (8) そうこうしているうち、帰る時間になった。（日本語記述文法研究会 2008：188）

無助詞時間節が持つ形式的特徴と意味的特徴は、4.2.1.1 節の先行研究を基にすると、(9)のように整理できる。まず、(9a)について、無助詞時間節は、連体節と時間を表す名詞( $N_{TIME}$ )から構成されるという形式的特徴を持つ（益岡 1997：139など）。続いて、(9b)の意味的特徴について、無助詞時間節が行う副詞的修飾とは、具体的には、主節の事態に対する特定の時間状況の設定であるとされる（益岡 1997：144など）。なお、(9a)の「 $\phi$ 」は助詞が生じず、無助詞であることを表す。例えば(9c)の「お風呂に入ったあと」は、形式としては、連体節「お風呂に入った」と時間を表す名詞「あと」から成り、かつ、意味としては、主節「歯を磨いた」に対して「入浴後の時点」という時間状況を設定しているということである。

- (9) a. [[連体節] [N<sub>TIME</sub>]] ϕ  
 b. 主節を副詞的に修飾する。具体的には、主節に対して特定の時間状況を設定する。  
 c. [[お風呂に入った]連体節 [あと]N<sub>TIME</sub>] ϕ 歯を磨いた。(作例)

#### 4.2.2 先行研究の問題点

先行研究による以上の分析は、日本語の複文研究ではおおよそ一般的であると言え、問題はないようにも思える。しかし、本節では、先行研究による分析に2つの問題点が残されていることを見ていく。

1つ目の問題点は、無助詞時間節と共通の形式を持つ他の構文との関連が十分に示されていない点である。前節の(9)で述べたように、無助詞時間節は、[[連体節] [N<sub>TIME</sub>]] の形式を持つ。これと共通の形式であるが異なる意味を持つ構文として、(10a)の下線部のようなものがある。比較のために、無助詞時間節構文の例を(10b)に示す。(10a)の下線部には、(10b)と共通の形式 [[運転している]連体節 [あいだ]N<sub>TIME</sub>] が用いられているが、その意味は(10b)と異なり、主節「全て記録されています」の時間状況を設定しているとは解釈されない。日本語記述文法研究会(2008)の記述を基にすれば、(10a)の下線部の意味は、「運転中の時点」のような、特定の時点を指示するものであると考えられる(日本語記述文法研究会2008:73)<sup>4</sup>。したがって、図1や図2に関して述べた通り、従属節の分類を意味や機能の違いを基準に行う場合、(10a)の下線部は、(3)や(9b)の意味を持つとは解釈できないことから、運用節やその一種である無助詞時間節ではないと分析される<sup>5</sup>。しかし、そのように分析する場合、(10a)と(10b)の意味的個別性は十分に考慮されているものの、(10a)と(10b)の形式的共通性はそれほど十分に考慮されていないという問題点があると考えられる。

- (10) a. 運転しているあいだの映像は、全て記録されています。  
 b. 運転しているあいだ、映像は全て記録されています。(いずれも作例)

---

<sup>4</sup> 日本語記述文法研究会(2008:74)は、(10a)のような表現の機能を「時間や段階を表す相対的な名詞を、それが指示する時点を決める基準を表す節が修飾する」と記述している。

<sup>5</sup> 実際に、日本語記述文法研究会(2008)による記述でも、(10a)のような構文は第3章で「名詞修飾節」(本章で言えば図1および(2b)の連体節に相当)として、(10b)のような構文は第5章で「時間節」として、それぞれ別立てで扱われている。

また、(10a) と (10b) の下線部の関係について、2つは別々の構文ではありながらも、(11) のように「連続的」(前田 2009 : 17) であると説明する研究もある。しかし、(11) の説明を行う場合、今度は、なぜ「運転しているあいだ」は一方では (10a) のように特定の時点を指示する機能を果たし、他方では (10b) のように時間状況設定の意味を表せるのかという問い合わせに説明を与える必要が生じる。この問い合わせは、2つ目の問題点として次の段落で述べ直す。

- (11) a. (10a) の下線部のような表現は、(10b) の下線部のように、「主節の事態の時間を表す従属節を形成することもできる」。(日本語記述文法研究会 2008 : 74)
- b. 「形式名詞を修飾する補足節は、副詞節（例えば時間関係を表す節など） [...] として機能するものもある」(前田 2009 : 16–17)

2つ目の問題点は、(11) に関して言及したように、無助詞時間節が主節を副詞的に修飾できる理由が説明できない点である。4.2.1 節などすでに見たように、例えば、(12) の「佐藤さんが来たとき」は、主節事態「会場の片付けは終わっていた」の時間状況を設定していくと解釈できることを根拠に、無助詞時間節であると分析されるのであった。

- (12) 佐藤さんが来たとき、会場の片付けは終わっていた。(作例)

しかし、そのように分析する場合、「佐藤さんが来たとき」が「会場の片付けは終わっていた」を副詞的に修飾できる理由に説明が与えられていないだけでなく、(3) の規定によつて複文の分析を進めようとする際には、その問い合わせが不必要になっているとも思われる。なぜなら、(3) を基準に従属節の分析を行う場合、分析対象となる従属節が主節に対して運用修飾の意味を表していると解釈できるかどうか、そして、その運用修飾の意味が「時間」に関するものか、それとも「様態」に関するものかといった点が重要なのであって、その運用修飾の意味がどのような理由で可能になっているかは、それ程重要な問題にはならないからである。言い換えれば、(3) の規定の下では、無助詞時間節が主節を副詞的に修飾できることは、定義上、所与のものとされ、その理由は不問に付されているということである。

以上2つの問題点を解決するためには、無助詞時間節が副詞的修飾の意味、特に、時間状況設定の意味を表す理論的動機付けが説明可能な形で、かつ、(10) に見られるような意味

的個別性と形式的共通性の双方を記述できる形で分析を行う必要があると言える。次節では、そのような分析のために必要な、構文における形式と意味の関係に関する考え方を理論的背景として述べる。

### 4.3 理論的背景

本節では、Shibatani (2019 など) における構文の捉え方を Croft (2001, 2020) の観点と関連させながら概観する。まず、4.3.1 節では Shibatani (2019) による関係節の構文的定義の議論を概観する。続いて、4.3.2 節では、構文における部分要素と構文全体との関係、および構文間の関係について、Croft の構文文法の主張を再確認する。

#### 4.3.1 Shibatani による関係節構文の分析

まずは、Shibatani (2017, 2018a, 2018b, 2019 など) による関係節 (relative clause) の議論<sup>6</sup>を見ていく。Shibatani によれば、伝統的な分析 (Comrie and Thompson 2007 や Dixon 2010 など) では、関係節と節の名詞化 (clausal nominalization) は、多くの言語において同一の形式で表される傾向があるにも関わらず、それぞれ独立した異なる構文であると分析してきた。例えば、ボリビア・ケチュア語の例 (13) では、括弧部分に共通の形式 [*Maria-q wayk'u-sqa-n*] が用いられているが、(13a) の括弧部分には、後続する名詞 *wallpa* (鶏肉) を修飾する機能があると解釈されるのに対して、(13b) の括弧部分には、そのような機能ではなく、むしろ「マリアが料理したもの」を指示する機能があると解釈される。そして、伝統的な分析では、この意味の違いを根拠に、(13a) の括弧部分は関係節という独立した 1 つのカテゴリであり、(13b) の括弧部分は節の名詞化という、関係節とは異なる別のカテゴリであると分析されるわけである。

---

<sup>6</sup> Shibatani の理論の理解に際しては、田村 (2021) も参考にした。

- (13) a. [[*Maria*-q      *wayk'u-sqa-n*]      *wallpa*]-ta      *mik'u-sayku*  
           Maria-GEN    cook-O.NMLZR-3SG    chicken-ACC    eat-PROG.1PL.EXCL  
           ‘We are eating the chicken that Maria cooked.’
- b. [*Maria*-q      *wayk'u-sqa-n*]-ta      *mik'u-sayku*  
           Maria-GEN    cook-O.NMLZR-3SG-ACC    eat-PROG.1PL.EXCL  
           ‘We are eating what Maria cooked.’ (Shibatani 2019: 56 グロス等は原文による)

しかし、Shibatani によれば、上記の分析では、(13a) と (13b) で同一の形式が用いられていることが無視されてしまうだけでなく、(13a) において括弧部分が名詞を修飾できる理由が与えられていないという問題が生じるとされる (Shibatani 2019: 81)。

Shibatani は、上記の問題は、ある構文<sup>7</sup>が具体的な用法 (use) の中で結果的に与えられる機能解釈を、その構文自体の意味と混同することで生じるものと述べる (Shibatani 2019: Ch.5)。それに代わって、Shibatani は、例えば (13a) と (13b) に見られる機能の差は、同一の構文が異なる用法で用いられたために生じる結果的な解釈の差にすぎないという分析を提案している。ここでいう同一の構文とは、Shibatani が提案する文法的体言化 (grammatical nominalization) というプロセスで派生される構文 (本章の以下では「文法的体言」と呼ぶ) である。文法的体言化とは、例えば動詞 *employ* や *cook* から名詞 *employment* や *cook* を作る語彙レベルでの名詞派生プロセス<sup>8</sup>と同様に、文法のレベルで名詞相当の単位 (すなわち、文法的体言) を派生するプロセス<sup>9</sup>であるとされる。

また、文法的体言の用法には、「修飾用法 (modification-use)」と「名詞句用法 (NP-use)」の2つがあるとされ、各用法に対応して、文法的体言は、それぞれ、名詞の修飾と対象物の指示という2つの機能を持つとされる。これは、例えば *cotton* のような語彙的な名詞が、一般に、(14a) のように他の名詞 (ここでは *shirt*) と並置されればその名詞を修飾 (modify) する機能があると解釈され、(14b) のように、名詞句の主要部として用いられれば対象物を指示 (refer) する機能があると解釈されるのと同様の機構とされる (Shibatani 2019: 54)。

<sup>7</sup> Shibatani (2019) では、「structure」という用語が用いられている。

<sup>8</sup> Shibatani (2019) では「lexical nominalization」(語彙的体言化)と呼ばれる。

<sup>9</sup> なお、Shibatani (2019) における体言化の本質は、「モノ的概念」を表す新たな単位を派生することにあると考えられる (cf. 田村 2021)。つまり、Shibatani の提案する体言化には、動詞から名詞を派生させるプロセスに限らず、例えば *New York* という名詞から *New Yorker* という新たな名詞を派生させるプロセスや、本章の本文にも挙げた *cook* (動詞) → *cook* (名詞) のような、形態的变化を伴わないプロセスも含まれる。

上記の提案を踏まえた上で (13a) に戻ると、(13a) の関係節 [Maria-q wayk'u-sqa-n] が名詞 *wallpa* を修飾できる理由は、[Maria-q wayk'u-sqa-n] の部分が *-sqa* という体言化辞 (nominalizer) によって派生された文法的体言であり、それが、(14a) の *cotton* と同様に、他の名詞と並置されて（すなわち、修飾用法で）用いられているからであると説明される。言い換えれば、Shibatani の分析では、関係節<sup>10</sup>から解釈できる修飾機能の本質を、名詞が本来的に持つ並置修飾という機能に由来すると考えるわけである。また、それと同時に、(13b) のような、同一の形式で異なる機能（ここでは対象物の指示）を表す構文との関係についても、文法的体言という同一の構文が (13a) では修飾用法で用いられることで名詞修飾の機能をもち、(13b) では名詞句用法で用いられることで対象物指示の機能を持つというように、用法とそれに対応する機能の違いとして、一貫した説明が可能になるのである。

- (13) a. [[*Maria-q wayk'u-sqa-n*]<sub>NMLZ</sub> [*wallpa*]<sub>N</sub>]<sub>NP</sub> 他の名詞との並置 — 名詞の修飾  
          b. [[*Maria-q wayk'u-sqa-n*]<sub>NMLZ</sub> ]<sub>NP</sub> 名詞句の主要部 — 対象物の指示

<sup>10</sup> ここまで議論からも予想されるように、Shibatani (2019) では、(13a)などの分析に際して、「関係節」という独立した文法カテゴリが不要になるだけでなく、そもそも(13a)の括弧部分は「節」ではない（文法的体言である）と分析されるため、「関係節」という名称は不適切であるとも述べられている (Shibatani 2019: 87–88)。本章では以下でもひとまず「関係節」の名称を用いる。

#### 4.3.2 構文間およびカテゴリ間のネットワーク

本節では、本稿第2章で説明した Croft の構文文法の主張のうち、(15) の2点を再度簡潔に説明する。

- (15) a. 特定の言語内においても、また、言語間においても、普遍的なカテゴリや構文は存在しない。全ての構文は言語に固有であり、全てのカテゴリは構文に固有である。

(Croft 2001: 1.5 節および 1.6.1 節)

- b. 構文はネットワークの一部として存在し、そのネットワークにおける構文間の関係は、スキーマと事例の関係に基づく。(Croft 2001: 1.3.3 節および 1.6.5 節)

まず、(15a)について説明する。Croft の構文文法では、「動詞」や「形容詞」などの基本的単位が構文を形成するというモデル（「積み木モデル」）を捨て、反対に、(16a) や (16b) の構文全体こそが言語の基本的単位であり、その中に生じる部分的要素（すなわち (16a-c) のそれぞれの Preposition）は、(16a) や (16b) の構文全体を基に、それぞれに固有のカテゴリとして派生するものと考える。本稿 2.3.1 節で述べたように、この考え方を採用することによって、表 1 のようにカテゴリごとに微妙に異なる特徴（ここでは語彙項目の生起可能性）を適切に記述できるようになるのであった。このとき、(16a-c) の Preposition は、異なる構文に生起している以上、同じ Preposition という名前であっても、異なるカテゴリとして捉えられていることに注意されたい。

- (16) a. [Preposition NP]

- b. [Preposition Clause]

- c. [Preposition  $\phi$ ]

	[Preposition NP]	[Preposition Clause]	[Preposition $\phi$ ]
<i>since/before</i>	可	可	可
<i>into</i>	可	不可	不可
<i>down</i>	可	不可	可
<i>while</i>	不可	可	不可
<i>back</i>	不可	不可	可

表 1：“Preposition” カテゴリにおける語の分布の多様性

続いて、(15b) と図 3 を基に、Croft の構文文法における構文間の関係について説明する。Croft の構文文法では、構文はスキーマと事例の関係に基づく階層的ネットワークを形成するとされる。例えば次頁の図 3 は、イディオム的な構文 Sbj *kick the bucket* (Sbj が死ぬ) を (15b) のネットワークの形で表示したものである。

本稿第 2 章の 2.4 節で述べたように、図 3 の表示を行う利点の 1 つは、Sbj *kick the bucket* 構文 (図 3 の <a>) の有する個別性だけでなく、他の構文との共通性も同時に記述できることにある。まず、Sbj *kick the bucket* 構文は、「死ぬ」という慣習化した意味を持つ点で、<b> の kick 構文や <c> の他動詞構文とは独立した個別性を持つと言える。したがって、図 3 では、<a> の構文は、<b> や <c> の構文とは独立したノードとして表示されている。しかし、それと同時に、Sbj *kick the bucket* 構文は、<b> の kick 構文や <c> の他動詞構文と共に項構造 (<a> で言えば、主語 Sbj と目的語 the bucket) を持つ。したがって、図 3 では、<a> <b> <c> 間の実線によって、このようなスキーマと事例の関係を表している。

また、スキーマと事例の関係は、構文の一部を成す部分的要素の間にも成り立つとされる。例えば、<a> の構文の目的語 the bucket は、<b> の構文の目的語 Kick2 (すなわち、動詞 kick がとる目的語) や、<c> の構文の目的語 TrObj (すなわち、他動詞がとる目的語) がより具体化した事例であると言える。図 3 の点線は、そのような、構文の部分要素の間で結ばれるスキーマと事例の関係を表すものである。ただし、2.4 節でも述べたが、図 3 において点線で示される関係と、実線で示される関係は、どちらもスキーマと事例の関係であり、同一のものである点に注意されたい。

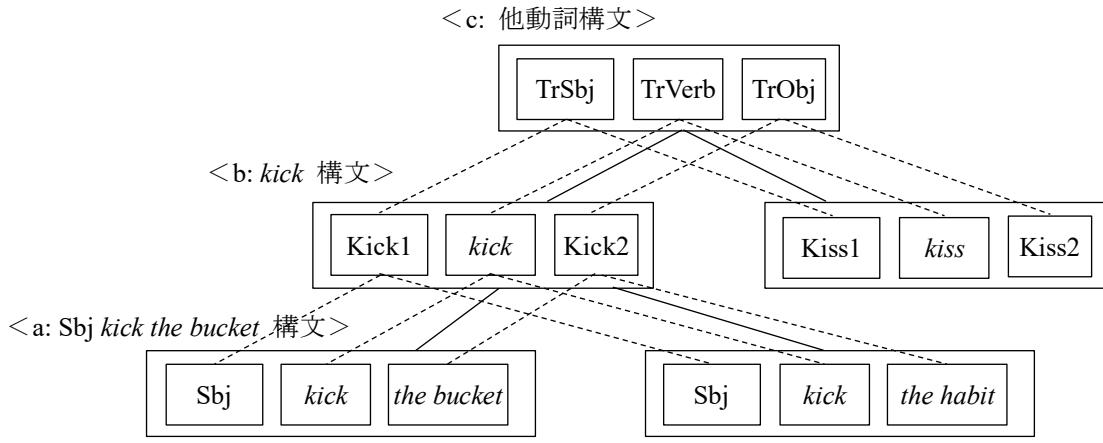


図3：*kick the bucket* を含む構文のネットワーク (Croft 2001: 56 を修正)

最後に、4.3節全体の内容を整理するために、(15)を用いて(13)の例を分析し、Shibatani (2019)とCroftの構文文法の共通点について簡単にまとめておく。Shibataniによる(13)の分析とCroftによる(15)の構文モデルを基に考えると、ボリビア・ケチュア語の例(13)は、図2のネットワークを成して存在していると考えられる。

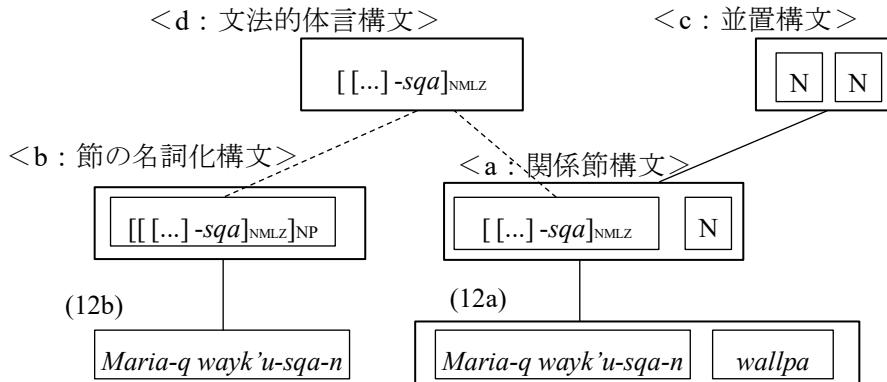


図4：ボリビア・ケチュア語における関係節構文の局所的なネットワーク  
(構文の部分要素間のスキーマ・事例の関係表示は、一部を除いて省略した)

まず、(15a)を基に考えると、<a>の関係節構文に生じる [...] -sqa] という部分要素の構文は、<a>の構文全体があつてはじめて、その機能（すなわち、名詞の修飾）が決定される。同様に、<b>の節の名詞化構文に生じる [...] -sqa] の機能（すなわち、対象物の指示）も、<b>の構文が持つ意味全体から派生する解釈である。これは、Shibatani (2019)で言えば、[Maria-q wayk'u-sqa-n] が<a>のように他の名詞と並置されて（すなわち、修飾用

法で)用いられれば修飾の機能を果たし、<b>のように名詞句の主要部として(すなわち、名詞句用法で)用いられれば対象物を指示する機能を果たすことに対応すると言える。そして、Shibatani (2019) では、<a>の関係節構文における修飾機能は、語彙的な名詞の並置と同様の機能であると分析していたが、これは、Croft の (15b) を基に考えると、<a>の関係節構文が<c>の並置構文の事例であるということになる。したがって、図4では、<a>と<c>は実線で結ばれている。さらに、<a>の構文と<b>の構文に共通する部分である[[...]-*sqa*]<sub>NMLZ</sub> の構文には、その上位に、具体的な機能(名詞の修飾や対象物の指示)が捨象された、<d>の抽象的な構文があると考えられる。もちろん、<d>の構文は、Shibatani (2019) における文法的体言<sup>11</sup>に相当する。

#### 4.4 提案と考察

本節では、前節で述べた理論的背景の下で、無助詞時間節構文の新たな分析を提案し、考察を行う。具体的には、まず4.4.1節で、無助詞時間節構文は無助詞主題構文の下位構文としてネットワークを成して存在するという仮説を提案し、本章による無助詞時間節構文の分析を示す。続く4.4.2節では、本章の分析によって先行研究の問題点が解決できることを示す。4.4.3節では、無助詞時間節構文が持つ時間状況という構文的意味には、無助詞主題構文の持つ「語用論的関連付け」という構文的意味が貢献していることを議論する。その上で、4.4.4節では、無助詞時間節構文と無助詞主題構文に見られる意味の違いを基に、これら2つの構文は互いに関連しながら独立したノードを形成していると述べる。

##### 4.4.1 提案

ここまで議論を踏まえ、本稿は、(17)の仮説を提案する。

- (17) 無助詞時間節構文は、無助詞主題構文の事例として、構文間のネットワークの中で存在している。

---

<sup>11</sup> この構文は、形式としては[[...]-*sqa*]<sub>NMLZ</sub>という形式から成り、意味としては、 [...]の動詞概念から連想されるモノ的概念を表す意味を持つ構文であると考えられる。なお、Shibatani (2019)によれば、より正確には、-*sqa*の意味は動詞概念のうち被動者(PATIENT)を表す体言を作り出すことであるとされる。

まずは、(17)の「無助詞主題構文」について、本稿第3章の3.2.1節でも述べたが、簡単に確認しておく。無助詞主題構文とは、(18)のような例に代表され、(19a)の形式と(19b)(19c)の意味を持つ構文である（長谷川 1993, 黒崎 2003, 丹羽 2006, 山泉 2013, Yamaizumi 2011, 2018, 松浦 2020など）。例えば(18a)は、(19a)のように、「私」という無助詞名詞句(NP)と、「知っています」という主節(CLAUSE)から成る形式を持ち、意味としては、(19bc)のように、「私」という主題を設定した上で、その主題について「知っています」という解説を語用論的に（この場合は「私」の状態として）関連付ける例である。

- (18) a. 私  $\phi$  知っています。 (丹羽 2014 : 602 「 $\phi$ 」は原文による)  
b. くつべら使う？ (山泉 2013 : 449)  
c. 昨日話してた旅行、花子は10月まで仕事で忙しいみたいだよ。 (松浦 2020 : 112)
- (19) a. [[X  $\phi$ ]NP<sub>i</sub> [...  $\phi$  ...]CLAUSE]  
b. 無助詞名詞句の指示対象と主節事態とは語用論的に関連付けられる。  
c. 無助詞名詞句の指示対象を主題として設定し、主節でそれについて解説を与える。

なお、(20)のように、助詞の無い名詞句が主題を表さないものは、助詞省略構文と呼ばれ、無助詞主題構文とは区別される（苅宿 2014など）。例えば(20)では、文全体が情報の焦点となっており、「犬」と「いる」の間に主題・解説の意味関係があるとは言えない。したがって、(20)は無助詞主題構文ではなく助詞省略構文であると分析される<sup>12</sup>。

- (20) 【授業中にふと外を見て、校庭に犬を見つけたときの発話】  
あ、犬  $\phi$  いる！ (作例)

以上の背景の下、(17)の仮説を基にすると、無助詞時間節構文のネットワークは図5のようになる。以下、図5を用いて、本稿による無助詞時間節構文の分析を示す。なお、図5では、スペースの都合上、無助詞時間節構文の例として、無助詞時間節の末尾に「とき」を用いる構文（図3の<a：無助詞とき節構文>）のみが表示されている<sup>13</sup>。

<sup>12</sup> 無助詞主題構文と助詞省略構文の形式的区別については、第5章で議論を行う。

<sup>13</sup> (15a)でも述べたように、本稿は、構文の部分要素は構文全体に固有であるという前提に立つ。したがって、<c>と<a>の「CLAUSE」のように、便宜上同名のラベルが与えられていても、厳密にはそれぞれ異なるカテゴリであると想定する。

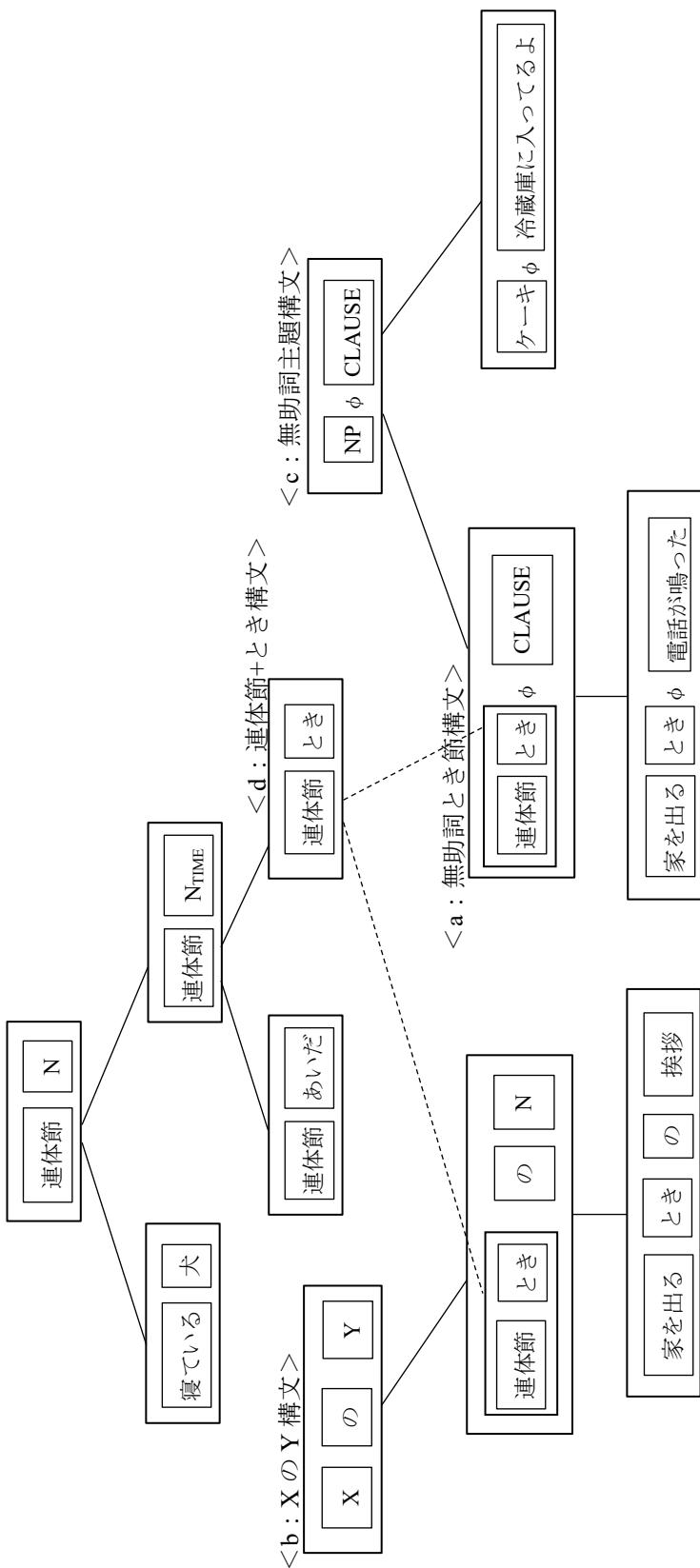


図 5：無助詞時間節構文の局所的ネットワーク  
(構文の部分要素間の関係表示は一部を除いて省略した)

まず、<a>の構文、例えば (21a)において、無助詞時間節「家を出るとき」が主節に対して時間状況を設定するという意味は、<a>の構文全体を基に派生する、<a>の構文に固有の意味であると考えられる。したがって、「家を出るとき」という同一の形式であっても、それが<a>以外の構文に生じている場合には、異なった意味を持つと予想される（第2章の2.3.1節で見た「前置詞」カテゴリの議論や、本章4.3.1節の(13)で見た [Maria-q wayk'u-sqa-n] の議論を想起されたい）。実際に、「家を出るとき」は、例えば (21b) のように、<b>の「XのY構文」のXに生じている際には、特定の時点（「家を出る時点」など）を指示するという異なる意味が表されている。

- (21) a. 家を出るとき、電話が鳴った。  
b. 家を出るときの挨拶（いずれも作例）

続いて、そもそも無助詞時間節が時間状況の設定という意味を表す理由について、(15b)を基に説明する。1つ前の段落で確認した通り、「家を出るとき」という表現は、<a>の構文の部分要素である場合、<a>の構文に固有の意味として、主節事態に対する時間状況の設定という意味を持つ。本章では、(17)の仮説で述べたように、<a>の無助詞時間節構文が持つこの構文的意味は、上位構文である<c>の無助詞主題構文から部分的に指定されたものと考える。言い換えれば、(22a)のような無助詞時間節構文における時間状況の設定という意味は、(22b)のような無助詞主題構文が持つ主題設定の意味（(19b)の意味）から拡張した意味であると分析するわけである。したがって、この部分的指定関係を表示するために、図5の右半分では、<c>の構文と<a>の構文とが、スキーマと事例の関係で結ばれている。この意味拡張については、4.4.3節で再度詳しく議論する。

- (22) a. 家を出るとき、電話が鳴った。（= (21a)）  
b. ケーキ、冷蔵庫に入ってるよ。（作例）

#### 4.4.2 問題点の解決

本節では、本稿による無助詞時間節構文の新たな分析によって、4.2.1節で見た先行研究の2つの問題点が解決できることを述べる。まず、先行研究に残されていた問題点の1つ目は、無助詞時間節構文と同一の形式を持つ他の構文との関係、すなわち、(10a)の下線部と

(10b) の下線部のようなペアが持つ形式的同一性と意味的個別性の関係が十分に説明されていなかつてはいた。

- (10) a. 運転しているあいだの映像は、全て記録されています。  
b. 運転しているあいだ、映像は全て記録されています。(以上再掲)  
c. 運転しているあいだ

本稿の分析では、(10a) と (10b) の個別性と共通性の双方が同時に成り立つことに対して、以下の理論的説明を与えることが可能になる。まず、それぞれの下線部が個別性を持つ理由、すなわち、(10a) の下線部は特定の時点を指示する意味を持つが、(10b) の下線部は主節事態の時間状況を設定する意味を持つ理由については、それぞれの例で「運転しているあいだ」が異なる構文全体に生起している以上、その生起環境である構文全体を基に、異なる意味が指定されているからであると説明できる。

しかし、それと同時に、(10a) と (10b) の部分要素「運転しているあいだ」の共通性に関して、本稿では、この 2 つの構文に共通するスキーマ的構文として、(10c) の上位構文を想定する(図 5 で言えば <d> に相当する)。この構文は、形式としては (10a) と (10b) の下線部と共通するが、意味としては「運転中の時間」のような概念を表すだけで、それを時点として指示したり、状況として設定したりする機能は指定されていない。繰り返しになるが、この抽象的な構文 (10c) に時点指示の意味解釈を指定するのは (10a) の X の Y 構文という構文全体であり、時間状況設定の意味解釈を指定するのは (10b) の無助詞主題構文という構文全体である。

続いて、先行研究に残されていた問題点の 2 つ目は、無助詞時間節が主節に時間状況を設定できる理由が説明できない点であった。これに対して、本稿では、(17) で述べたように、無助詞時間節構文は無助詞主題構文とスキーマ・事例の関係(図 5 で言えば、<a> と <c> の実線で結ばれる関係)を成して、ネットワークの一部として存在していると提案した。そして、(15b) で述べた通り、構文間のネットワークにおいては、スキーマ的な上位の構文が、その事例である下位の構文の特徴を部分的に指定すると考えられるのであった。したがって、例えば (23a) のような無助詞時間節構文が時間状況設定の意味を持つのは、その上位構文である (23b) のような無助詞主題構文が持つ主題設定の意味が部分的に指定されているからだと説明されることとなる。

- (23) a. お風呂に入っているとき、インターホンが鳴った。  
b. ゴミ、出しておきましたよ。 (いずれも作例)

#### 4.4.3 無助詞主題構文から無助詞時間節構文への意味拡張

本節では、無助詞主題構文から無助詞時間節構文への意味拡張を可能にする要因として、無助詞主題構文が持つ (19c) の意味、すなわち、無助詞主題名詞句と主節との語用論的関連付けという観点から議論を行う。

無助詞主題構文が持つ語用論的関連付けの意味特徴とは、無助詞主題名詞句の指示対象と主節事態の具体的な意味的関係は、文脈などの語用論的情報を基に解釈されるというものであった (第3章 3.5.1 節や本章 4.4.1 節を参照されたい)。例えば、(24) の無助詞主題構文は、「コアラ」に関して、「歩く (よ)」の動作主であるという意味的関係が解釈される。これは、コアラは歩行が可能な動物であるという知識が (少なくとも B の中には) あり、かつ、A の発話からも分かるように、ここではコアラの歩行可能性が文脈上の話題として共有されているからである。

(24) 【A と B は動物図鑑を見ている】

- A : コアラってさ、いつも木の上にいるけど、もしかして地上を歩けないのかな。  
B : コアラ、歩くよ？ 四足歩行してる映像見たことあるもの。 (作例)

さらに、(19c) の含意することは、同じ形式の無助詞主題構文であっても、文脈が変われば解釈される意味も変わり得るということである。例えば、(24) の例を異なる文脈において (24') では、「コアラ」と「歩く (よ)」との間の意味的関係は、「コアラを展示している場所へたどり着くためには、私たちはある程度長い距離を歩く必要がある (よ)」といった関係になっている。これは、(24') が、動物園の中で次に見に行く動物を決定するという文脈であり、また、そのような決定をする際には、見に行きたい動物の展示場所までの所要時間や移動距離などを勘案する必要があるという一般的な知識が A と B の間で共有されているためだと考えられる。なお、この時、文脈に適した (24') 全体の解釈を基に、「コアラ」や「歩く (よ)」などの部分的要素に解釈される意味も、それぞれ「コアラの展示場所」や「(私たちは) 歩く必要がある (よ)」のように、(24) での部分的意味から変化している点にも注意されたい。

(24') 【A と B は動物園の中を歩いている】

A：次はコアラを見に行こうよ！

B：コアラ、歩くよ？大丈夫？（作例）

以上の議論を踏まえた上で、(25) の例を見てみよう。本稿が(17) や図5によって提案する意味拡張の関係とは、(25) の表す「家を出るという時間状況において、二重の虹が見えるという事態が生じた」という意味の成立にも、無助詞主題構文の持つ語用論的関連付けが貢献しているというものである。つまり、(25) が時間状況とその際に生じた主節事態の意味として解釈されるのは、「虹が見えるという事態は普通、何らかの時間状況の中で生じる」といった我々の知識や、(25) が時間を対象物として扱うような話題<sup>14</sup>ではないといった文脈が、A と B の間で共有されているためということである。

(25) A：昨日、何か面白いことはあった？

B：あ、家を出るとき、二重の虹が見えたよ。（作例）

無助詞時間節構文の意味の実現に語用論的関連づけが関わっていると考える本稿の議論は、同じ形式であっても文脈によって無助詞時間節構文とも無助詞主題構文とも解釈できる例の存在を予想する。そのような例として、(26) と (26') のペアを見てみよう。まず、(26) の下線部は、通常、「何かに集中するという時間状況において、BGM はあった方がいい」という無助詞時間節構文の意味に解釈されよう。

(26) A：「川のせせらぎ」みたいな BGM ってたまに売ってるけど、あれってどういう人が買うんだろうね？日常生活の中で使い所がない気がするんだけど…。

B：いやいや、何かに集中するとき、あった方がいいよ！（作例）

しかし、(26) の下線部を異なる文脈に置いた (26') では、下線部の形式自体は同一であるにも関わらず、異なった解釈が選好される。(26') の下線部で意図されている意味は、「何

<sup>14</sup> そのような話題の例としては、例えば、「アラームを鳴らす時間を何時に設定するか」や「演奏会の開演時刻を何分ずらすか」といったものが考えられる。

かに集中する時間帯に関して言えば、(そのような時間帯は) あった方がいい」とでも言い換え可能なものである。そして、そのような意味全体の中で、(26')の「何かに集中するとき」が表す意味は、主節事態が生じる時間状況というよりも、むしろ、指示対象としての時間（帯）として解釈されているわけである。以上の議論からも、(26B) や (26'B) の下線部が図5の<a>の無助詞時間節構文として解釈されるか、<c>の無助詞主題構文として解釈されるかには、文全体が受ける語用論的な関連付けが大きく貢献していることが分かる<sup>15</sup>。

- (26') A : 結局さ、人間、常にリラックスしてた方がいいと思うんだ。何かに集中するなんて、疲れちゃうじゃん？  
B : ええっ、そうかな？何かに集中するとき、あった方がいいよ！ (作例)

#### 4.4.4 無助詞主題構文と無助詞時間節構文の意味的個別性

前節では、無助詞時間節構文の成立には、無助詞主題構文の持つ「語用論的関連付け」の意味が貢献していることを示した。しかし、すでに述べたように、無助詞時間節構文と無助詞主題構文は、ネットワーク内で異なるノードを成す独立した構文であることもまた事実である。本節では、両構文が持つ個別性の議論を補足するために、第3章でも扱った「発話行為的効果」が、無助詞主題構文には観察されるのに対して、無助詞時間節構文には観察されないことを議論する。

本稿3.5.2節で藤原（1992）や小屋（2007）や岡田（2015）の主張を紹介したように、無助詞主題構文は、(27a) や (28a) のような、単に事実を述べる場合に用いると不自然に響くのに対して、(27b) や (28b-d) のような、聞き手に対する何らかの働きかけがある意味を表す際には自然に響く。具体的には、(27b)(28c) で言えば「聞き手への問い合わせ」、(28c) で言えば「聞き手への教え」、(28d) で言えば「伝聞情報の聞き手への伝達」といった働きかけがあると考えられる。

---

<sup>15</sup> 誤解のないように述べておくと、ここでは、無助詞時間節構文を個別の構文として認める必要がないと主張しているわけではない。ここで議論は、無助詞時間節構文と無助詞主題構文がそれぞれ個別の構文としてネットワークの中に存在していることが前提となっている。この2つの構文に観察される具体的な違いについては次節で詳しく述べる。

- (27) a. \*車  $\phi$  急に止まった。  
       b. 車  $\phi$  急に止まった? (いずれも藤原 1992 : 141)
- (28) a. ?君佳  $\phi$ 、ピアニストです。  
       b. 君佳  $\phi$ 、ピアニストですよ。  
       c. 君佳  $\phi$ 、ピアニストよね?  
       d. 君佳  $\phi$ 、ピアニストなんだって。 (いずれも小屋 2007 : 10)

これに対して、無助詞時間節構文では、上記のような意味的特徴は観察されない。例えば、「渡猿橋のなかばにさしかかったとき  $\phi$ 」という無助詞の時間節を用いた (29a) は、小説の地の文<sup>16</sup>であることから考えても、聞き手（この場合は小説の読み手）に対して (27b) や (28bcd) のような強い働きかけがあるとは考え難い。また、(29b) のように、議事録など情報の記録自体を目的とした文章でも実例が観察される。

- (29) a. 渡猿橋のなかばにさしかかったとき、渓流の川下から青葉のにおいをふくんだ風  
       がふきあげてきた。 (『司馬遼太郎短篇全集』)  
       b. 会長及び副会長が決まるまでの間、小酒井部長に仮の会長をお願いする。(「第1回  
          朝霞市地域公共交通協議会会議録<sup>17</sup>」)

したがって、無助詞時間節構文を無助詞主題構文の下位構文として位置付ける (17) の提案の下でも、無助詞時間節構文が独立した構文として言語使用者の知識の中に存在すること自体は想定しておかねばならないのである。

#### 4.5 まとめ

以上、本章では、無助詞時間節構文の新たな分析を提案し、それによって、先行研究に残されていた2つの問題点が解決できることを示した。具体的には、無助詞時間節構文は無助詞主題構文の下位構文としてネットワークの中で存在すると捉えることで、形式的に共通する他の構文との関係が明らかになるとともに、無助詞時間節と主節との間の意味的関係が成り立つ理由に理論的説明を与えることも可能になった。

---

<sup>16</sup> (29) はいずれも『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』からの用例である。

<sup>17</sup> <https://www.city.asaka.lg.jp/uploaded/attachment/58188.pdf> (最終閲覧: 2021年12月19日)

本章が日本語研究に対して持つ理論的含意としては、形式と意味の組み合わせ、すなわち構文の観点から日本語の無助詞時間節を見ることで、これまでにはそれほど注目されてこなかった無助詞主題構文との関連に着目できた点が挙げられる。本章で示したような、複文における従属節と主節の意味的・機能的関係に着目しつつも、それと同時に、そのような意味や機能がどのような形式や構造によって表されるかを考察する複文研究は、益岡（2014）が「未だ未開拓」（益岡 2014 : 539）と述べるような、今後の発展が待たれる分野でもあると言えよう。

## 第5章

### 構文文法からみた時間節構文と裸名詞句構文

#### 5.1 はじめに

本章<sup>1</sup>では、日本語における2つの論点(i)と(ii)を例に、構文における形式と意味の記号的対応に関する議論を行う。

- (i) : 日本語の時間節構文における時間状況の焦点化について
- (ii) : 日本語の無助詞主題構文と助詞省略構文の形式的区別について

先行研究（益岡 1997, 加藤 2003 など）では、(i)と(ii)に関してそれぞれに分析や事実の指摘が行われているものの、それらには問題点も残されていると言える。本章の目的は、第2章で確認した Croft の主張のうち、特に「構文内の統語的要素と意味的要素の記号的関係は、必ずしも類像的には対応しない」ことを基にすれば、先行研究の抱える問題点を解決可能な、かつ、(i)と(ii)の論点を統一的に扱える分析が提案できると示すことがある。

本章の構成は以下の通りである。まず、5.2節で、論点(i)と(ii)に関する先行研究を示し、それぞれの分析に残されている問題点を指摘する。5.3節では、理論的背景として、郡（1992, 2020 など）によるアクセント弱化と情報構造の対応関係について概観した上で、Croft の構文文法の観点から、その理論的含意を述べる。5.4節では、(i)(ii)に対する本稿の提案、提案の妥当性検証、および提案に関連する現象の考察を各論点ごとに行う。5.5節はまとめである。

#### 5.2 先行研究とその再解釈

本節では、論点(i)と(ii)に関する先行研究の分析、その問題点、および先行研究間の共通点を説明する。まず、5.2.1節で、(i)の論点と(ii)の論点に関する先行研究の分析をそれぞれ整理する。続く5.2.2節では、各分析に残されている問題点をそれぞれ指摘する。最後に、5.2.3節では、両論点における先行研究には、統語的要素と意味的要素が類像的に対応すると分析している点で共通点があることを指摘する。

---

<sup>1</sup> 本章は、Matsuura (2021) で発表した内容を基に新たに執筆したものである。

### 5.2.1 先行研究

#### 5.2.1.1 時間節構文の情報構造に関する先行研究

まずは、論点 (i) について、すなわち、時間節構文が表す情報構造について、より具体的には、益岡（1997）が「従属節の焦点化」と呼ぶ現象の分析を整理する。益岡によれば、時間節構文の情報構造に関して、(1) の一般化が成り立つとされる。以下、(1) の一般化による分析を「格助詞モデル」と呼ぶこととする。なお、益岡による「従属節の焦点化<sup>2</sup>」の定義を (2) に示す。

- (1) 「格助詞を伴う時間節は焦点化が可能であり、伴わない時間節は不可能である」  
(益岡 1997 : 142)
- (2) 従属節の焦点化とは、「主節の事態が起こったことを前提として、その事態がいつ起こったのかを新情報として従属節の部分で表すこと」である。(益岡 1997 : 140)

格助詞モデルが主張することは、例えば以下の (3B) と (4B) から解釈される情報構造上の意味の違いに関するものである。まず、(3B) の発話では、「東京へ行ったときに」という、格助詞「に」を伴う時間節が用いられている。このような B の発話は、格助詞モデルに従えば、主節の表す事態「この時計を買った」を前提として提示し、その事態が生じる時間状況を新情報として提示する解釈が可能である。これに対して、(4B) では、「東京へ行ったとき ϕ」という無助詞の時間節が用いられている。このとき、格助詞モデルに従えば、時間節の表す時間状況は新情報になり得ず、時間状況焦点の解釈は不可能とされるわけである。

- (3) A : その時計、かっこいいですね。いつ買ったんですか?  
B : 東京へ行ったときに、この時計を買いました。 (作例)
- (4) A : 先週、東京に行ったそうですね。東京で何かしましたか?  
B : 東京へ行ったとき ϕ、この時計を買いました。 (作例)

---

<sup>2</sup> なお、本稿では、焦点や前提といった概念は意味的側面に関するものであることを踏まえ、引用を除いて「時間状況の焦点化」や「主節事態に焦点がある」といった言い方を用いる。これに対して、形式的側面を指す場合には、「時間節」や「主節」という用語を用いる。

つまり、格助詞モデルに従えば、(3A) のような、「いつ」を情報の焦点とする質問に対して、(4B) のような無助詞時間節を用いた文での返答は、不可能であると予想されることになる。そのような例を(5)に示す<sup>3</sup>。

- (5) A: その時計、かっこいいですね。いつ買ったんですか? (= (3A))  
B: 東京へ行ったとき、この時計を買いました。 (= (4B))

時間節構文の情報構造に関する研究は、管見の限り、益岡(1997)以降<sup>4</sup>はそれほど盛んには行われていないようであるが、時間節における格助詞の有無に言及する研究では、格助詞モデルと同趣旨であるように読める記述も見られる。例えば、日本語記述文法研究会(2008)は、「ときに」を用いた場合には「主節の事態の成立したときを強調する」という意味的特徴が観察されると記述している。また、Shirota(2010)では、益岡(1997)の記述を引用した上で、日本語では、文の構成要素が限定修飾の機能を持つか持たないかは「主として言語形式(助詞、動詞の活用形など)で区別される」ことが述べられている(Shirota 2010: 48 下線を付した)<sup>5</sup>。さらに、園部(2013)では、格助詞モデルにおける(1)の一般化を基に、「ときに」は情報構造面から見ると焦点化が可能な従属節であると言えるだろう。」と述べられている<sup>6</sup>(園部 2013: 97)。

### 5.2.1.2 無助詞構文と助詞省略構文の形式的区別に関する先行研究

続いて、(ii)の論点、すなわち、日本語の無助詞主題構文と助詞省略構文の意味的・形式的区別に関する先行研究を見ていく。第3章で確認したように、多くの先行研究(苅宿 2014,

<sup>3</sup> 論点を先取りするような書き方になるが、(5B)のような返答であっても実際には容認される場合がある。5.2.2.1節では、類例として(11)の実例を挙げる。なお、本稿が5.4.1節で提案する分析では、(5B)や(11)が場合によっては容認されることも問題なく説明できる。

<sup>4</sup> 益岡(1997)によれば、時間状況の焦点化に関する研究は、益岡(1997)以前には、寺村(1992)を除いてほとんどないとされる。寺村(1992)では、「とき」を用いた時間節構文に関して、「とき」は主節事態を「発見として述べる場合」にふさわしいのに対して、「ときに」は主節事態が「いつ起きたのかが問題になっている場合に典型的に使われる」と述べられている(寺村 1992: 153, 155)。格助詞モデルは、寺村によるこの記述を時間節構文(および、本稿では扱わないが、並列節など他の従属節)一般に拡張したものである(益岡 1997: 140)。

<sup>5</sup> ただし、Shirota(2010)では、複文の情報構造に関する言及はない。

<sup>6</sup> ただし、園部(2013)では、(1)の後半部分、すなわち、無助詞時間節に関する言及はない。

丹羽 2006 など) では、(6a) のような、本稿で無助詞主題構文と呼ぶ構文、すなわち、助詞を伴わない名詞句の指示対象(「この時計」)と主節事態(「アウトレットで買ったんですよ」)に主題・解説の意味関係があると解釈される構文と、(6b) や (6c) に示される助詞省略構文、すなわち、「車」と「買ったの」や「カレー」と「食べてるの」の間に主題・解説の意味関係がないと解釈されるものとは、異なる構文であるとされている。なお、以下では、丹羽 (2006) の用語を基に、(6a) のように、指示対象に関してどのような属性や状況が成り立つかという情報構造のことを「主節事態焦点」(縮めて「主節焦点」と呼び、(6b) のような「車を買ったこと」という事態全体に焦点がある情報構造のことを「全体焦点」、(6c) のような、「カレー」など事態の一部を成す指示対象に焦点がある情報構造は「名詞句の指示対象焦点」(縮めて「名詞句焦点」と呼ぶこととする<sup>7</sup>)。

- (6) a. 【「その時計って、どこで買ったの？」と聞かれたときの発話】(主節焦点)  
この時計 ϕ、アウトレットで買ったんですよ。
- b. 【「嬉しそうだね。何かあったの？」と聞かれた時の発話】(全体焦点)  
車 ϕ 買ったの。
- c. 【「何食べてるの？」と聞かれたときの発話】(名詞句焦点)  
カレー ϕ 食べてるの。

(いずれも作例)

例えば、(6a) では、「この時計」と「アウトレットで買ったんですよ」との間には、主題・解説の意味的関係があると解釈でき、情報の焦点は主節が表す「アウトレットで買った」にあると考えられる。そのため、(6a) は無助詞主題構文に分類される。これに対して、(6b) や (6c) は、主題・解説の意味的関係があるとは解釈されないため、助詞省略構文に分類される。より具体的に言えば、(6b) では「車を買った」という事態全体が焦点となっており、(6c) では名詞句「カレー」の指示対象が焦点となっている。したがって、苅宿 (2014) に倣い、無助詞主題構文と助詞省略構文をまとめて「裸名詞句構文<sup>8</sup>」と呼べば、裸名詞句構文の意味分類は、図 1 のように整理できる。

<sup>7</sup> 丹羽 (2006) の用語は、それぞれ「述語焦点」「全体焦点」「主語焦点」である(丹羽 2006:7)。

<sup>8</sup> 苅宿 (2014) ではカタカナの「ハダカ名詞」が用いられているが、本稿では漢字表記の「裸名詞(句構文)」を用いる。

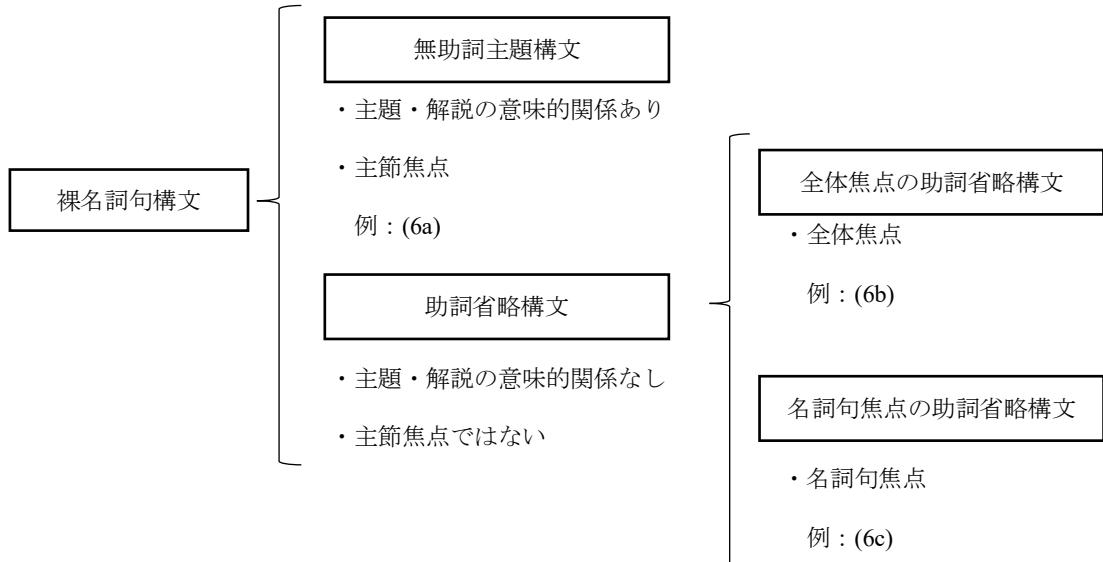


図 1 : 裸名詞句構文の意味的分類

次節以下 2 つの小節では、図 1 に示される無助詞主題構文と助詞省略構文の区別のうち、形式的区別に関する先行研究を整理する。そのような研究はそれほど多くないが、次節では、加藤（2003）と丹羽（2006）でそれぞれに指摘されている事実を確認する。

#### 5.2.1.2.1 加藤（2003）

まず、加藤（2003）による指摘を見る。加藤の議論全体は非常に網羅的で議論も多岐にわたる<sup>9</sup>が、本章の議論に直接関わる部分のみに関して言えば、(7) のようにまとめられる。

- (7) 「焦点を当てるには、当該部分を強く発音することで音声的にもある程度実現可能である。[(8) の「テレビ」のように、格助詞を伴わない名詞句でも、] 強く発音すればそれほど不自然ではなくなる。」（加藤 2003 : 375）<sup>10</sup>

<sup>9</sup> 本稿と異なり、そもそも加藤は無助詞主題構文と助詞省略構文を区別していない（加藤 2003 : 333–335）。しかし、無助詞主題構文と助詞省略構文に相当する意味の違いが存在すること自体は指摘されている（p. 348）ため、ここでの議論において大きな影響はないものと思われる。

<sup>10</sup> (7) において「音声的に」と述べられているのは、そもそも加藤（2003）の前提として、格助詞を伴う名詞句は焦点として解釈され、格助詞を伴わない名詞句は非焦点の解釈を受ける（加藤 2003 の用語では、「脱焦点化」）とされているからである。

(7) で述べられていることを、(8) の例を用いて説明しよう。(8) では、文脈上、姉が言うべき発話は、「テレビ」に焦点を当てた発話であると考えられる。(7) の意図は、その場合における自然な「テレビ ϕ 消してよ」の発話は、焦点を表す「テレビ」の部分を強く発音することである程度実現できるというものである。

- (8) 【弟がテレビをつけっぱなしにして、ステレオを聴いているので、姉がやって来て「テレビ 消してよ」と言う。ところが、弟はステレオの方を消してしまう。そこで、姉が言う。】  
テレビ ϕ 消してよ (加藤 2003 : 375 表記等を修正した)

#### 5.2.1.2.2 丹羽 (2006)

続いて、丹羽 (2006) による指摘である。丹羽は、無助詞主題構文と助詞省略構文の区別は連続的であるとしつつも、例えば (9) に関して、助詞のない名詞句の後で「ポーズを置いて発話すれば題目として理解しやすく、ポーズを置かなければ一体的に把握しやすい」と述べている<sup>11</sup> (丹羽 2006 : 290)。つまり、(9) で言えば、「お茶」を発話したあとにポーズを置いてから主節「入ってますよ」を発話すれば、(9) は無助詞主題構文として (すなわち、主題・解説の意味的関係があるものとして) 理解されやすく、反対に、「お茶」を発話したすぐ後に、ポーズを置くことなく「入ってますよ」と発話すれば、(9) は助詞省略構文として (すなわち、全体焦点として) 解釈されやすくなるということである。

- (9) あの、お茶 ϕ 入ってますよ。 (丹羽 2006 : 290)

#### 5.2.2 先行研究の問題点

本節では、先行研究に残された問題点を述べる。まず、5.2.2.1 節では、論点 (i) の格助詞モデルが抱える問題点として、益岡 (1997) 自身が述べている通り、格助詞の有無と時間節の焦点化の可否は必ずしも一致しないという問題点を指摘する。次に、5.2.2.2 節では、論点 (ii) の分析に関して、各先行研究が指摘する事実がやや散発的である点を指摘する。

---

<sup>11</sup> ただし、このような区別も「相対的な問題である」とされる (丹羽 2006 : 290)。

### 5.2.2.1 論点 (i) に関する先行研究の問題点

まずは、論点 (i) に関して、格助詞モデルに残されている問題点を述べる。その問題点とは、益岡自身が「格助詞の有無が常に意味の違いをもたらすとは限らない」(益岡 1997: 147) と述べるものである。これは、一つには、益岡が (10) を挙げて述べるように、格助詞を伴う時間節であるのにその時間状況が焦点として解釈されない点に観察される。(10) では、格助詞「に」を伴う「あいだに」が用いられているが、(10) で意図される解釈は、時間状況を焦点化した「仕事を一つ片付けたのは、友達を待っている間だった」というものではない。(10) で意図されているのは、むしろ、主節事態に焦点をおいた「友達を待っているあいだに何をしていたか」と言うと、仕事を一つ片付けたのだ」といった解釈である<sup>12</sup>。

(10) 友達を待っているあいだに、仕事を一つ片付けた。(益岡 1997 : 146)

反対に、益岡 (1997) では挙げられていないものの、格助詞を伴わない無助詞の時間節において時間状況が焦点と解釈され得る例も観察される。例えば、(11) は、投稿された質問に対して、インターネット上の誰かが回答を投稿する仕組みの Web サイト(「Yahoo!知恵袋」)からの例である。(11) において、質問者は、お米券が使用可能な場所や場合を尋ねており、「いつ」という表現こそ使われていないものの、この質問に対する回答は、「お米券が使える場所・場合」や「お米券が使えるタイミング」といった内容に焦点があるはずである。しかし、(11) の回答では、「お米を買うときゅ使えばいい」のように、無助詞の時間節が使用されている。つまり、格助詞モデルに反して、無助詞の時間節であるにも関わらず、時間状況が焦点化されているのである。

(11) 質問者：おこめ券ってどこでつかえますか？ [以下略]

回答者：お米券ですから、お米を買うとき使えばいいです。

(「Yahoo!知恵袋」上でのやり取り<sup>13</sup>。漢字の表記は原文ママ)

<sup>12</sup> 厳密に言えば、(10) の例は格助詞モデルに対する例外ではない。なぜなら、(1) の前半では、格助詞を伴う従属節は焦点化が可能であることが述べられているだけであって、格助詞を伴っていれば必ず焦点化されることまでは述べられていないからである。(1) に対する直接的な例外としては、むしろ、本稿が次の段落で挙げる (11) のように、無助詞時間節の例であるのに焦点化解釈が可能な例の方が適切であると考えられる。

<sup>13</sup> [https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q1387210293?\\_ysp=44GK44GT44KB5Yi4](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1387210293?_ysp=44GK44GT44KB5Yi4)  
(最終閲覧：2021 年 12 月 19 日)

以上で挙げた (3B)、(4B)、(10)、(11) の例について、格助詞の有無と時間状況の焦点化の可否を整理すると、表 1 の対応を示すことが分かる。表 1 では、格助詞の有無に関わらず時間状況は焦点にも非焦点にもなり得ること、つまり、時間節における格助詞の有無と時間状況の焦点化の可否とは、独立した要因である可能性が高いことが読み取れる。

	格助詞あり	格助詞なし
時間状況焦点	(3B)	(11)
時間状況非焦点 (主節事態焦点)	(10)	(4B)

表 1 : 格助詞の有無と時間状況の焦点化との対応関係

加えて、格助詞モデルが抱える上記の問題点は、以下の問題にも関連する。日本語記述文法研究会 (2008) などで指摘されているように、日本語の時間節構文には、格助詞の有無によって、表す時間的意味が大きく異なるものが存在する。例えば、(12a) と (12b) の対比に見られるように、無助詞の「あいだφ」を用いた場合では、「チケットに並んでいる時間帯」のような幅を持った時間における事態（考え続けること）が主節で表される傾向にあるのに対して、(12b) のように「あいだに」を用いた場合では、「チケットに並んでいる時間帯の中の 1 点」において生じる事態（映画の開始）が主節で表される傾向にある。(13a) と (13b) の対比においても同様に、「までφ」を用いた場合では、話し手（「私」）が部屋に戻ってくる時点を終点とした、幅を持った時間帯を通して待機することをお願いしているのに対して、(13b) では、話し手が部屋に戻ってくる前のどこか一点においてコピーを終わらせておくことがお願いされているわけである。

- (12) a. チケットに並んでいるあいだφ、帰りの電車のことを考えていた。  
b. チケットに並んでいるあいだに、映画が始まってしまった。（いずれも作例）
- (13) a. 私が部屋に戻ってくるまでφ、待機していてください。  
b. 私が部屋に戻ってくるまでに、コピーを終わらせておいてください。  
(いずれも作例)

このような意味の違いを踏まえると、(1) の一般化は、(12a) や (13a) のような、幅のある時間状況を表す場合では、時間状況の焦点化が常に不可能であることを予測してしまう。しかし、例えば「までゅ」「あいだゅ」を用いた (14) や (15) の応答が自然であることからも分かるように、そのような予測は正しくないと言える。

(14) Q いつまで CPR (心肺蘇生) はつづけるのですか?

A 救急隊が到着し、引継げるまで CPR を継続してください。

(広島県医師会 救急小冊子<sup>14)</sup>

(15) 【五本指靴下を普通の靴下に重ねて履く健康法について】

最初は靴がきつくて歩きにくかったりしますが、慣れると履いていないと逆に違和感が!! 日中履けない人は、夜寝ているあいだ履いても効果があるそう。

(市川建設株式会社 不動産部 ニュース&トピックス一覧<sup>15</sup> 改行を削除した)

### 5.2.2.2 論点 (ii) に関する先行研究の問題点

(ii) の論点、すなわち、裸名詞句構文の形式的区別に関する先行研究に関しては、各先行研究による指摘がやや散発的であるという問題点が挙げられる。つまり、無助詞主題構文と助詞省略構文の形式的区別に関して、最も本質的な要因が何であるかがあまり明確ではないということである。すでに見たように、加藤 (2003) では名詞句の発音の強さが指摘され、丹羽 (2006) では名詞句と主節の間のポーズの有無が指摘されている。それぞれの指摘は確かに事実であると言えるものの、これらの指摘をまとめ上げる、より包括的な分析が求められると言えよう。

### 5.2.3 先行研究における（暗黙裡の）共通点

ここで、のちの議論のために、論点 (i) と論点 (ii) に関する先行研究で（意図的でないにせよ）共通している点について、本稿の解釈を述べておく。結論だけを先に述べるならば、先行研究の分析では、(i) (ii) いずれの論点においても、構文における統語的要素と意味的要素が類像的 (iconic) に対応するモデルが示されているとまとめられる。なお、そのような先行研究に指摘できる共通点に対して、本章 5.4 節では、論点 (i) についても (ii) について

<sup>14</sup> <http://www.hiroshima.med.or.jp/pamphlet/184/post-79.html> (最終閲覧: 2021 年 12 月 19 日)

<sup>15</sup> [http://www.ichikk.co.jp/news\\_ichikk\\_1\\_pg\\_62.html](http://www.ichikk.co.jp/news_ichikk_1_pg_62.html) (最終閲覧: 2021 年 12 月 19 日)

ても、統語的要素と意味的要素は一対一に、すなわち類像的には対応しないことを前提としたモデルを提案する。

さて、まずは、論点 (i) について、格助詞モデルの分析は、「時間状況の情報構造は、時間節の統語的特徴（すなわち、格助詞の有無）として現れる」とまとめられよう。(1) で述べられていたように、格助詞モデルでは、時間状況の情報構造的意味は、時間節が格助詞を伴うかどうかに対応すると主張されている。このとき、図2のような形式と意味の対応が想定されていると言えよう<sup>16</sup>。図2では、時間状況 (TIME) に関わる意味は、焦点 (FOCUS) も含め時間節に関する形式が表し、主節事態 (EVENT) に関わる意味は主節に関する形式が表すという対応になっていることが分かる。なお、以下では、形式と意味の間の記号的関係を両矢印 ( $\leftrightarrow$ ) で表し、意味要素同士の意味的関係は点線で表す。

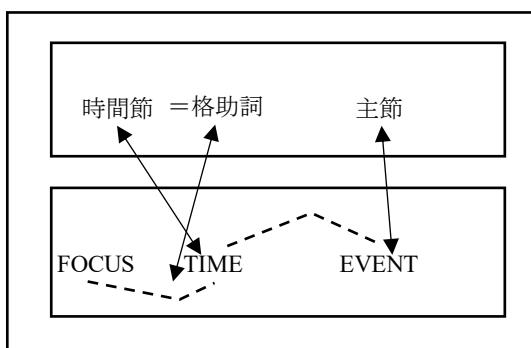


図2：格助詞モデルから想定される統語的要素と意味的要素の対応

論点 (ii) に関する先行研究の分析にも、同様の対応が（暗黙のうちに）想定されていると言える。まず、加藤による(7)は、裸名詞句の指示対象が焦点であることを「当該部分を強く発音することで」実現可能であるという分析であった。そのような形式と意味の関係は図3のように表せる。このとき、図2と同様、名詞句の指示対象 (THING) に関わる意味は（焦点も含めて）名詞句の形式的特徴（すなわち、強調された発音）が表し、主節事態に関わる意味は主節が表すという対応関係になっていると言える。なお、図2におけるゴシックは強調された発音を表す。

<sup>16</sup> あるいは、本稿第2章2.4節や本章5.3.2節での議論により引き付けて言えば、時間状況-焦点の意味的関係と、時間節-格助詞の統語的関係との図式的類像性を基にした分析であるとも言える。

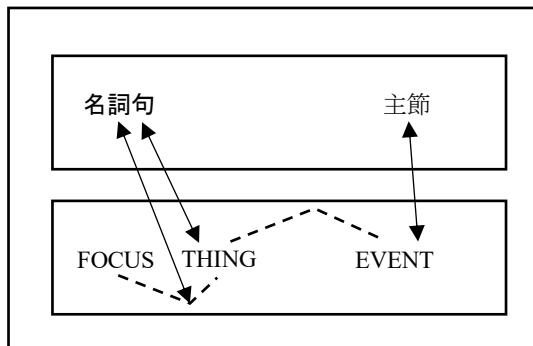


図3：(7) から想定される統語的要素と意味的要素の対応

また、丹羽（2006）における「ポーズ」の有無に関する指摘についても、同様の解釈ができる。つまり、名詞句と主節という形式的要素を一体的に（ポーズを置かずに）発音することで、名詞句の指示対象と主節事態とが意味的にも一体的である（全体焦点である）ことを意味するといった対応関係が想定されていると言えよう。

### 5.3 理論的背景

本節では、まず、郡（1992など）による文内イントネーションと情報構造の対応関係に関する主張を説明したのち（5.3.1節）、第2章でも確認した Croft の構文文法の主張を簡単に振り返る（5.3.2節）。その後、郡の主張を Croft の構文文法から捉えた場合の理論的含意について述べる（5.3.3節）。

#### 5.3.1 文内イントネーションと情報構造の対応関係

まずは、郡による研究（郡1992, 2020など）を概観する。郡によれば、日本語のイントネーションは、文が表す意味との間に対応関係があるとされる。そのような対応のひとつとして、文の焦点<sup>17</sup>と文内イントネーションとの対応が挙げられており、郡の主張は（16）の2点にまとめることができる。なお、文内イントネーション<sup>18</sup>の定義を（17）に、アクセント弱化の定義を（18）に示す。

<sup>17</sup> 郡の用語では「フォーカス」である。郡によれば、フォーカスには Gundel (1999) による「意味論的フォーカス／情報のフォーカス」と「対比のフォーカス」の2種類が含まれるとされる（郡2017: 23）。ここまで議論からも分かるように、本章の議論は前者の「意味論的フォーカス／情報のフォーカス」、すなわち、疑問詞疑問の答えに相当する焦点を扱うものである。

<sup>18</sup> 「疑問」などを表す文末の上昇・下降は「文末イントネーション」とよばれ、文内イントネーションとは区別される（郡2020など）。本稿の以下でも「イントネーション」は文内イントネーションのことを指す。

- (16) a. 焦点を表す部分の直後の部分はアクセントが弱化する。  
b. 文の末尾の部分が焦点を表す場合、その部分のアクセントは弱化しない。
- (いずれも郡 2020 : 51 を整理した)
- (17) 文内のイントネーションとは、「文節のそれぞれに対して、そのアクセントを弱めて発音するか、弱めないで発音するか、あるいは強めるか」ということである。特に、弱めるか弱めないかの違いが重要になる。」(郡 2020 : 20 太字は原文による)
- (18) アクセントの弱化とは、「アクセント型を保ちながらも、自らの主体性がはっきり感じられるほどの高さの動きがなく、先行文節と一体化してそれとともにひとつ音調句を作るような発音」である。(郡 2008 : 35)

まずは、(16a)について、(19)の例を用いて説明する。(19A)の質問は、「遊び相手は誰であるか」を問うものであるため、これに対するBの返答は、「花子と」に焦点が当たっているはずである。このとき、(19)の文内イントネーションは、図4<sup>19</sup>で示されているように、焦点を表す「花子と」の直後にある「遊ぶの」のアクセントが低く抑制されていることが分かる(下で示す図5と比較されたい)。なお、このとき、焦点を表す「花子と」自体の発音に関しては、焦点を表していることを分かりやすくするために取り立てて強く発音することも可能ではあるが、そのような強調は義務的ではなく、あくまでその直後の「遊ぶの」のアクセントの弱化が義務的な条件であるとされる(郡 2020, 泉谷 2008)。なお、本稿においては、以下、アクセントの弱化している部分を波線で表すこととする。

<sup>19</sup> 音声分析ソフトウェアの Praat (<https://www.fon.hum.uva.nl/praat/>) を用いて分析し、グラフを描画した。以下、数値やグラフは、引用を除いて全て Praat を用いたものである。

- (19) A : 今日は誰と遊ぶの？  
 B : 今日は花子と遊ぶの。 (作例)

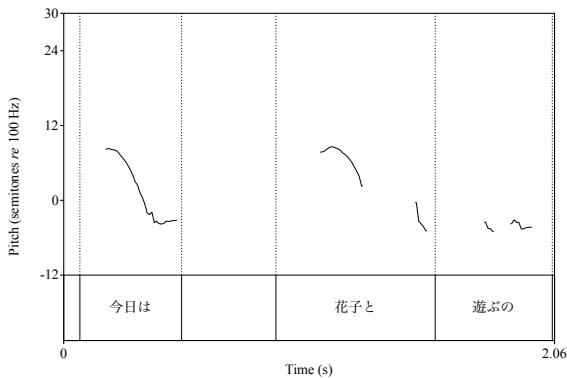


図4 :(19B) の文内イントネーション (本稿筆者による読み上げ)

続いて、(16b)について、(20)を用いて説明する。(20A)は「花子とすることは何か」を問うものであるため、(20B)の返答は、「遊ぶ（こと）」に焦点が置かれているはずである。このとき、図5で示されているように、焦点を表す「遊ぶの」のアクセントは弱化していないことが分かる。

- (20) A : 今日は花子と何をするの？  
 B : 今日は花子と遊ぶの。 (作例)

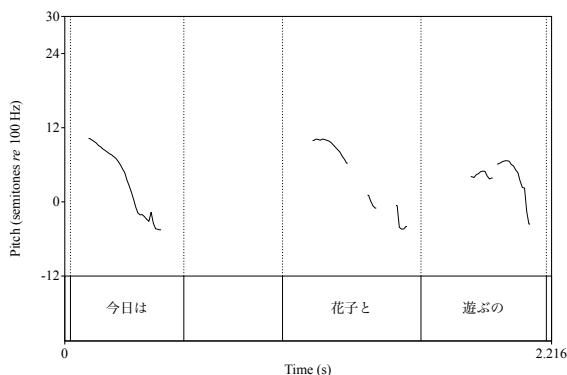


図5 :(20B) の文内イントネーション (本稿筆者による読み上げ)

なお、郡は、(20B) のパターンに関して、「今日は」など文頭の要素のアクセントは基本的に弱化しないとしながらも、限られた場合には、文頭の要素であってもアクセントを弱化させて発音されることもあると述べる。例としては、図6の文内イントネーションで発話される場合の(21)のように、「その文以前の文脈にすでに登場している場合<sup>20</sup>」(郡2020:85–86)の例が挙げられている。図6では、指示マークの部分のアクセントが文頭で弱化していることが分かる。ただし、(21)であっても、「ごんは」のアクセント弱化は義務的ではなく、あくまで「文の最初の文節のアクセントは弱めない」ことが原則であるとされている(郡2020:85–86, 91–92)。

- (21) ごんは、一人ぼっちの小狐で…。(郡2020:85)

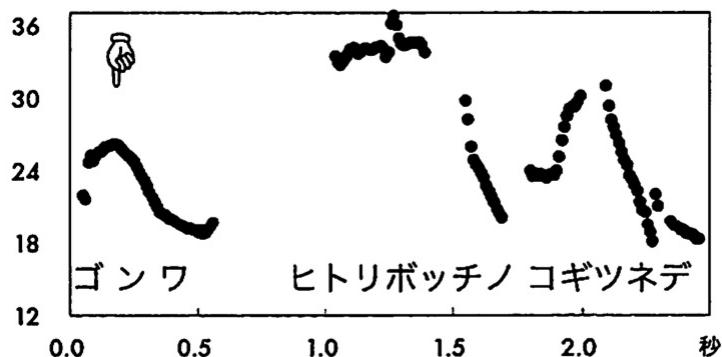


図6:(21)の文内イントネーション(郡2020:86 図3–15を転載)

### 5.3.2 構文における意味と形式の記号的対応

続いて、第2章で説明した Croft (2001, 2020など) の主張のうち、(22)とそれに基づく図7の表示について簡単に振り返る。

- (22) 構文における統語的要素と意味的要素は、必ずしも類像的には対応しない。構文内の要素間の記号的対応は、構文全体における記号的対応を基に派生する。

(Croft 2001: 1.3.2 節および第6章)

<sup>20</sup> Nakagawa (2020) では、同様の現象として、「それ」などの代名詞的要素など、談話の中で「強く喚起されている (“strongly evoked” 訳は本稿筆者による)」ものは発話の先頭であってもアクセントを持たずに発音される場合があると述べられている (Nakagawa 2020: 219)。ただし、Nakagawa (2020)においても、このような現象は数も少なく、例外的であるとされている。

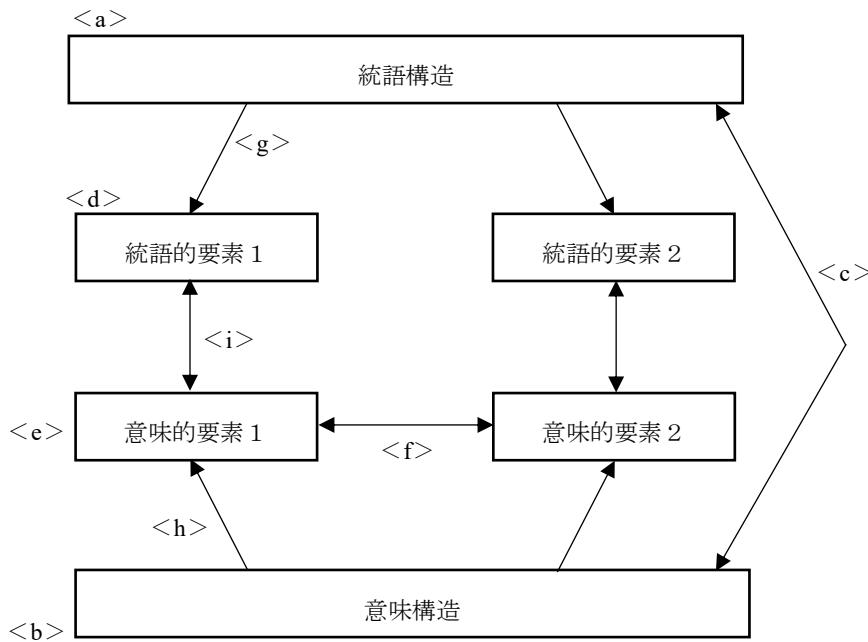


図 7 : Croft (2001) における構文の内部構造

Croft の構文文法では、(22) で述べられているように、統語的要素と意味的要素は必ずしも類像的に対応しないことが前提とされている。これは、第 2 章で述べたように、世界の言語には、形式と意味の対応関係に関して多様性 (diversity) が観察されるためである。そのような前提を体現するものとして、Croft の構文文法では、図 7 のように、統語的関係は設定されず、かつ、要素間の記号的関係 (図 7 の <i>) は、統語構造全体と意味構造全体の記号的関係 (図 7 の <c>) があつてはじめて可能なものであるとされている。

ここでは、2.2.3 節で挙げたツォツィル語の所有者上昇 (23) の分析に関する問題を例に、形式と意味の非類像的対応を確認する。(23) では、*najan* (ひっくり返す) とゼロの標識 (三人称単数絶対格を表し、ここでは「スープ」に対応) との間に一致という統語的関係が存在し、それが「ひっくり返す」 - 「スープ」の間の意味的関係と対応するという分析は不可能だとされる。なぜなら、(23)において、「スープ」は、文脈上、「ひっくり返す(*najan*)」という行為に対してどのような意味的関係も持たないからである。したがって、(23)において、統語的要素であるゼロ形態素と動詞 *najan* との間に統語的関係を想定し、それが意味的関係と図式的類似性を示すと考えた場合、意味的要素である「スープ」と「ひっくり返す」の間に、ありもしない意味的関係 (例えば「ひっくり返すことによってスープがこぼれるなど、何らかの影響を受ける」) を想定せざるを得なくなってしまうのである。

(23) ツォツィル語における所有者上昇

*ta-*    *j-*            *najan*            *-be*            *-φ*            *s-*            *p 'in*    *-al*  
IMPF-    1SG.ERG-    turn.face.down    -IO.APPL    3SG.ABS    3SG.POSS-    pot    -POSS

‘I’ll turn its [the soup’s] pot face down.’ [i.e. the pot that the soup was cooked in]

私はそれの [スープの] 深鍋をひっくり返すつもりだ [すなわち、スープが料理されていた深鍋]

(Croft 2001: 209 を修正 訳はクロフト 2018 による)

これに代わって、 Croft は、 (23) を図 8 のように分析する。すなわち、 (23) における各統語的要素と各意味的要素の間の記号的関係（図 8 における直線の点線）は、 (23) の構文全体が持つ統語構造と意味構造（図 8 における上下の四角形）の記号的対応を基に派生すると捉えるのである。換言すれば、 “Erg-najan-be-Abs Poss-Noun” という形式全体に対して、「誰かが何かをひっくり返し、ひっくり返される対象は他の物との間に所有関係を持っている」といった意味が組み合わされており、各要素の記号的対応は、そのような全体同士の記号的対応を基にして派生的に決まるとして捉えられるわけである。

このような理論的前提を持つことによって、 Croft の構文文法では、どのような統語的要素がどのような意味的要素に対応していても、また、 (23) のように、統語的要素と意味的要素の関係が一对一でなくとも、すなわち、非類像的 (non-iconic) なものであっても、問題なく分析が行える。

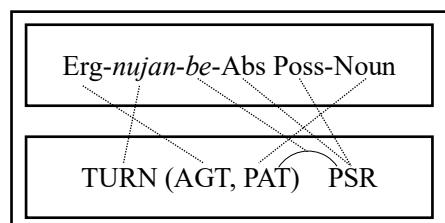


図 8 : (23) の構文文法的分析 (Croft 2001: 212)

### 5.3.3 日本語における情報構造と文内イントネーションの記号的対応

本節では、5.3.1 節で示したアクセント弱化に関する主張が持つ理論的含意を、5.3.2 節で示した Croft の構文文法の観点から述べる。郡の主張の要点を (24) に、例を (25) と (26) にそれぞれ再掲する。

(24) a. 焦点を表す部分の直後の部分はアクセントが弱化する。

b. 文の末尾の部分が焦点を表す場合、その部分のアクセントは弱化しない。

(= (16) )

(25) A : 今日は誰と遊ぶの？

B : 今日は花子と遊ぶの。 (= (19) )

(26) A : 今日は花子と何をするの？

B : 今日は花子と遊ぶの。 (= (20) )

まず、(24a) について重要な点は、焦点となる意味的要素と、何が焦点であるかを知らせる統語的要素とが、一対一に対応していない点にある。このことを、(25B) を例に説明する。(25B) では、文脈上、意味的要素「花子と」が焦点になっている。しかし、このとき、「花子と」が焦点であることを表す形式的特徴は、(24a) で述べられているように、その後の統語的要素「遊ぶの」のアクセント弱化であって、統語的要素「花子と」そのものの強調ではない。言い換えるならば、意味的要素「花子と」に関わる意味的特徴（焦点であること）が、統語的要素「遊ぶの」の形式的特徴（アクセントの弱化）によって非類像的に表されていると言える。このような意味と形式の対応を表したもののが図9である。

さて、図9に示した形式と意味の非類像的な関係を適切に表示するためには、Croft によるツォツィル語の例 (23) の分析と同様、(25B) の「遊ぶの」は、あくまで図9の構文全体を基に派生するものとして捉える必要がある。つまり、図9の上側で示されているイントネーション込みの形式全体と、「B は今日花子と遊び、かつ、意味的要素「花子と」がこの発話の焦点である」といった意味全体の組み合わせがあるからこそ、(25B) においては意味的要素「花子と」が焦点であると理解されるわけである。

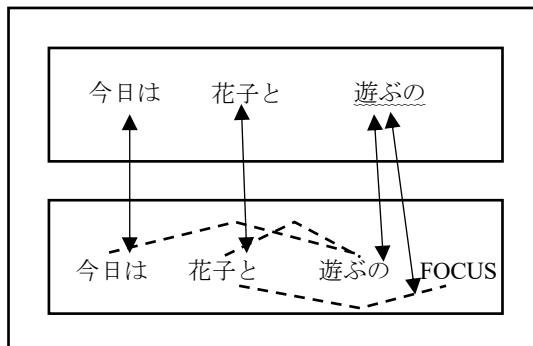


図9：(25B)における形式と意味の対応

続いて、(24b)の持つ理論的含意を、(26B)を例に述べる。ここでも、先程の(24a)(25B)と同様、図10で表されているような、イントネーションのパターン形式全体と意味構造全体との記号的関係を基にした分析が必要であると言える。なぜなら、(26B)では、(24b)で述べられているように、どの統語的要素もアクセントが弱化されておらず、意味的要素「遊ぶの」が焦点であることを表す形式的特徴（例えば、強い発音など）は、少なくとも統語的要素「遊ぶの」には生じておらず、その点において形式と意味が非類像的に対応しているからである。

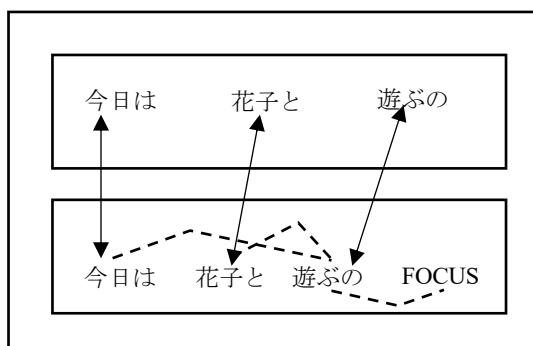


図10：(26B)における形式と意味の対応

#### 5.4 提案と考察

本節では、これまでに述べてきた理論的背景を基に、(i)と(ii)の論点（以下に再掲する）をより適切に扱うための提案を行い、その提案と先行研究との関係について考察を行う。

(i) : 日本語の時間節構文における時間状況の焦点化について（5.4.1節）

(ii) : 日本語の無助詞主題構文と助詞省略構文の形式的区別について（5.4.2節）

### 5.4.1 論点 (i) に関する提案と考察

本節では、まず、5.4.1.1 節で、時間状況の焦点化や非焦点化は「焦点化時間節構文」と「非焦点化時間節構文」と呼ぶ 2 つの構文が持つ構文的意味によるものであると提案する。続いて、5.4.1.2 節で、その提案が妥当なものかどうか、読み上げ調査の結果を基に検証する。その上で、5.4.1.3 節において、先行研究と本稿の分析との関係、特に、時間節における格助詞の有無によって生じる意味の違いについて考察を行う。

#### 5.4.1.1 提案

はじめに、論点 (i) に対する本稿の分析を提案する。本稿では、時間節構文における焦点化の解釈と非焦点化の解釈は、(27) と図 1 1、および、(28) と図 1 2 の構文がそれぞれ持つ構文的意味であると考える。

(27) 焦点化時間節構文

- a. 主節のアクセントは弱化している。
- b. 焦点は時間状況に置かれる。

(28) 非焦点化時間節構文

- a. 主節のアクセントは維持されている。
- b. 焦点は主節事態に置かれる。

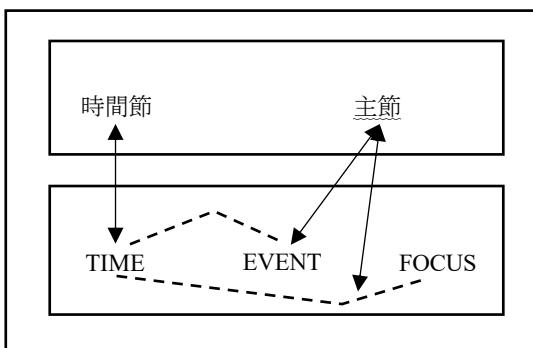


図 1 1 : 焦点化時間節構文

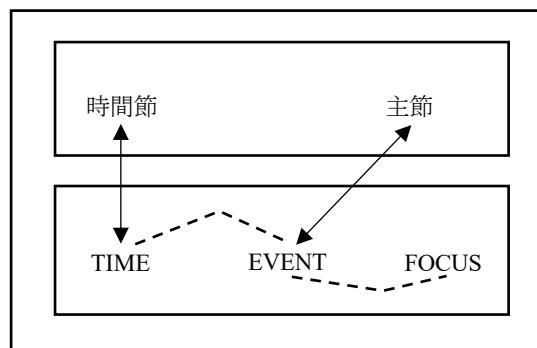


図 1 2 : 非焦点化時間節構文

以下、(29B) と (30B) を用いて、本稿の分析を具体的に説明する。(29B) は時間状況が焦点になっている例であり、(30B) は主節事態が焦点になっている例である。

(29) 【時間状況焦点】

A : 最近 たくさん本を読んでるって聞きました。忙しそうなのに いつ本を読んでる  
んですか？

B : 電車に乗ってるあいだに 本を読んでます。

(30) 【主節事態焦点】

A : 通勤時間が電車で片道 1 時間もかかるそうですね。電車に乗ってるあいだって 何  
かしてるんですか？

B : 電車に乗ってるあいだ 本を読んでます。

まず、(29B) のように、焦点が時間状況にある例は、(27) および図 1 1 の焦点化時間節構文の具体例として分析される。つまり、(29B) では、時間節「電車に乗ってるあいだに」のアクセントは維持されているが主節「本を読んでます」のアクセントは弱化している形式を持ち、それに対して、時間状況「電車に乗ってるあいだ」が焦点であるという意味が記号的に組み合わされているという分析である。これらの記号的対応を図 1 3 に示す<sup>21</sup>。図 1 3 でも、図 9 と同様、意味的要素「電車にのってるあいだに」が焦点であることは、主節「本を読んでます」のアクセント弱化という形式的特徴によって表されており、統語的要素と意味的要素は非類像的な対応を持っていると言える。

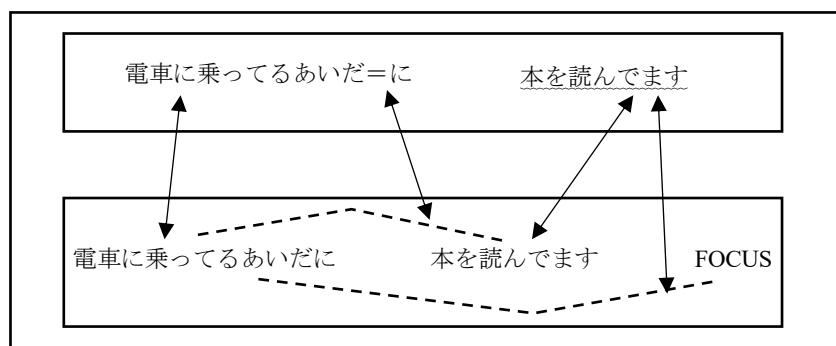


図 1 3 : 本稿による (29B) の分析

続いて、(30B) のように、焦点が主節事態に置かれる例について、本稿の分析を述べる。このような例は、(28) および図 1 2 によって示される非焦点化時間節構文の具体例として

<sup>21</sup> 「に」などの格助詞に関わる意味は、5.4.1.3 節で述べる。

分析される。つまり、(30B)では、図14のように、時間節「電車に乗ってるあいだ」も主節「本を読んでます」もアクセントが弱化せず維持されているという形式と、主節事態が焦点であるという意味とが組み合わされていると分析するわけである。図14では、図12と同様、意味的要素「本を読んでます」が焦点であることは、時間節も主節もアクセントが維持されているという、形式全体の特徴によって表されており、その点において、意味と形式が非類像的に対応していると言える。

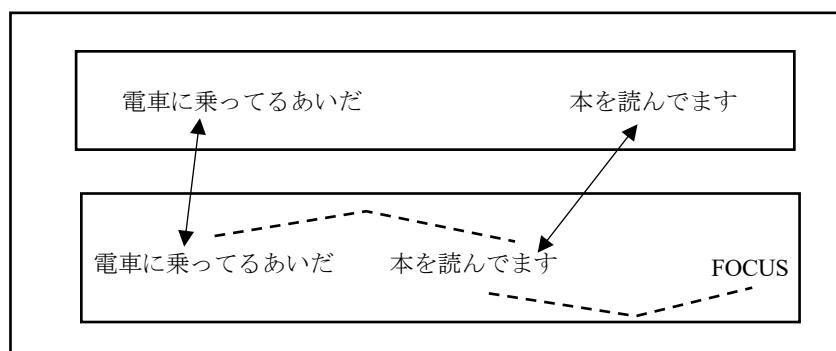


図14：本稿による(30B)の分析

なお、本稿の分析では、格助詞モデルとは異なり、時間状況が焦点であるかどうかと時間節が格助詞を伴うかどうかは独立していることに注意されたい。本稿の分析では、あくまで、構文におけるイントネーションのパターン形式と情報構造的意味とが対応していると考えるのである。したがって、(11)や(31)のように、時間節が格助詞を伴わないにも関わらず時間状況が焦点になっている例も、格助詞モデルにとっては反例となり得るが、本稿の分析では、図15のように、(29B)と同様に扱うことが可能となる。

### (31) 【時間状況焦点／格助詞なし】

A：最近 たくさん本を読んでるって聞きました。忙しそうなのに いつ本を読んでるんですか？

B：電車にのってるあいだ 本を読んでます。

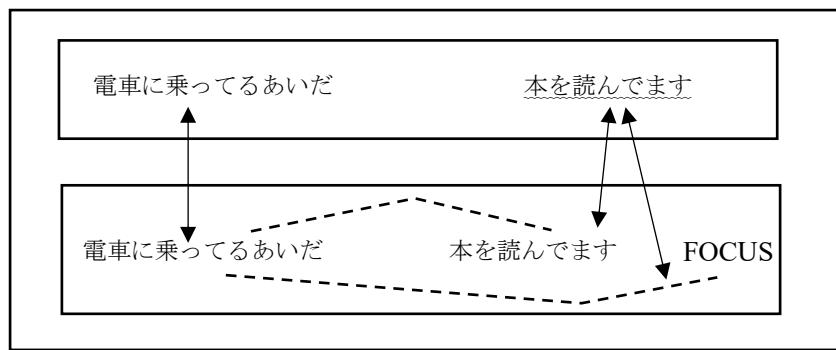


図 15：本稿による (31) の分析

同様に、(10) や (32) のような、時間節が格助詞を伴い主節事態に焦点が置かれる例も、図 16 のように問題なく扱える。繰り返すが、本稿では、各構文は、イントネーションのパターンという形式全体に情報構造的意味が対応する単位であると捉えている。

#### (32) 【主節事態焦点／格助詞あり】

A : 通勤時間が電車で片道 1 時間もかかるそうですね。電車に乗ってるあいだって何かしてるんですか？  
 B : 電車に乗ってるあいだに 本を読んでます。

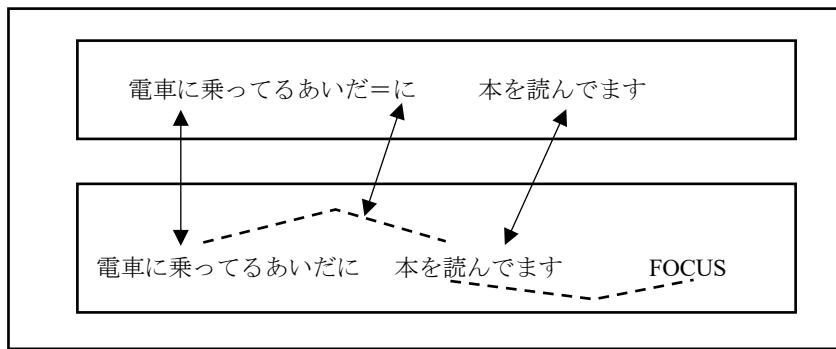


図 16：本稿による (32) の分析

##### 5.4.1.2 時間節構文の情報構造に関する読み上げ調査

本節では、東京方言母語話者を対象に行った読み上げ調査の結果を基に、以下の 3 点を考察する。まず、5.4.1.2.1 節で調査結果を示し、本稿の提案が妥当なものであることを実証的に示す。続いて、5.4.1.2.2 節で、本稿の提案と一見矛盾する結果について検討する。最後に、5.4.1.2.3 節では、調査の中で観察される強調現象を取り上げ、そのような例が本稿の提案の下で適切に扱えることを示す。調査の概要は (33) から (35) の通りである。

(33) 調査参加者

- ・参加人数：6名（男性2名女性4名。以下 a から f と記す）
- ・参加者の出生地および生育地：東京都（参加者 d のみ千葉県）
- ・参加者の年齢：20代

(34) テスト文<sup>22</sup>

- ・2種類のテスト文（以下、「テスト文ア」「テスト文イ」と呼ぶ）を用いる。
- ・参加者のうち、a, b, c の3人はテスト文アを、d, e, f の3人はテスト文イを読む。
- ・テスト文アには、情報構造の異なる6つの会話例が書かれており、参加者が読む部分（Bの発話）には無助詞時間節構文が用いられている。
- ・テスト文イには、情報構造の異なる6つの会話例が書かれており、参加者が読む部分（Bの発話）には格助詞時間節構文が用いられている。

(35) 調査の方法

- ・調査は全て Web会議サービス Zoom のレコーディング機能を用いて録音する。
- ・はじめに、参加者はテスト文に一通り目を通す。
- ・参加者は、読み上げの直前に、会話例の A と B を黙読する。
- ・読み上げの際には、A の質問に対して B がきちんと返答をしているように読んでほしいことを伝える。
- ・調査者（本稿筆者）が A を読み上げ、参加者はそれに答える形で B を読み上げる。

#### 5.4.1.2.1 本稿の提案の妥当性検証

本節では、調査の結果を基に、本稿が提案した仮説が妥当かどうかを検証する。ここでは、ごく大まかに、各録音における時間節の末尾のピッチ（st=100Hz）の値（X）と主節の開始部分のピッチの値（Y）の差（Y-X）を計算した上で、同じ時間節の形式を用いるテスト文のペアについて、時間状況焦点の例における（Y-X）の値と、主節事態焦点の例における（Y-X）の値を比較した。本稿の提案が妥当であれば、時間状況焦点の例では、主節事態焦点の例に比べて（Y-X）の値が小さい（すなわち、主節のアクセントが弱化している）はずである。なお、以下では（Y-X）の値を「節間のピッチ差」または単に「ピッチ差」と呼ぶ。また、例えば「参加者 a が読み上げたテスト文番号 4 の録音」を【a-4】のように略記する。

---

<sup>22</sup> テスト文の一覧は本稿の末尾に「付録」として付した。

調査の結果は表2と表3の通りである。また、テスト文アにおける時間状況焦点（図17）と主節事態焦点（図18）、およびテスト文イにおける時間状況焦点（図19）と主節事態焦点（図20）の例をそれぞれ表の下に示す。各形式や参加者によってバラツキはあるものの、全体的な傾向としては、テスト文アについてもテスト文イについても、時間状況焦点の方が主節状況の例に比べてピッチ差が小さくなっている、その逆の例はごく一部である<sup>23</sup>。本調査では調査参加者がそれほど多くなく、また、テスト文のモーラ数やアクセント型などが統一されていなかったため、断定はできないものの、少なくとも本稿の提案に矛盾する結果は出でていないと言って差し支えないと思われる。つまり、時間状況が焦点であるかどうかは、時間節の格助詞の有無（すなわち、テスト文アかテスト文イか）に関わらず、時間節構文全体のイントネーションのパターンによって表される傾向があると言えそうである。

参加者	形式	テスト文番号	焦点	X	Y	Y-X
a	とき	1	時間状況	-0.959	2.420	3.379
		5	主節事態	0.131	3.976	3.845
	あいだ	4	時間状況	2.505	4.176	1.671
		2	主節事態	4.152	6.983	2.831
	あと	6	時間状況	7.200	3.607	-3.593
		3	主節事態	0.543	4.435	3.892
b	とき	1	時間状況	0.884	1.692	0.808
		5	主節事態	3.081	9.408	6.327
	あいだ	4	時間状況	3.551	5.368	1.816
		2	主節事態	3.081	9.408	6.327
	あと	6	時間状況	-1.594	3.984	5.577
		3	主節事態	-2.016	7.383	9.399
c	とき	1	時間状況	19.328	13.357	-5.971
		5	主節事態	0.700	15.490	14.790
	あいだ	4	時間状況	22.439	16.312	-6.127
		2	主節事態	14.065	19.983	5.918
	あと	6	時間状況	13.746	13.898	0.151
		3	主節事態	12.572	17.831	5.259

表2：テスト文アの結果一覧

<sup>23</sup> 具体的には、表3（テスト文イ）で参加者eの「あいだに」「あとで」と参加者fの「あとで」がそれぞれ本稿の予想とは異なっている。これらの結果については次節で検討する。

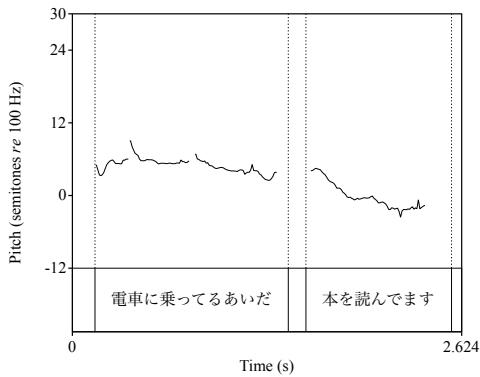


図 17 :【a-4】のグラフ

(時間状況焦点の「あいだ」)

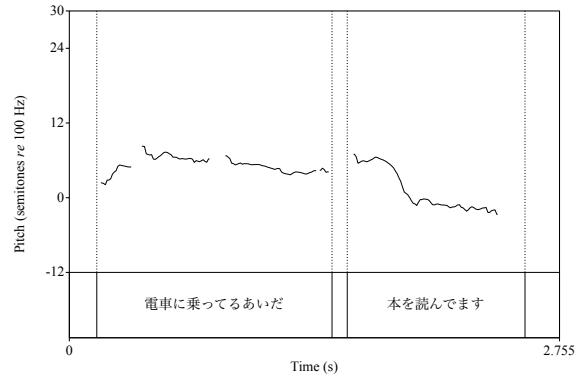


図 18 :【a-2】のグラフ

(主節事態焦点の「あいだ」)

参加者	形式	例文番号	焦点	X	Y	Y-X
d	ときに	1	時間状況	12.861	1.999184	-10.8623
		5	主節事態	12.626	16.348365	3.72268
	あいだに	4	時間状況	17.259	17.968738	0.709317
		2	主節事態	16.408	20.633208	4.225602
	あとで	6	時間状況	12.196	14.898654	2.702432
		3	主節事態	12.228	18.309131	6.081345
e	ときに	1	時間状況	12.702	12.028659	-0.67309
		5	主節事態	10.514	13.937073	3.42298
	あいだに	4	時間状況	11.523	13.674594	2.15111
		2	主節事態	17.678	19.328732	1.651
	あとで	6	時間状況	10.316	12.121442	1.80575
		3	主節事態	14.352	13.816832	-0.53543
f	ときに	1	時間状況	8.1987	11.117743	2.919041
		5	主節事態	7.8773	11.839271	3.961957
	あいだに	4	時間状況	12.758	17.422818	4.665235
		2	主節事態	11.075	17.112746	6.037400
	あとで	6	時間状況	9.1489	14.111132	4.962207
		3	主節事態	9.8966	13.288896	3.392301

表3 : テスト文イの結果一覧

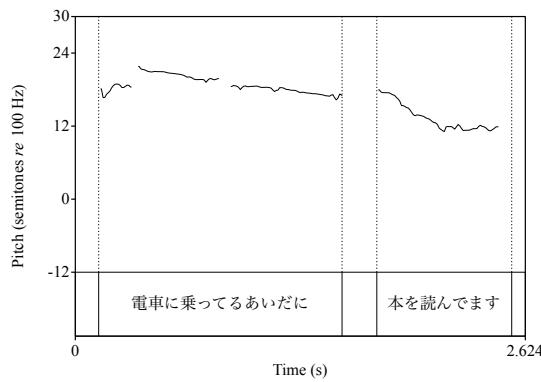


図19：【d-4】のグラフ  
(時間状況焦点の「あいだに」)

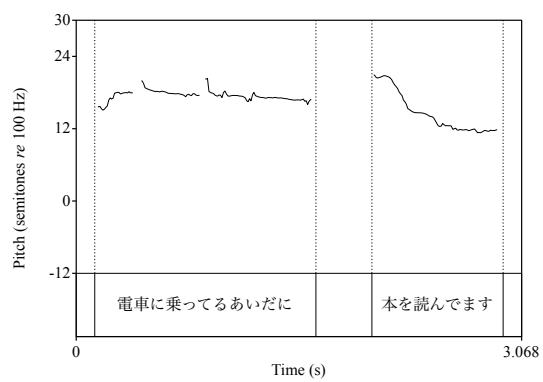


図20：【d-2】のグラフ  
(主節事態焦点の「あいだに」)

#### 5.4.1.2.2 本稿の予想に合致しなかった例

ここで、テスト文イの結果(表3)のうち、本稿の予想に合致しなかった例、具体的には、参加者eとfの結果について述べておく。本稿の予想とは異なり、参加者eの「あいだに」「あとで」と、参加者fの「あとで」の結果は、主節事態焦点のピッチ差の方が時間状況焦点のピッチ差よりも小さくなった。以下に表3の当該部分を抜粋して表4として示し、「あいだに」と「あとで」のテスト文を(36)から(39)として示す。

参加者	形式	例文番号	焦点	X	Y	Y-X
e	あいだに	4	時間状況	11.523	13.674594	2.15111
		2	主節事態	17.678	19.328732	1.651
	あとで	6	時間状況	10.316	12.121442	1.80575
		3	主節事態	14.352	13.816832	-0.53543
f	あとで	6	時間状況	9.1489	14.111132	4.962207
		3	主節事態	9.8966	13.288896	3.392301

表4：参加者eと参加者fの結果の一部(表3より抜粋)

(36) 【時間状況焦点の「あいだに」(テスト文番号4)】

A: 最近 たくさん本を読んでるって聞きました。忙しそうなのに いつ本を読んでるんですか?

B: 電車にのってるあいだに 本を読んでます。

(37) 【主節事態焦点の「あいだに」(テスト文番号2)】

A: 通勤時間が電車で片道1時間もかかるそうですね。電車に乗ってるあいだって 何かしてるんですか?

B: 電車に乗ってるあいだに 本を読んでます。

(38) 【時間状況焦点の「あとで」(テスト文番号6)】

A: 体が硬いから ストレッチをしようと思ってるんです。ストレッチって いつすればいいんですか?

B: お風呂に入ったあとで ストレッチをしてください。

(39) 【主節事態焦点の「あとで」(テスト文番号3)】

A: 最近 美容に気をつかおうと思ってます。お風呂上がりって 何かした方がいいことはありますか?

B: お風呂に入ったあとで ストレッチをしてください。

さらに、参加者 e の読み上げた「あいだに」「あとで」と参加者 f の「あとで」を図21から図26にそれぞれ示す。それぞれのグラフを見たり実際の録音を聞いたりすると、参加者 e は情報構造に関わらず主節のアクセントを弱化させて<sup>24</sup>発音し、参加者 f は情報構造に関わらず主節のアクセントを維持させて発音していることが分かる。

<sup>24</sup> なお、図21の【e-4】では「あいだに」の「に」も高く強調されていることが分かる。これは5.4.1.2.3節で扱う現象と同様のものであると考えられる。ただし、図24の【e-3】でも、主節焦点であるにも関わらず「あとで」の「で」が高く強調されている。こちらについては参加者 e の読み上げミスのようにも思われるが、現段階では説明を与えることはできない。

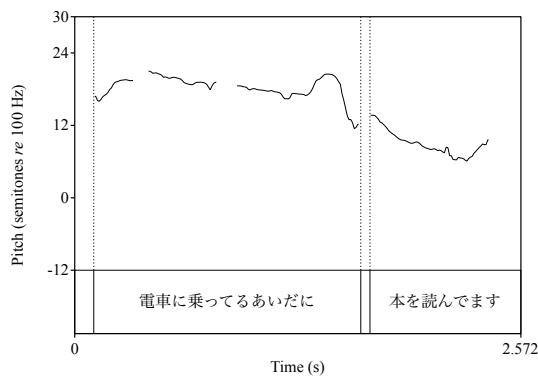


図 2 1 :【e-4】のグラフ  
(時間状況焦点の「あいだに」)

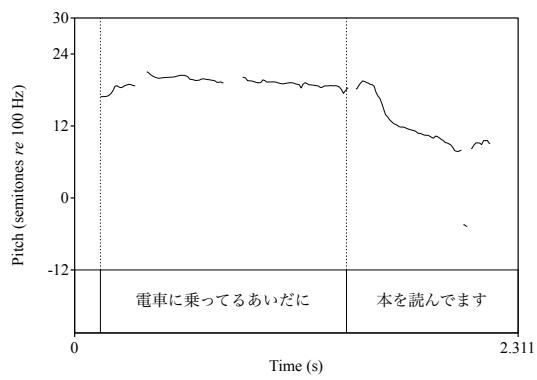


図 2 2 :【e-2】のグラフ  
(主節事態焦点の「あいだに」)

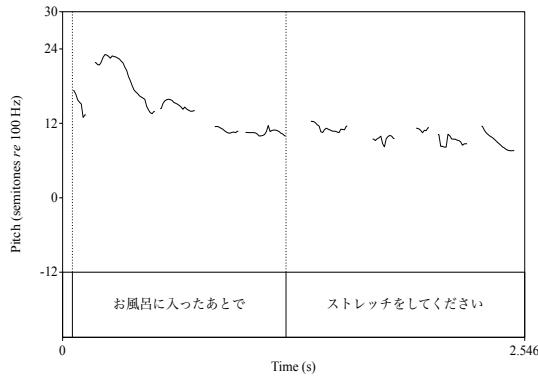


図 2 3 :【e-6】のグラフ  
(時間状況焦点の「あとで」)

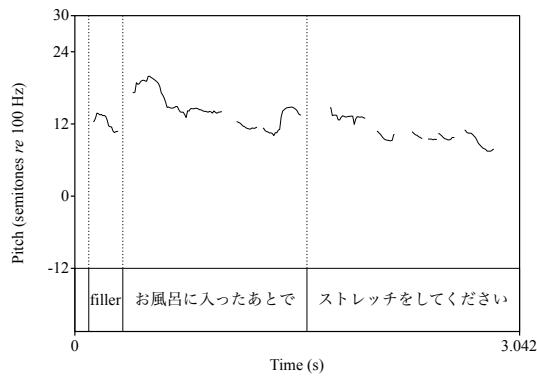


図 2 4 :【e-3】のグラフ  
(主節事態焦点の「あとで」)

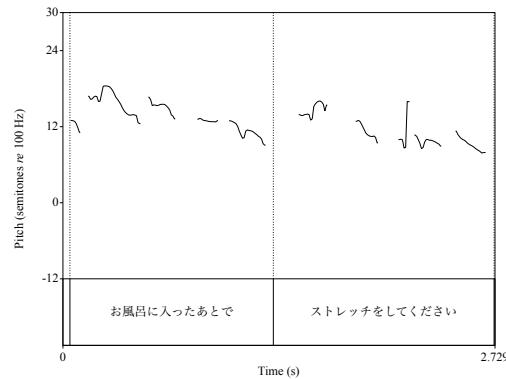


図 2 5 :【f-6】のグラフ  
(時間状況焦点の「あとで」)

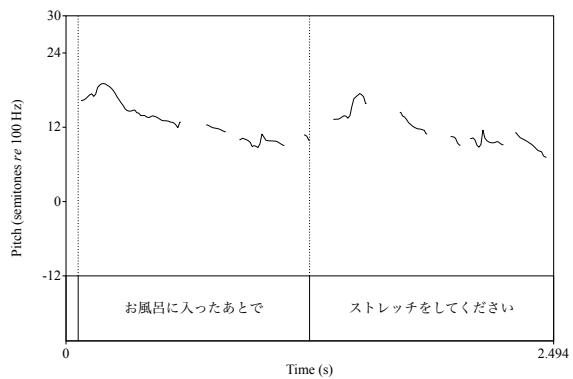


図 2 6 :【f-3】のグラフ  
(主節事態焦点の「あとで」)

これらのパターンが何に起因するかを断定することは現段階ではできないが、以下の2点は指摘しておけると思われる。1点目は、これらの例に見られる3つの偏りである。まず、本稿の予想に合致しなかった読み上げは、参加者 e と f のみに表れており、個人間の偏りがあると言える。また、これらの例が、参加者 e は常に主節のアクセントを弱化させ、参加者 f は常に主節のアクセントを維持させるというように、本稿の予想との不一致にも偏りが見られる。さらに、参加者 e も f も、他の例のペアでは本稿の予想と一致していることを考えると、時間節の形式による偏りがあるとも考えられる。

続いて、2点目に、これらの例を不自然であると判定する母語話者がいる点である。東京出身・東京在住の日本語母語話者<sup>25</sup>に【e-2】と【f-6】を聞いてもらい、それぞれ参加者 d による同番号の録音（すなわち【d-2】と【d-6】）と比較してもらったところ、参加者 d の読み上げは自然であるのに対して、参加者 e と f の読み上げは不自然であると判断した（本稿筆者の判断も同様である）。

#### 5.4.1.2.3 調査結果に観察される非類像性の解消

続いて、前節で示した調査結果のうち、時間節のアクセントに見られる強調現象について考察する。結論だけを先に述べておくと、本節では、時間節末尾などのアクセントを高く強調して発音する読み方は、話し手が焦点化時間節構文における形式と意味の対応関係をより類像的な関係にしようとして、言い換えれば、構文内の非類像性を解消しようとして行うものであると述べる。

読み上げ調査では、時間状況が焦点となっている例を読み上げる際、時間節末尾部分のアクセントを高く強調して読み上げる参加者が見られた。ここではそのような例として、参加者 a と参加者 c による(40B)の読み上げをそれぞれ図27と図28に示す。参加者 a は「あと」の全体を高く強調し、参加者 c は「あと」の「あ」の部分を高く強調していることが分かる（それぞれ図内に示す）。なお、そのような強調が見られる場合であっても、本稿の予想通り、主節のアクセントは弱化している点にも注目されたい。

---

<sup>25</sup> 参加者 a から f および下で挙げる参加者 g から i の計9名とは異なる話者1名である。

(40) 時間状況焦点の「あと」(テスト文番号 6)

A : 体が硬いから ストレッチをしようと思ってるんです。ストレッチって いつすればいいんですか？

B : お風呂に入ったあと ストレッチをしてください。

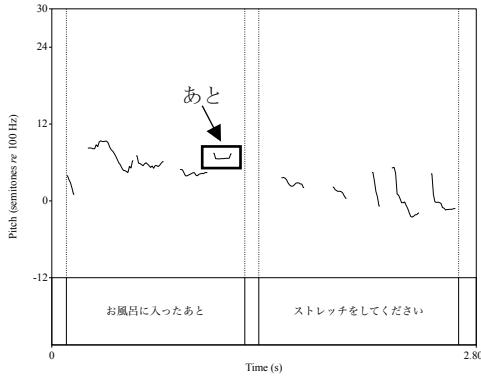


図 27 :【a-6】のグラフ

(時間状況焦点の「あと」)

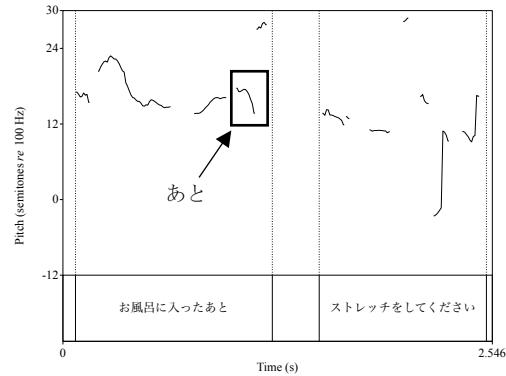


図 28 :【c-6】のグラフ

(時間状況焦点の「あと」)

このような強調は、郡 (2020) や泉谷 (2008) の主張や、本稿の提案したモデルの説明の中すでに見たように、実際には過剰なものであると言える。なぜなら、情報の焦点が時間状況にあると聞き手に伝える際、話し手に求められていることは、主節のアクセントを弱化させた形式で発音することであって、時間節のアクセントは取り立てて大きく変化させる必要はないからである。現に、同じく時間状況焦点の例を読み上げた際の図 17 や図 19 では、時間節のアクセントは、図 27 や図 28 ほど大きく変化していないことを確認されたい。

それにも関わらず、参加者 a や c の読み上げで時間節のアクセントに強調が見られたことについては、本章 5.3 節や 5.4.1.1 節で説明した「統語的要素と意味的要素の非類像的対応」の観点に立てば適切に説明できる。焦点化時間節構文は、主節のアクセント弱化によって時間状況が焦点であると表す点で、統語的要素と意味的要素の関係は非類像的であった(図 9 を再度参照されたい)。しかし、時間節のアクセントを(過剰ではあるが)強調することによっても時間状況が焦点であると表せば、図 29 のように、構文内の要素間の関係は、図 9 に比べてやや類像的になる<sup>26</sup>。なお、図 29 のゴシックは強調されたアクセントを表す。

<sup>26</sup> 仮に、将来、図 29 の構文における主節のアクセント弱化が随意的になったり、主節のアクセント維持が義務的になったりすれば、構文内の要素間の関係はさらに類像的になる。しかし、

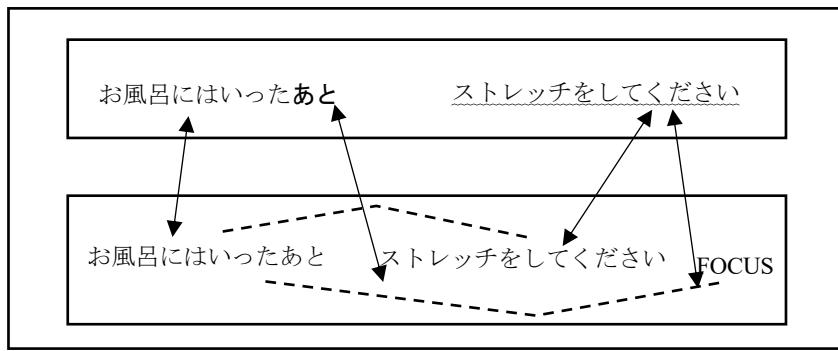


図 29 :【a-6】や【c-6】における(40B)の形式と意味の対応

#### 5.4.1.3 時間節構文における格助詞の意味的貢献

本節では、本稿が提案する分析と先行研究による分析との関係を、時間節における格助詞の有無による意味的相違の観点から述べる。本稿 5.4.1.1 節では、格助詞モデルによる一般化(1)に代わって、時間節における格助詞の有無は、時間節構文の情報構造的意味には直接的には関わらないと述べた。では、本稿の分析において、時間節における格助詞の有無は、どのような意味の違いを表していると言えるであろうか。

本節では、まず、5.4.1.3.1 節において、格助詞の有無による時間表現の意味の違いに関する先行研究(定延 2013 や岩崎 1998 など)を概観する。その上で、それらの先行研究に共通する「主節事態と時間状況との間の時間関係の明確化」という意味の具体的な表れとして、5.4.1.3.2 節で、「とき」と「ときに」を用いた時間節構文に観察される意味の違いについて指摘する。なお、以下では、時間節が格助詞を伴う(41)のような構文を「格助詞時間節構文」と呼ぶ。

- (41) a. 橋を渡っていたときに、向こうのほうから何か変な音が聞こえました。
- b. 夜行列車に乗っているあいだに、今後の人生について考えた。
- c. 電車に乗ったあとで、会議の資料を忘れてきたことに気がついた。(いずれも作例)

---

5.4.1.2.2 節での議論を基に考えると、そのような構文は少なくともまだ慣習化していないと言えよう。

#### 5.4.1.3.1 先行研究による記述

まず、時間表現における「に」の意味的貢献について、定延（2013）の分析を概観する。定延は、時間表現に付く「に」の意味を「事態を時間軸上の1点に位置づける」意味であると主張する（定延 2013 : 347–349）。例えば、無助詞の「3時までφ」を用いた (42b) では、「(発話時などから) 3時まで」の時間軸上全体において「この仕事をする」という事態が生じることが表されていると言える。これに対して、格助詞を伴う時間表現「3時までに」を用いた (42a) の文では、「(発話時などから) 3時まで」という時間軸の中のどこか1点に、「この仕事をする」という事態が位置付けられている。定延（2013）では、この意味的差異に貢献するものが、格助詞「に」の持つ「事態の時間軸上への位置付け」であると説明されるわけである。

- (42) a. 私は3時までφこの仕事をする。  
b. 私は3時までにこの仕事をする。（いずれも定延 2013 : 347 「φ」を付した）

定延（2013）では、本稿が扱ってきたような、いわゆる時間節と呼ばれる表現に関する言及はないものの、格助詞「に」が及ぼす以上の意味的貢献は、時間節構文に関しても同様に当てはまると考えられる。本稿 5.2.2.1 節でも簡単に言及したが、「あいだ」「まで」を用いた時間節構文では、無助詞時間節構文の具体例である (43a)(44a) は、「チケットに並んでいるあいだ」などの時間状況全体において「帰りの電車のことを考える」などが生じることを意味する。これに対して、格助詞「に」を用いた格助詞時間節構文の具体例である (43b)(44b) では、そのような時間状況のうちのどこか1点で主節事態が生じることが意味されている。つまり、(43b)(44b) では、定延が主張するような、格助詞「に」の「事態を時間軸上の1点に位置付ける」意味が貢献することで、主節事態が時間状況のうちの1点に位置付けられていると考えられるわけである。

- (43) a. チケットに並んでいるあいだφ、帰りの電車のことを考えていた。  
b. チケットに並んでいるあいだに、映画が始まってしまった。（いずれも作例）  
(44) a. 私が部屋に戻ってくるまでφ、待機していてください。  
b. 私が部屋に戻ってくるまでに、コピーをしておいてください。（いずれも作例）

続いて、「で」を用いる格助詞時間節構文、特に「あとφ」と「あとで」の意味の違いに関する記述的研究（岩崎 1998, 馬場 1996, 品川 2006）を概観する。これらの先行研究は、記述の表現はそれぞれに異なる部分があるものの、「あとφ」と「あとで」に関して、(45)が指摘されている点においては共通していると言える。

- (45) a. 「あとφ」を用いた無助詞時間節構文においては、主節事態が時間節事態より時間的に後であるといった順序関係は、積極的には表されていない。

(品川 2006 : 28, 岩崎 1998 : 194, 馬場 1996 : 37)

- b. 「あとで」を用いた格助詞時間節構文においては、時間節の事態が生じ、それに時間的に後続して主節事態が生じるといったような、時間的順序が積極的に表されている。（品川 2006 : 29, 岩崎 1998 : 194, 馬場 1996 : 38）

例えば(46)では、無助詞時間節構文の(46a)は問題なく使用できるが、格助詞時間節構文の(46b)は（非文とまでは言わずとも）容認されにくいと思われる。これは、(46)で意図されている意味では、「戦争が終わった」という時間節事態の生起が、主節事態「10年たった」の開始点と一致しているため、時間節事態と主節事態との時間的順序や前後関係が明確でなく、したがって、「あとで」の意味と相反するからだとされる（岩崎 1998 : 195–196）。

- (46) a. 戦争が終わったあと 10 年たった。

b. \*戦争が終わったあとで 10 年たった。(いずれも久野 1973 : 99 「\*」も久野による)

以上、「に」や「で」が時間節構文に用いられた際の意味的貢献を簡単に見てきたが、どちらの記述にも共通する意味を取り出すならば、格助詞時間節構文には、時間状況と主節事態との時間的関係の明示という意味特徴があると言えよう。そのような明示は、「あいだに」や「までに」であれば定延による「事態を時間軸上の 1 点に位置付ける」として具現化しており、「あとで」であれば岩崎などの指摘する時間的順序の明示として具現化しているわけである。このことは、「に」や「で」が伝統的な日本語文法において「格助詞」と分類されること、すなわち、「名詞について用言が表す意味との論理的な関係（格関係）を表示する」意味を持つ（小矢野 2014 : 102）と定義されることから考えても、ごく自然であると言える。

#### 5.4.1.3.2 さらなる例の検討 —「とき ϕ」と「ときに」を例に—

前節では、「あいだ／あいだに」「まで／までに」「あと／あとで」に関する先行研究の記述や分析を基に、格助詞時間節構文には主節事態と時間状況の時間関係が明示されるという意味特徴があると述べた。本節では、その意味特徴の表れとして、「とき ϕ」を用いた時間節構文と「ときに」を用いた時間節構文に観察される3つの意味の違いについて、本稿のこれまでの議論とも絡めながら指摘しておく。

1点目は、「あいだ／あいだに」や「まで／までに」に関して定延（2013）が指摘していたような、幅のある時間と点的な時間に関する意味の違いである。日本語記述文法研究会（2008）では、「とき ϕ」と「ときに」に関して「意味的な制約が生じることがある」として、「ときに」には(47a)のように形容詞などの状態性述語が現れにくくと指摘されている（日本語記述文法研究会 2008：172）。

(47) a. ?初めて車を運転したときに、本当に怖かった。

（日本語記述文法研究会 2008：172 「?」は原文による）

b. 初めて車を運転したとき、本当に怖かった。（(47a)を基にした作例）

2点目は、「曖昧性の低減」とでも言うべき意味の違いである。本稿第4章では、無助詞時間節構文が持つ「時間状況の設定」という意味は、無助詞主題構文が持つ「主題の設定」および「語用論的関連付け」という意味に動機付けられていることを主張した。そこで議論とは、(48)のような無助詞時間節構文は、(48')のように文脈情報を変更すれば、無助詞主題構文としての解釈も可能になるというものであった。

(48) A：「川のせせらぎ」みたいなBGMってたまに売ってるけど、あれってどういう人が買うんだろうね？日常生活の中で使い所がない気がするんだけど…。

B：いやいや、何かに集中するとき、あった方がいいよ！（作例）

(48')A：結局さ、人間、常にリラックスしてた方がいいと思うんだ。何かに集中するなんて、疲れちゃうじゃん？

B：ええっ、そうかな？何かに集中するとき、あった方がいいよ！（作例）

無助詞時間節構文では文脈による上記の曖昧性があるものの、格助詞時間節構文を用い

た以下の例では、そのような曖昧性は低減され、時間状況とそこで生じた事態という解釈が優勢となる。(49) が不自然に響くのはこのためである。つまり、(49B) では、(48'B) とは異なり、格助詞「に」の意味的貢献によって、主節事態「あつた方がいいよ」と時間状況「何かに集中するとき」との時間関係が明示されているということである<sup>27</sup>。

(49) A : 結局さ、人間、常にリラックスしてた方がいいと思うんだ。何かに集中するなんて、疲れちゃうじゃん？

B : ?ええっ、そうかな？ 何かに集中するときに、あつた方がいいよ！ (作例)

続いて、「ときに」を用いた例に見られる格助詞の意味的貢献の3点目は、「まさに」や「よりによって」とでも注釈が付くような、ある事態と時間節状況の意味的関係の明示である。そのような意味の違いが観察される例を2種類挙げる。1つ目は、(50) のような例である。やや微妙な差はあるが、筆者や周囲の日本語母語話者にとって、格助詞時間節構文を用いた(50a) は、無助詞時間節構文を用いた(50b) に比べて「まさにそのとき」や「今のうちに」といった意味が解釈されやすい<sup>28</sup>。これに対して、(50b) では、「先生が来ているときならいつでも」といった解釈も可能となり、(50a) のような切迫感が解釈されにくくなる。

(50) 【片桐先生は普段あまり大学にいないため、卒業論文などの指導を受けたい学生は、片桐先生に直接お会いできるチャンスを逃したくないと思っている。そのような学生の一人である話し手が、大学の購買で片桐先生を見かけた際の独り言】

a. 先生が来てるときに、相談行つとこうっと。

b. ?先生が来てるとき ϕ、相談行つとこうっと。 (いずれも作例)

<sup>27</sup> ただし、格助詞を用いた格助詞時間節構文を用いたからといって、必ずしも時間状況の意味が強制されるわけではない。以下のBの例のように、「変更する」など時間を対象に行える動作を表す動詞を用いると、格助詞時間節構文であっても、下線部の「源先生がこっちにいらっしゃるとき」は、対象としての時間や時点として解釈されやすいと思われる。本稿が曖昧性の低減という用語を用いたのはこのためである。

A : 卒業パーティーの日程だけど、10日は源先生が東京に出張されてるらしいんだ。

B : あ、そうなの。じゃあ、源先生がこっちにいらっしゃるときに変更しとくね。 (作例)

<sup>28</sup> なお、ここでは、「相談行つとこうっと」のアクセントは弱化しないこと、つまり、主節事態に焦点が置かれる状況であることを想定している。

また、もう 1 つの例として、(51) の下線部を見られたい<sup>29</sup>。(51a) に見られるように、「X ときに！」を末尾に用いた形式には、「よりによって今の状況 X で行われる動作に対する非難や呆れ」などを表す意味があると考えられる<sup>30</sup>。しかし、(51b) のように「X とき ϕ！」の形式ではこの意味を表すことはできず、(51b) は非常に不自然に響く。

(51) 【中学 3 年生の草間は、勢い余って校長先生を殴ってしまった。草間の行動に対する担任の先生のセリフ】

- a. 「草間さん。そりやね。やむにやまれぬ事情があつたろうということはわかるよ。  
なにもよりによって、きょうという日をえらばなくともいいじゃないか。市の広報課から、『学校めぐり』のコラムの取材に来ているっていうときに！
- b. ?? 「なにもよりによって、きょうという日をえらばなくともいいじゃないか。市の広報課から、『学校めぐり』のコラムの取材に来ているっていうとき ϕ！

(中山恒『トラブルさんこんにちは』 下線を付した)

(50) と (51) は、いずれも格助詞の有無による意味的貢献、すなわち、主節事態と時間状況との時間関係の明示という観点から説明が可能である。つまり、(50) と (51) では、ある事態（(50) では主節事態、(51) では非難などの対象となる事態）が他ならぬ時間節の時間状況に位置付けられるという意味が共通して表されているからである。(50) ではそのような時間関係の明示が「今のうちに／今まさに」という方向で具現化しているのに対して、(51) では「よりによって今」という方向で具現化しているわけである。

---

<sup>29</sup> (51) は『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』からの用例である。

<sup>30</sup> 類似の例として、園部 (2013) では、「ときに」は逆条件の「のに」に近い意味を表す場合があると述べた上で、次の例が挙げられている。

人の苦しんでいるときに冗談をいうとは何事だと栗木は八木に詰めよった。（園部 2013：145  
下線は園部による）

## 5.4.2 論点 (ii) に関する提案と考察

### 5.4.2.1 提案

本節では、5.4.1 節で示した論点 (i) に関する提案と同様、論点 (ii) について以下の提案を行う。すなわち、本稿では、無助詞主題構文、名詞句焦点の助詞省略構文、全体焦点の助詞省略構文の区別は、各構文が持つ (52)(53)(54) の特徴によって実現していると提案する。また、各構文における形式と意味の対応関係を、図 3 0、図 3 1、図 3 2 にそれぞれ示す。

(52) a. 主節のアクセントは弱化せず維持される

b. 名詞句の指示対象を主題として設定し、主節でそれについて解説を与える（焦点は主節事態に置かれる）

(53) a. 主節のアクセントは弱化する

b. 情報上の焦点は名詞句の指示対象に置かれる

(54) a. 主節のアクセントは弱化する

b. 情報上の焦点は事態全体に置かれる

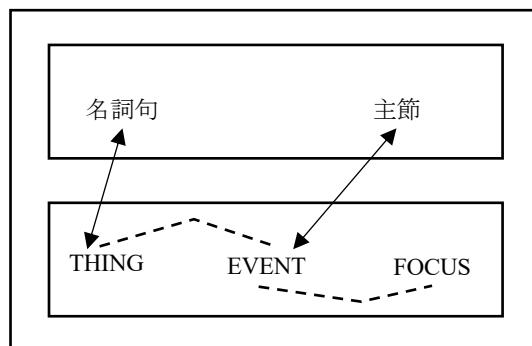


図 3 0：無助詞主題構文の内部構造

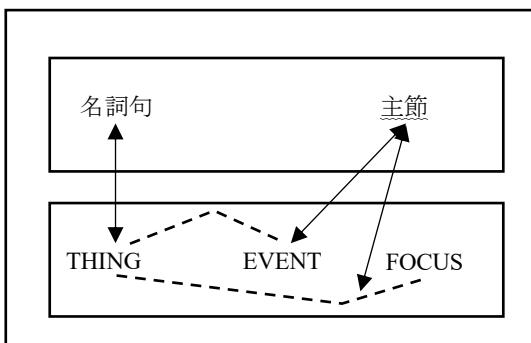


図 3 1：名詞句焦点の助詞省略構文の  
内部構造

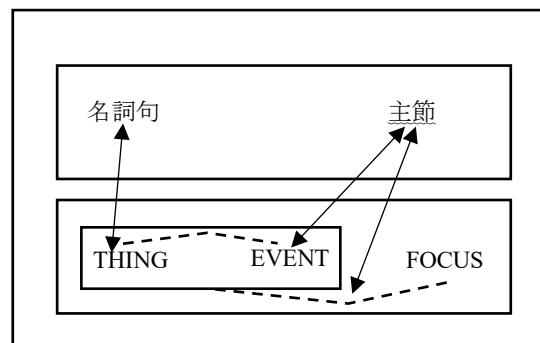


図 3 2：全体焦点の助詞省略構文の  
内部構造

以下では、例を用いて本稿の分析を説明する。まず、(55B) のような、助詞のない名詞句「お金」の指示対象と主節事態「もらった」とが主題・解説の関係（すなわち、主節焦点）になっているものは、(52) の無助詞主題構文の具体例として分析できる。つまり、(55B) は、(52a) の形式と (52b) の意味とが組み合わされた構文の具体例と捉えるわけである。(55B) における形式と意味の対応は、図 3 3 のように表せる。つまり、意味的要素「もらったよ」が焦点であることは、統語的要素「お金」と「もらったよ」のアクセントがどちらも維持されている形式のパターン全体によって表されるという、非類像的な対応である。

(55) 【B は先月居酒屋のアルバイトを辞職した。しかし B は辞職した月の分の給料が振り込まれていないことに気づき 友人の A に相談した。A は直接居酒屋に給料を取りに行くよう B にアドバイスした。後日 A が B に尋ねる】

A : そういうれば お金はもらえた？

B : お金 もらったよ。

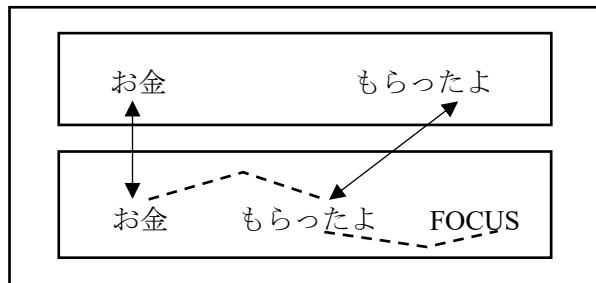


図 3 3 : 本稿による (55B) の分析

続いて、(53) の「名詞句焦点の助詞省略構文」と (54) の「全体焦点の助詞省略構文」について述べる。具体例を扱う前に、(53) と (54) の記述ではこの 2 つの構文が共通の形勢を持つと表示されていることについて述べておく。本稿の提案では、この 2 つの構文は、主節のアクセント弱化という同一のイントネーションパターンを持つと想定している。そして、そのような形式的共通性から抽象化される上位の構文こそが、5.2.1.2 節の先行研究で設定されていた助詞省略構文に相当するものである。そのような上位構文は、苅宿 (2013) で述べられていたように、主題・解説（主節焦点）の意味を持たない構文、言い換えれば、主節事態以外に焦点を持つ構文である。

以下、具体例とともに「名詞句焦点の助詞省略構文」「全体焦点の助詞省略構文」について

て説明する。まず、(53) の「名詞句焦点の助詞省略構文」の具体例としては、(56B) が挙げられる。この例では、形式としては主節「もらったよ」のアクセントが弱化しており、意味としては「お金」に焦点がある点で、形式と意味が一対一に対応していないと言える。(55B) と同様に、(56B) における形式と意味の対応関係を図35に示す。

- (56) 【A と B は親子である。今日は2人で親戚の集まりに来ている。B は大好きなおじさんのところへ行ってしまい A は B と離れたところで別の親戚と話している。しばらくして ふと A が B を見ると B がおじさんから何かを受け取っているのが見えた。A のところへ戻ってきた B に対して A が尋ねる】

A : ねえ さっき おじさんから何をもらったの？

B : お金 もらったよ。

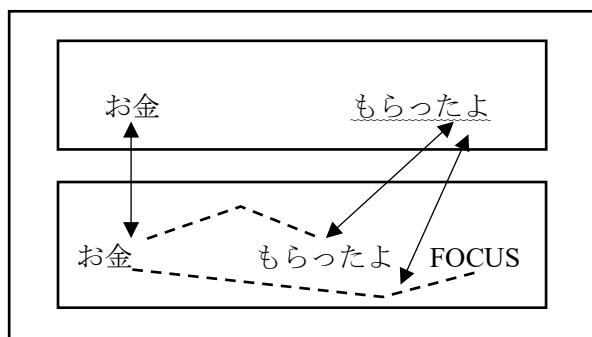


図34：本稿による(56B)の分析

続いて、(54) の「全体焦点の助詞省略構文」の具体例としては、(57B) のような、「お金をもらったこと」全体が焦点である例が挙げられる。この構文では、形式としては(56B)と同様に「もらったよ」のアクセントが弱化しており、それに対して「お金をもらったこと」全体に焦点が置かれるわけである。そのような形式と意味の対応関係を図35に示す。

- (57) 【A と B が道を歩いていると 街頭アンケートに声をかけられた。A は怪しいと思い断ったが B はアンケートに応じた。後日 A が B に会うと B は「この前のアンケートのあと いいことがあったの」と言う。それに続く会話】

A : いいことって 何があったの？

B : お金 もらったよ。

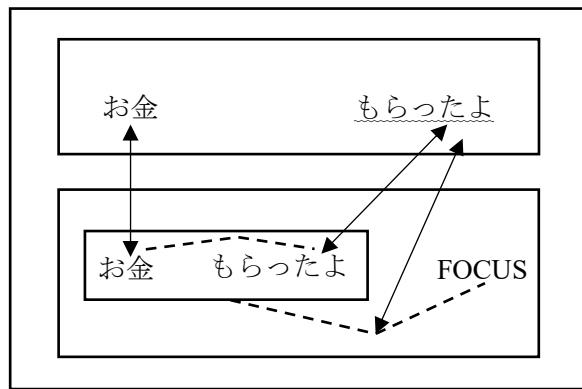


図35：本稿による(57B)の分析

#### 5.4.2.2 裸名詞句構文の形式的区別に関する読み上げ調査

5.4.1.2 節で論点(i)に関して行ったのと同様に、本節では、論点(ii)に関する読み上げ調査の結果を考察する。以下、5.4.2.2.1 節で調査の結果を示し、本稿の分析が妥当かどうかを検証し、5.4.2.2.2 節では、本稿の分析と合致しない例について検討する。なお、調査の概要是(58)から(60)の通りである。

##### (58) 調査参加者

- ・参加人数：3名（すべて女性）
- ・参加者の出生地および生育地：東京
- ・参加者の年齢：20代

##### (59) テスト文

- ・テスト文（以下、「テスト文ウ」と呼ぶ）には、3種類の異なる情報構造（主節焦点／名詞句焦点／全体焦点）の会話例が2セット、計6つの会話例が書かれている。
- ・具体的には、参加者が読む部分（Bの発話）が「こいぬ ゆずったよ<sup>31</sup>」のものと、「おかげ もらったよ」のものが情報構造によって3種類ずつ、計6例である。

<sup>31</sup> Nakagawa (2020) で用いられている例文を日本語訳したものである。なお、Nakagawa (2020) では本稿で言う主節焦点と名詞句焦点の例のみ取り上げられていたため、全体焦点の文脈を新たに加えた。

#### (60) 調査の方法

- ・調査は全て Web 会議サービス Zoom のレコーディング機能を用いて録音する。
- ・はじめに、参加者はテスト文に一通り目を通す。
- ・調査者（本稿筆者）は、録音の前に、会話の状況を説明する。
- ・その後、参加者は、会話例の A と B を黙読する。
- ・読み上げの際には、A の質問に対して B がきちんと返答をしているように読んでほしいことを伝える。
- ・調査者が A を読み上げ、参加者はそれに答える形で B を読み上げる。

##### 5.4.2.2.1 本稿の提案の妥当性検証

裸名詞句構文に関する読み上げ調査の結果は表 5 の通りである。5.4.1.2.1 節と同様、裸名詞句の末尾部分のピッチ ( $st=100Hz$ ) の値 (X) と主節の開始部分のピッチの値 (Y) の差 ( $Y-X$ ) を計算し、その上で、3 つの情報構造における ( $Y-X$ ) の値を比較した。ただし、本調査で用いたテスト文ウの主節冒頭は平板型アクセントの「ゆずった」「もらった」であるため、( $Y-X$ ) の値に加えて、主節の第 1 モーラと第 2 モーラの間（「ゆずった」の「ゆ」と「ず」の間、および「もらった」の「も」と「ら」の間）のピッチに関する値も計算した。なお、以下では、( $Y-X$ ) の値を「名詞句と主節のピッチ差」または単に「ピッチ差」と呼び、主節の第 1 モーラと第 2 モーラのピッチの差の値を「主節上昇量」と呼ぶ。本稿の提案が妥当であれば、名詞句焦点と全体焦点の例ではピッチ差も主節上昇量も正の値を取らないこと、および、主節焦点の例では少なくともピッチ差か主節上昇量のどちらかが正の値を取ることが予想される。

テスト文ウの結果は表 5 の通りである。【h-2】【h-3】【h-5】【h-6】と、【i-2】【i-3】【i-5】の計 7 例で本稿の予想と合致しない結果<sup>32</sup>が出ているが、他の 11 例については予想通りの結果となった。例えば、図 3.6 から図 3.8 は、参加者 g が発話した 3 種類の「お金もらったよ」をピッチ曲線で表したものである。図 3.6（全体焦点）と図 3.7（名詞句焦点）では「もらったよ」のアクセントが弱化し、「お金」のアクセントと一体化していることが視覚的にも確認できる。これに対して、図 3.8（主節焦点）では、「もらったよ」のアクセントが弱化していないことが分かる。

<sup>32</sup> これらの結果に関する議論は次の 5.4.2.2.2 節で行う。

参加者	例文の	テスト文	焦点	X	Y	Y-X	主節
g	子犬	5	名詞句	14.937288	14.926491	-0.010797	-0.766171
		3	全体	14.806464	14.806464	0	-0.285148
		1	主節	20.692529	10.924049	-9.76848	0.586078
	お金	6	名詞句	16.63409	16.63409	0	-0.601835
		2	全体	15.491126	15.491126	0	-0.091772
		4	主節	9.894948	10.375773	0.480825	0.970257
h	子犬	5	名詞句	14.317967	16.634782	2.316815	-3.980142
		3	全体	13.719419	13.642803	-0.076616	1.006882
		1	主節	12.843961	12.843961	0	0.919394
	お金	6	名詞句	16.445069	16.445069	0	-0.002362
		2	全体	14.250199	14.250199	0	0.762457
		4	主節	15.396633	15.396633	0	0.134774
i	子犬	5	名詞句	18.387	15.276536	-3.11069	0.045415
		3	全体	11.872	13.317115	1.44515	1.740943
		1	主節	16.042	13.659798	-2.38247	2.14346
	お金	6	名詞句	18.67	15.080701	-3.58923	-0.424527
		2	全体	19.481	19.481319	0	0.288046
		4	主節	17.318	12.735098	-4.58285	1.860501

表5：テスト文ウの結果一覧

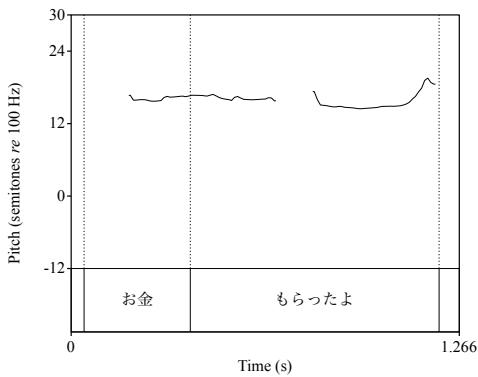


図 3 6 :【g-1】  
(全体焦点の「お金もらったよ」)

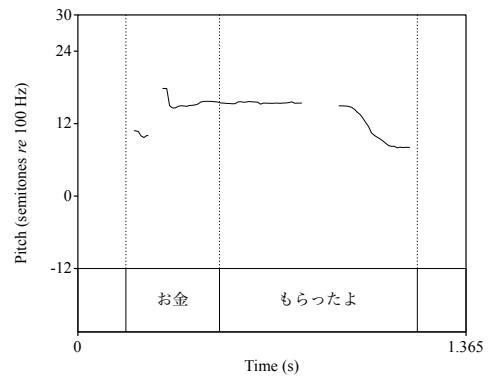


図 3 7 :【g-6】  
(名詞句焦点の「お金もらったよ」)

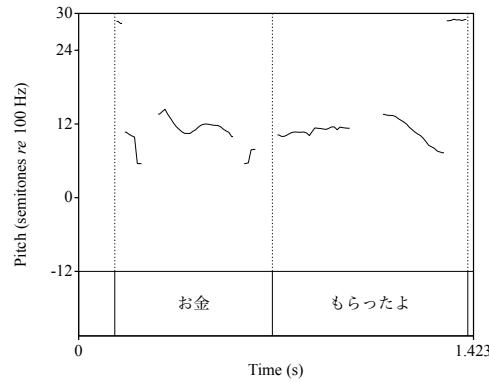


図 3 8 :【g-4】  
(主節焦点の「お金もらったよ」)

なお、【g-1】のみ名詞句末尾のピッチ（X）が 20.692529 となっており、他の例に比べてかなり高くなっている。これは、図 3 9 に示されているように、「子犬」の末尾に疑問調の文末イントネーションが生じているからである。ただし、ここでも主節「ゆずったよ」のアクセントは維持されていることに注目されたい<sup>33</sup>。

<sup>33</sup> このような例を無助詞主題構文に含めるか、あるいは「子犬？ゆずったよ。」という 2 文として分析するかは、別に議論が必要であると思われる。なお、このような例が 1 文か 2 文かを分析者が判断することの難しさについては、小亀（2021）の議論も参照されたい。

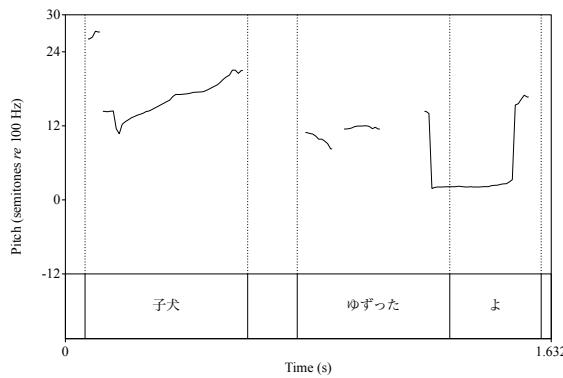


図 3 9 :【g-1】

(主節焦点の「子犬ゆずったよ」)

#### 5.4.2.2.2 本稿の予想に合致しなかった例

5.4.1.2.2 節で時間節の読み上げ調査について述べたのと同様、本調査についても、本稿の予想に合致しなかった例について述べる。本調査では、【h-2】【h-3】【h-5】【h-6】【i-2】【i-3】【i-5】の計 7 例が本稿の予想に反した結果となった。本調査でも参加者の少なさなどのため、これらの例に対して説明を与えることはできないが、以下の 2 点だけを述べておく。

1 点目は、これら 7 例のうち 5 例が、全体焦点または名詞句焦点の情報構造となっている点である。つまり、参加者 *h* はテスト文 2 と 3 (いずれも全体焦点) を、参加者 *i* はテスト文 2 と 3 と 5 (5 のみ名詞句焦点) を読み上げる際に、名詞句のアクセントと主節のアクセントの両方を維持させて (本稿の提案で言えば「無助詞主題構文」すなわち主節焦点のイントネーションパターンで) 読み上げたということである。ここでは参加者 *i* によるテスト文番号 5 の読み上げを図 4 0 に示す。

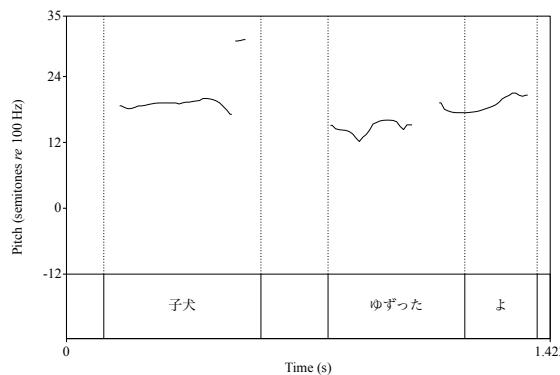


図 4 0 :【i-5】

(名詞句焦点の「子犬ゆずったよ」)

2点目は、これらの例に関する容認度の揺れである。5.4.1.2.2節で時間節構文に関して行ったのと同様に、東京出身の日本語母語話者<sup>34</sup>に【h-2】【i-3】【i-5】を聞いてもらい、それぞれ【g-2】【g-3】【g-5】と比較してもらった。すると、本稿筆者の判断とは異なり、3つすべての例に関して、参加者 g の読み上げよりも参加者 h や i の読み上げの方が自然であると判断した。この容認度の違いが何に起因するものであるかを考察するためには、今後さらなる調査が必要であると思われる。

#### 5.4.2.3 考察：論点 (ii) に関する先行研究との関係

本節では、本稿の提案によって、論点 (ii) に残されていた問題点が解決することを示す。具体的には、加藤（2003）と丹羽（2006）による (61)(62) の指摘に対して、本稿の分析では統一的な説明が与えられることを述べる。

- (61) 裸名詞句を強く発音することで、裸名詞句の指示対象が焦点であることを表せる。
- (62) 裸名詞句と主節の間にポーズを置くことで、裸名詞句の指示対象が主題であることを表せる。

まず、加藤による指摘 (61) については、本稿の提案する「名詞句焦点の助詞省略構文」（(53) および図3.1）から見れば、少なくとも名詞句のアクセントは弱化しないという事実を捉えたものであると解釈できる。ただし、(19) に関して郡（2020）や泉谷（2008）の主張の中で説明した通り、焦点を表す部分（この場合、裸名詞句）が取り立てて強調される必要はなく、あくまでその直後の部分（この場合、主節）のアクセントが弱化していることが義務的な条件である。

なお、テスト文ウの調査では観察されなかったが、助詞省略名詞句の指示対象が焦点であることを明確に伝えようと話し手が意図した場合には、加藤の指摘するような「強い発音」も十分生じ得る。この場合、5.4.1.2.3節で時間節構文に関して考察したのと同様に、助詞省略構文における形式と意味の関係をより類像的に表そうとする動機付けが働いていると考えられる。

---

<sup>34</sup> 5.4.1.2.2節の母語話者と同じ話者である。

続いて、丹羽による指摘 (62) は、無助詞主題構文の主節部分のアクセントが弱化しない点（(52a) 図3.8）に付随する現象を捉えたものと位置付けられる。つまり、無助詞主題構文の場合、主節のアクセントを上げ直す必要があるため、必然的に無助詞名詞句と主節との間に短いポーズが生じ得るのである。

なお、このことは、影山（1993）における次の指摘と同様の現象であると考えられる。影山によれば、「動脈硬化」や「気分転換」のように、1つのアクセントの山を形成する複合語は「一息で発音される」のに対して、「地価高騰」や「社員募集」のように、「高騰」や「募集」が元々のアクセントを保持する複合語（影山の用語では「S構造複合語」）では、「地価」と「高騰」の間や「社員」と「募集」の間に「短いポーズがあり、全体で1つのアクセントの山にはならない」という特徴が見られるとされる（影山 1993：208）。

## 5.5 まとめ

本節では、時間節構文と裸名詞句構文が持つ情報構造を例に、Croftの構文文法による形式と意味の非類像性に関する主張が日本語文法の記述や分析についても有用であることを示した。具体的には、時間節構文における情報構造の表し分けと、裸名詞句構文における形式的区別という2つの論点に対して、どちらの現象も、イントネーションのパターンと情報構造とが非類像的に対応する2つの構文（すなわち、(27) と (28)）に動機付けられていることを主張した。これによって、各論点の先行研究の分析に残されていた問題点を解決することが可能となった。

本章の考察が意義を持つとすれば、それは、具体的な構文の意味面だけでなく形式面、特に、音韻面にも着目すること、さらに、ある意味がどのような形式によって表されているかという観点から文法現象を捉えることで、構文同士の関連が捉えられたり、各構文についての理解がより深まったりする点にあると言える。これは第4章で提示した視点とも重なるが、本章ではそのうち、形式と意味の非類像的対応という側面に焦点を当てて考察を行ったものである。

## 第6章 おわりに

本稿では、現代日本語における時間を表す複文と、それに関わる裸名詞句構文に関する議論を例に、Croft の構文文法が前提とするような類型論的基盤が日本語の文法研究に与える新たな視点について論じてきた。本章では、本稿がここまで明らかにしたこと、本稿の議論が日本語の文法研究に対して貢献できたであろうこと、および、本稿に残された課題について述べ、本稿を総括する。

まずは、本稿が第3章から第5章の各章で明らかにしたことを章ごとにまとめることとする。第3章では、日本語の無助詞主題構文を適切に扱うための分析モデルについて議論を行った。本稿は、先行研究による「左方転位モデル」に残された問題点を解決するためには、無助詞主題構文は、日本語の文法体系に固有の構文であると捉える必要があることを主張した。具体的には、左方転位モデルが抱える問題点として、主節内に有形の代名詞的要素が復元できるかどうかという基準を設定することで、無助詞主題構文の一部の例が分析対象から除外されてしまうことと、日本語ではそもそもそのような基準を設定する必要はないことを指摘した。この問題点を解決するために、本稿は、Matsumoto (1988) を参照しながら、日本語の文法体系の中で無助詞主題構文を適切に扱うためのモデルを提案した。

第4章では、日本語の無助詞時間節構文の構文的位置付けに関する議論を行った。本稿は、先行研究に残されている問題点として、時間節と同様の形式を持つが異なる意味を表す構文との関係や、時間節が主節を連用修飾できる理由が十分に論じられていない点を指摘した。この問題点に対して、本稿では、無助詞時間節構文は、本稿第3章でモデル化した無助詞主題構文の下位構文として、ネットワークを成して存在しているという分析を提案した。これによって、無助詞時間節構文が他の構文との間に有する関係が明らかになるとともに、この構文が先行研究で記述されているような意味を持つメカニズムも明らかになった。

第5章では、時間節構文の表す情報構造と、裸名詞句構文の形式的区別に関する議論を行った。各論点の分析に関して問題点を指摘した上で、本稿は、先行研究の分析に代わって、郡 (1992 など) の主張を基に、時間節構文における焦点化解釈の有無と、裸名詞句構文における構文的区別は、文内イントネーションと情報構造とが非類似的に対応する各構文によって実現しているという分析を提案した。これによって、両論点を統一的な観点から理論化することが可能となり、各論点に関しても、より例外の少ない分析が可能となった。

続いて、本稿の議論が日本語の文法研究に対して持ち得る意義について、2点述べる。一点目は、本稿が各章で示した4つのモデル、すなわち、第3章で提案した無助詞主題構文の分析モデル、第4章で提案した無助詞時間節構文のネットワークモデル、第5章で提案した時間節構文の焦点化モデル、裸名詞句構文の構文的区別モデルに関するものである。この4つのモデルは、これまでに国語学や日本語学で指摘および記述されてきた事実に矛盾することなく、かつ、Croftの構文文法で指向されているような、通言語的に観察される形式的・意味的多様性にも耐え得るモデルであると言える。通言語的観点や言語類型論的基盤を日本語という個別言語の研究に取り入れることの可能性を示せたことは、本稿の持つ一つの意義であると言えよう。

二点目は、一点目とも関連するが、日本語の文法体系を、構文、すなわち、形式と意味の組み合わされた記号的単位という観点から捉えることの有用性を示した点にある。文法研究の目的は、言語における形式と意味の対応関係の考察にあるとしばしば言われる（尾上2004：1、仁田1997：11、益岡1991：1-2など）が、本稿で扱った時間節構文や裸名詞句構文の研究では、従来、その意味的側面に関する研究に比べて、形式的側面に関する研究や、両側面の対応関係に関する研究は、あまり関心を集めてこなかったと言える。本稿の議論は、「構文」という概念を分析の基本に据えることで、文法研究の目的を形式と意味の対応関係の考察に素朴に一貫させることができ、また、それによって、日本語の文法研究に対する「新た」一つの視点を示したものといえ得る。

そのような視点とは、各章の議論を基に言えば、具体的には以下のようなものである。まず、第3章の議論で言えば、無助詞主題構文を、形式的側面と意味的側面が言語固有に結びついた単位であると捉えることによって、先行研究では分析対象から除外されていた例をも含できる分析モデルが提案できることを明らかにした。第4章の議論では、これまで「複文」あるいは「連用節」といった意味的ラベルで分類されてきた無助詞時間節構文を、形式と意味の対応という観点から見直すことで、これまでそれほど注目されることのなかった無助詞主題構文との関連が指摘できることを明らかにした。さらに、第5章では、時間節構文や裸名詞句構文における意味的側面（特に、情報構造的側面）が、非類像的な様相で形式的側面（特に、音韻的側面）と組み合わされていると捉えることで、より例外が少なく、かつ、2つの構文を統一的に扱えるモデルが提案できることを明らかにした。

しかし、本稿では十分な考察が及ばなかった事柄や、今後明らかにすべき事柄もいくつか存在する。まず、第3章では、意味地図モデルを用いて日本語の無助詞主題構文と英語の左

方転位構文を対照したが、本稿が示した意味地図は、指示対象の認知的活性度のごく一部に着目したものとなっている。今後は他の言語との対照も含めた、より精密で広範囲の概念的意味をカバーできる研究が求められよう。

第4章については、無助詞主題構文と無助詞時間節構文の関係に関連して、いわゆる語彙レベルにおいても同様の現象が存在すると考えられる。中村（2000）などの研究によれば、「明日」や「昨日」など、直示的（deictic）な意味の表現は、無助詞で用いられることが多いとされる（中村2000：158など）。本稿が提示したモデルがその点も含めて説明できるかどうかについては、今後の課題としたい。

第5章については、本稿が示した情報構造のモデルが先行研究における他の「連用節」や「並列節」などについても適用可能かどうかを考察する必要があると思われる。郡（1992）では、連体修飾における非制限修飾と制限修飾の違いもイントネーションのパターンと対応を持つと述べられているが、そのことと情報構造との関連や、そもそも「修飾とは何か」といった問いとの関連も興味深い。

最後に、本稿で提示した考え方が、通言語的視点による日本語研究の有用性を多少なりとも示すに耐えるものであることを切に願い、本稿の議論を終えることにする。

## 参考文献一覧

- 泉谷聰子（2008）「日本語におけるフォーカスの生成と知覚—東京方言と大阪方言を比較して—」『音声言語VI』：53–66.
- 井上和子（1976）『変形文法と日本語上・下』，大修館書店.
- 岩崎卓（1998）「アト, アトデ, アトニのちがいについて」『光華女子大学紀要』36：187–204.
- 岡田春奈（2015）「助詞なし名詞句の意味機能」『日本語文法学会第16回大会発表予稿集』：224–231.
- 奥津敬一郎（1974）『生成日本文法論：名詞句の構造』，大修館書店.
- 尾上圭介（1996）「主語にハもガも使えない文について」『認知科学会第13大会ワークショッピング「日本語の助詞の有無をめぐって」』.
- 尾上圭介（2014）「文の種類」 日本語文法学会編『日本語文法事典』：558–562, 大修館書店.
- 大谷博美（1995）「ハとガとφ—ハもガも使えない文—」宮島達夫／仁田義雄編『日本語類義表現の文法（上）単文編』：287–295, くろしお出版.
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』，ひつじ書房.
- 加藤重広（2003）『日本語修飾構造の語用論的研究』，ひつじ書房.
- 莉宿紀子（2014）「「無助詞」研究の現状と課題」早稲田大学教育・総合科学学術院『学術研究（人文科学・社会科学編）』62：147–162.
- 金智賢（2016）『日韓対照研究によるハとガと無助詞』，ひつじ書房.
- 久野暉（1973）『日本文法研究』，大修館書店.
- 黒崎佐仁子（2003）「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2：77–93.
- 郡史郎（1992）「プロソディーの自律性—フレージングを定める規則について」『言語』第8号：31–37.
- 郡史郎（2008）「東京方言におけるアクセントの実現度と意味的限定」『音声研究』第12巻第1号：34–53.
- 郡史郎（2013）「日本語の意味論的フォーカスと対比のフォーカスの音声的特徴」『音声言語の研究』6：23–26.
- 郡史郎（2017）「日本語イントネーションについてのいくつかの聴取実験」『言語文化研究』43：249–272.
- 郡史郎（2020）『日本語のイントネーション—しくみと音読・朗読への応用』，大修館書店.

- 小亀拓也 (2021) 「聞き手における文の認定」『日本語文法』21巻2号 : 20–35.
- 小屋逸樹 (2007) 「無助詞コピュラ文：その発話行為的性格について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』38 : 1–20.
- 小矢野哲夫 (2014) 「格助詞」 日本語文法学会編『日本語文法事典』: 102–103, 大修館書店.
- 三枝令子 (2005) 「無助詞格：その要件」『一橋大学留学生センター紀要』8 : 17–28.
- 定延利之 (2013) 「量化の意味への言語的手がかり」木村英樹教授還暦記念論叢刊行会編『木村英樹教授還暦記念 中国語文法論叢』: 332–351, 白帝社.
- 品川なぎさ (2006) 「時間を表す従属節「あと」「あとに」「あとで」について」『総合政策研究紀要』12 : 21–32.
- 全美炷 (2017) 『東京語におけるアクセント句の形成–実験及びコーパスによる dephrasing の分析』, くろしお出版.
- 園部すみ (2013) 「現代日本語の従属節選択と複文の類型について」熊本大学大学院社会文化科学研究科博士論文.
- 田村幸誠 (2021) 「中央アラスカ・ユピック語からみた体言化理論」鄭聖汝・柴谷方良編『体言化理論と言語分析』: 353–397, 大阪大学出版会.
- 寺村秀夫 (1992) 「時間的限定の意味と文法的機能」『寺村秀夫論文集I』: 127–156, くろしお出版. (初出: 渡辺実編 1983. 『副用語の研究』, 明治書院.)
- 中村ちどり (2001) 『日本語の時間表現』, くろしお出版.
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して一』, くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法 6 第11部 複文』, くろしお出版.
- 丹羽哲也 (2006) 『日本語の題目文』, 和泉書院.
- 丹羽哲也 (2014) 「無助詞」 日本語文法学会編『日本語文法事典』: 602–603, 大修館書店.
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が』』, くろしお出版.
- 野田尚史 (2002) 「単文・複文とテキスト」 野田尚史／益岡隆志／佐久間まゆみ／田窪行則編『日本語の文法 4 複文と談話』: 3–61, 岩波書店.
- 橋本修 (2003) 「日本語の複文」 北原保雄監修・編集『朝倉日本語講座 5 文法 I』: 181–199, 朝倉書店.
- 長谷川ユリ (1993) 「話したことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80 : 158–168.
- 馬場俊臣 (1996) 「時間的後続性を表す表現：「シタあと, あとで, あとに」を中心として」『北海道教育大学紀要 第一部 A 人文科学編』47(1) : 33–42.

- 早瀬尚子（2003）「William Croft (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory from Typological Perspective* (Oxford University Press)」畠山雄二編『書評から学ぶ理論言語学の最先端（上）』：114–118，開拓社。
- 樋口万喜子（2000）「存在文における無助詞の機能」『横浜国大国語研究 第17–18卷』：43–52。
- 藤村逸子／大曾美恵子／大島ディヴィッド義和（2011）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』：43–72，ひつじ書房。
- 藤原雅憲（1998）「助詞省略の語用論的分析」『日本語論究 現代日本語の研究』3：129–148，和泉書院。
- 堀江薰／プラシャント・パルデシ著，山梨正明編（2009）『言語のタイプロジー—認知類型論のアプローチ（講座：認知言語学のフロンティア 第5卷）』，研究社。
- 前田直子（2009）『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』，くろしお出版。
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』，くろしお出版。
- 益岡隆志（1997）『複文』，くろしお出版。
- 益岡隆志（2014）「複文<sup>1</sup>」日本語文法学会編『日本語文法事典』：537–540，大修館書店。
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』，くろしお出版。
- 松浦幸祐（2020）「無助詞構文の構文文法的考察」『日本語・日本文化研究』30：106–120。
- 松浦幸祐（2021）「無助詞時間節構文の構文文法的考察」『日本語・日本文化研究』31：36–50。
- 松木正恵（2014）「連体修飾節における底名詞の性質と名詞性接続成分—連体複文構文と連用複文構文の接点を求めて」益岡隆志／大島資生／橋本修／堀江薰／前田直子／丸山岳彦編『日本語複文構文の研究』：85–127，ひつじ書房。
- 松本善子（1993）「日本語名詞性構造の語用論的考察」『日本語学』12(11)，明治書院。
- 三上章（1953）『現代語法序説』刀江書院。
- 南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』，大修館書店。
- 山泉実（2013）「左方転位構文と名詞性構造の文中での意味的・情報構造的機能」西山佑司編『名詞性構造の世界 その意味と解釈の神秘に迫る』：431–457，ひつじ書房。
- 吉川正人（2011）「生産性の漸増が語る統語知識の発達：パターン束モデルに基づく段階的発達プロセスの計算的実証」『日本認知言語学会論文集』第11卷：618–621。

- Aarts, Bas (2004) “Modelling linguistic gradience” In *Studies in Language* 28(1): 1–49.
- Aarts, Bas (2007) “In defence of distributional analysis, *pace Croft*” In *Studies in Language* 31(2): 431–443.
- Aissen, Judith (1980) “Possessor ascension in Tzotzil”, In Laura Martin (ed.) *Papers in Mayan Linguistics*, Lucas publishers, 89–108.
- Comrie, Bernard and Thompson, Sandra A. (1985/2007) “Lexical nominalization,” In Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 3: Grammatical Categories and the Lexicon*, Cambridge University Press, 334–381.
- Croft, William (2001) *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. New York: Oxford University Press. (ウィリアム・クロフト『ラディカル構文文法』, 山梨正明監訳, 渋谷良方訳, 研究社, 2018.)
- Croft, William (1990/2003) *Typology and Universals*. Cambridge University Press.
- Croft, William (2005) “Logical and typological arguments for Radical Construction Grammar” In *Construction grammars: Cognitive grounding and theoretical extensions*, John Benjamins Publishing Company, 273–314.
- Croft, William (2007) “Beyond Aristotle and gradience: A reply to Aarts” In *Studies in Language* 31(2): 409–430.
- Croft, William (2010) “Ten unwarranted assumptions in syntactic argumentation” In Kasper Boye and Elisabeth Engberg-Pedersen (eds.) *Language usage and language structure*, Walter de Gruyter, 313–350.
- Croft, William (2020) *Ten Lectures on Construction Grammar and Typology* (Distinguished Lectures in Cognitive Linguistics). Leiden: Brill.
- Croft, William and D. Alan Cruse (2004) *Cognitive Linguistics*. Cambridge University Press.
- DeLancy, Scott (2002) “Relativization and Nominalization in Bodic” *Proceedings of the Twenty-Eighth Annual Meeting of the Berkley Linguistic Society: Special Session on Tibeto-Burman and Southeast Asian Linguistics*: 55–72.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory Volume 2: Grammatical Topics*, Oxford University Press.
- Godfrey, J., E. Holliman and J. McDaniel (1992) “Switchboard: Telephone speech corpus for research and development” *International Conference on Acoustics, Speech and Signal Processing* 92:

517–520.

Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*.

University of Chicago Press.

Gregory, Michelle L., and Laura A. Michaelis (2001) “Topicalization and left-dislocation: A functional opposition revisited” In *Journal of Pragmatics* 33: 1665–1706.

Gundel, Jeanette (1999) “On Different Kinds of Focus.” In P. Bosch and R. van der Sandt (eds.) *Focus: Linguistic, Cognitive, and Computational Perspectives*. Cambridge University Press, 293–305.

Haiman, John (1980) “The iconicity of grammar: isomorphism and motivation”, In *Language* 54: 565–589.

Haspelmath, Martin (2019) “Ergativity and depth of analysis” In *Rhema* 4, 108–130.

Haspelmath, Martin (2021) “General linguistics must be based on universals (or non-conventional aspects of language)” In *Theoretical Linguistics* 47(1-2), 1–31.

Keenan, Edward and Comrie, Bernard (1977) “NP accessibility and universal grammar.” *Linguistic Inquiry* 8: 63–100.

Lambrecht, Knud (1994) *Information Structure and Sentence Form: Topic, Focus and the Mental Representations of Discourse Referents*, Cambridge University Press.

Lambrecht, Knud (2001) “Dislocation” In Martin Haspelmath, Ekkehard König, Wulf Oesterreicher, and Wolfgang Raible (eds.), *Language Typology and Language Universals: An International Handbook 2*. Walter de Gruyter, 1050–1078.

Langacker, Ronald W. (1976) “Semantic Representations and the Linguistic Relativity Hypothesis” In *Foundations of Language Vol. 14*: 307–357.

Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.  
(ロナルド・W・ラネカー『認知文法論序説』山梨正明監訳, 碓井智子／大谷直輝／木原恵美子／児玉一宏／中野研一郎／深田智／安原和也訳, 研究社, 2011.)

Matsumoto, Yoshiko (1988) “Semantics and Pragmatics of Noun-Modifying Constructions in Japanese” In *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkley Linguistics Society*. 166–175.

Matsuura, Kosuke (2021) “Constructional parallelisms between temporal adverbial construction and

bare NP construction in Japanese” Poster presented at The 29th Japanese/Korean Linguistics Conference.

- Nakagawa, Natsuko (2020), *Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation* (Topics at the Grammar-Discourse Interface 8). Berlin: Language Science Press.
- Prince, Ellen F. (1984) “Topicalization and left-dislocation: A functional analysis” In *Annals of the New York Academy of Sciences* 433: 213–225.
- Strawson, Peter F. (1971) “Identifying reference and truth-values” In D. Steinberg and L. Jakovits (eds.), *Semantics*. 86–99. Reprinted from *Theoria* 30, 1964. 96–118.
- Shibatani, Masayoshi (2017) “Nominalization” In Masayoshi Shibatani and Shigeru Miyagawa (eds.) *Handbook of Japanese Syntax*. Mouton de Gruyter, 271–331.
- Shibatani, Masayoshi (2018a) “Nominalization in crosslinguistic perspective” In Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*. Mouton de Gruyter, 345–410.
- Shibatani, Masayoshi (2018b) “Nominalization” In Yoko Hasegawa (ed.) *Handbook of Japanese Linguistics*. Cambridge Press, 432–462.
- Shibatani, Masayoshi (2019) “What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization.” In Roberto Zariquiey, Masayoshi Shibatani, and David W. Fleck (eds.) *Nominalization in Languages of the Americas*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 15–167.
- Shirota, Chieko (2010) “日本語文における意味的関係—言語形式と韻律—.” In 『ヨーロッパ日本語教育：ヨーロッパ日本語教育シンポジウム報告・発表論文集』, 61–69.
- Van Langendonck, Willy (2007) “Iconicity” In Dirk Geeraerts and Hubert Cuyckens (eds.) *The Oxford Handbook of Cognitive Linguistics*.
- Yamaizumi, Minoru (2011) “Left-Dislocation in Japanese and Information Structure Theory.” In *NINJAL Research Papers 1*: 77–92.
- Yamaizumi, Minoru (2018) “Reconsidering the Layered Structure of the Clause in Japanese: Focusing on the NP-wa and Left-dislocation.” In 大阪大学言語社会学会 『EX ORIENTE 25』, 47–89.

## 付録

### <テスト文ア一覧>

(1)

A : その時計 かっこいいですね。いつ買ったんですか？

B : 大阪へ行ったとき この時計を買いました。

(2)

A : 通勤時間が電車で片道 1 時間もかかるそうですね。電車に乗ってるあいだって 何か  
してるんですか？

B : 電車に乗ってるあいだ 本を読んでます。

(3)

A : 最近 美容に気をつかおうと思ってます。お風呂上がりって 何かした方がいいことは  
ありますか？

B : お風呂に入ったあと ストレッチをしてください。

(4)

A : 最近 たくさん本を読んでるって聞きました。忙しそうなのに いつ本を読んでるんで  
すか？

B : 電車にのってるあいだ 本を読んでます。

(5)

A : 先週 大阪へ行ったそうですね。大阪で何かしましたか？

B : 大阪へ行ったとき この時計を買いました。

(6)

A : 体が硬いから ストレッチをしようと思ってるんです。ストレッチって いつすればいい  
いんですか？

B : お風呂に入ったあと ストレッチをしてください。

<テスト文イ一覧>

(1)

A : その時計 かっこいいですね。いつ買ったんですか？

B : 大阪へ行ったときに この時計を買いました。

(2)

A : 通勤時間が電車で片道 1 時間もかかるそうですね。電車に乗ってるあいだって 何か  
してるんですか？

B : 電車に乗ってるあいだに 本を読んでます。

(3)

A : 最近 美容に気をつかおうと思ってます。お風呂上がりって 何かした方がいいことは  
ありますか？

B : お風呂に入ったあとで ストレッチをしてください。

(4)

A : 最近 たくさん本を読んでるって聞きました。忙しそうなのに いつ本を読んでるんで  
すか？

B : 電車にのってるあいだに 本を読んでます。

(5)

A : 先週 大阪へ行ったそうですね。大阪で何かしましたか？

B : 大阪へ行ったときに この時計を買いました。

(6)

A : 体が硬いから ストレッチをしようと思ってるんです。ストレッチって いつすればいい  
いんですか？

B : お風呂に入ったあとで ストレッチをしてください。

<テスト文の一覧>

(1)

【AとBは道端に捨てられている子犬を見つけた。その日はBが子犬を持ち帰ることになった。次の日 AがBに質問する際の会話】

A：あの子犬って どうなった？

B：子犬 ゆずったよ。

(2)

【AとBが道を歩いていると 街頭アンケートに声をかけられた。Aは怪しいと思い断ったが Bはアンケートに応じた。後日 AがBに会うと Bは「この前のアンケートのあと いきことがあったの」と言う。それに続く会話】

A：いいことって 何があったの？

B：お金 もらったよ。

(3)

【AとBは 猫や犬などの保護施設で働く同僚である。Aは昨日休みを取っていたため その間に職場で何かあったかどうかをBに聞こうとしている。】

A：ねえねえ 昨日 何かあった？

B：子犬 ゆずったよ。

(4)

【Bは先月居酒屋のアルバイトを辞職した。しかし Bは辞職した月の分の給料が振り込まれていないことに気づき 友人のAに相談した。Aは直接居酒屋に給料を取りに行くようBにアドバイスした。後日 AがBに尋ねる】

A：そういえば お金はもらえた？

B：お金 もらったよ。

(5)

【A と B は 猫や犬などの保護施設で働く同僚である。A は昨日休みを取っていたのだが  
どうやらその間に B が何らかの動物を里親にゆずつたらしい。出勤した A が B にそのこ  
とを尋ねる】

A : 昨日何かゆずつたって聞いたけど 何をゆずつたの？

B : 子犬 ゆずつたよ。

(6)

【A と B は親子である。今日は2人で親戚の集まりに来ている。B は大好きなおじさんの  
ところへ行ってしまい A は B と離れたところで別の親戚と話している。しばらくして  
ふと A が B を見ると B がおじさんから何かを受け取っているのが見えた。A のところへ  
戻ってきた B に対して A が尋ねる】

A : ねえ さっき おじさんから何をもらったの？

B : お金 もらったよ。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたって、また、博士後期課程在学中の研究を進めるにあたって、本当に多くの方々からご指導やご協力をいただきました。以下に心より感謝申し上げます。

まず、指導教員の今井忍先生に感謝申し上げます。今井先生は、筆者の拙い議論にも真摯に耳を傾けてくださるとともに、個人指導やゼミ発表の際には、常にあたたかいお言葉をかけてくださいました。今井先生のおっしゃる「面白いですね」や「納得しました」といった励ましのお言葉には、何度も心を救われたものです。

続いて、副指導教員の山泉実先生に感謝申し上げます。山泉先生には、特に第3章の議論に関して多くのご指導をいただきました。筆者による批判や提案は、山泉先生のご研究にしてみれば取るに足らないものであったかもしれません、筆者なりに先生への学恩を表すことができていれば幸いです。

同じく副指導教員の田村幸誠先生に感謝申し上げます。田村先生には、Croft の構文文法など、本稿の骨子にも関わる部分について非常に丁寧にご指導いただきました。ご指導の折には、筆者の些細な質問についても熱心に議論してくださいださるだけでなく、いつも議論の最後には前向きなお言葉で筆者を勇気づけてくださいました。

また、大阪大学日本語日本文化教育センターの岩井康雄先生には、第5章のイントネーションに関する部分についてご指導をいただきました。誠にありがとうございます。

大学院の先輩方、同級生、後輩達にも感謝申し上げます。特に、小亀拓也さんには、週に一度の勉強会を開いていただき、先行研究の理解についてアドバイスをいただきたり、お互いの研究の近況を話し合ったりするなど、筆者のことを常に気にかけていただきました。また、茶圓直人さんには、東京に住んでいらっしゃる弟の智希さんに声をかけていただき、第5章の調査の参加者集めを手伝っていただきました。

調査参加者を募る際には、大阪大学文学研究科博士後期課程の谷垣美有さんと、東京大学総合文化研究科博士後期課程の宮田瑞穂さんにも大変お世話になりました。お名前を記して深く感謝申し上げます。

上にお名前を挙げた方々のほかにも、本当に多くの方々からご指導やご協力をいただきました。全員のお名前を挙げられず残念ですが、皆様、本当にありがとうございます。

最後に、いつも筆者を様々な面で支えてくれている家族への感謝を記します。